祈りについて

オリゲネス
藤遥　制作

1〜2章　人にできないことを、恵みが可能にする

1:1 あまりに大きく、人を超えていることがあります。それは、滅びゆくわたしたちの本性をはるかに上回っているため、理性ある死すべき種族には捉えることができません。しかし、それらも、神の恵みによってできるようになります。その恵みは、神から人々に、豊かに、量り知れないほど注がれています。イエス・キリストは、わたしたちへの、まさるもののない恵みに仕える方です。このかたを通して、また、ともに働いてくださる御霊を通して、それらは神のみこころによってできるようになるのです。現に、知恵を得ることは、人の本性にはできないことです。万物は、この知恵によって造られています。ダビデによれば、神は『すべてのものを知恵をもって』お造りになったからです（詩篇一〇四・二四）。その知恵を得ることが、わたしたちの主イエス・キリストによって、できないことからできることになります。このかたは、『神に立てられて、わたしたちの知恵となり、義と聖とあがないとになられた』方です（第一コリント一・三〇）。『どんな人が神の計らいを知ろうか。主が何を望まれるかを、だれが思い描けようか。死すべき者の考えは臆病で、わたしたちの思いは確かでないからである。朽ちるからだは魂を重くし、土の幕屋は、思い煩いの多い知性を押さえつける。わたしたちは、地上のことさえかろうじて推し量る。天にあることを、だれが探り出したか』（知恵九・一三〜一六）。『天にあること』を人が探り出すことはできない、と言わない人がいるでしょうか。しかし、それでも、このできないことが、神のあふれる恵みによってできるようになります。実際、第三の天にまで引き上げられた人は、おそらく、三つの天にあることを探り出したのです。『口に言い表わせない、人間が語ってはならない言葉』を聞いたことのゆえにです（第二コリント一二・二〜四）。また、人が主の思いを知ることができる、とだれが言えるでしょうか。しかし、このことも、神はキリストを通して恵んでくださいます[1]。自分たちの主人の意志を、もはや[2]。そのとき、主は、彼らに意志を教えてくださいます。主人であることを望まず、かつて主人であった人々の友に変わってくださる方の意志です。さらに、『人間の思いは、その内にある人間の霊以外に、だれも知らない。それと同じように神の思いも、神の御霊以外には、知るものはない』のです（第一コリント二・一一）。しかし、『神の御霊以外には』だれも『神の思い』を知らないのなら、人間が『神の思い』を知ることはできません。では、それがどのようにしてできるようになるのか、このことも考えてみなさい。こう書いています。『ところが、わたしたちが受けたのは、この世の霊ではなく、神からの霊である。それによって、神から賜わった恵みを悟るためである。わたしたちは、これを語るにも、人間の知恵が教える言葉を用いないで、御霊の教える言葉を用いる』（第一コリント二・一二〜一三）。

2:1 神を敬うことに篤く、労をいとわないアンブロシオスよ、慎み深く、雄々しいタティアネよ。わたしは、サラに『女のならい』がやんでいたように（創世記一八・一一）、タティアネからもそれがやんでいることを、すでに祈っています。しかし、あなたがたは、きっといぶかしく思っているでしょう。わたしたちの前にある論は、祈りについてです。それなのに、なぜ序で、人にはできないことが神の恵みによってできるようになる、と述べたのか、と。わたしたちの弱さから言えば、これはできないことの一つだと、わたしは確信しています。祈りについての論のすべてを、正確に、また神にふさわしく明らかにすることです。どのように祈るべきか、祈りのときに神に何を言うべきか、どの時がどの時よりも祈りにふさわしいか、という論もそうです[3]。『すぐれた啓示』を受けているので、自分について『見たり聞いたりしている以上に、人に買いかぶられ』ないよう用心していた人（第二コリント一二・六〜七）[4]。その人が、『祈るべきように』祈ることを知らない、と告白していること。実際、パウロは、祈るべきことを、『祈るべきようには、わたしたちは知らない』と言っています（ローマ八・二六）。しかし、祈ることだけが必要なのではありません。『祈るべきように』祈ることも、祈るべきことを祈ることも必要です。仮に祈るべきことを捉えること

ができたとしても、『祈るべきように』をも身につけないなら、それは不十分だからです。また、祈るべきことを祈るのを知らないなら、『祈るべきように』が、わたしたちに何の益になるでしょうか。2:2 さて、この二つのうちの一つ、つまり祈るべきことは、祈りの言葉のことです。一方、『祈るべきように』というのは、祈る人のありさまです。例を挙げれば、祈るべきことは、次のようなものです。『大きなものを求めなさい。そうすれば、小さなものは添えて与えられる』。『天のものを求めなさい。そうすれば、地のものは添えて与えられる』[5]。『あなたがたをはずかしめる者のために祈れ』（ルカ六・二八）。『だから、収穫の主に願って、その収穫のために働き人を送り出すようにしてもらいなさい』（マタイ九・三八）。『試みに入らないように祈りなさい』（ルカ二二・四〇）。『あなたがたの逃げるのが、冬または安息日にならないように祈れ』（マタイ二四・二〇）。『祈る場合、くどくどと祈るな』（マタイ六・七）。そのほか、これらに似たものもそうです。一方、『祈るべきように』は、次のようなものです。『男は、怒ったり思い乱れたりしないで、どんな場所でも、きよい手をあげて祈ってほしい。また、女はつつましい身なりをし、適度に慎み深く身を飾るべきであって、髪を編んだり、金や真珠をつけたり、高価な着物を着たりしてはいけない。むしろ、良いわざをもって飾りとすることが、信仰を言いあらわしている女に似つかわしい』（第一テモテ二・八～一〇）。また、次の言葉も、『祈るべきように』を教えるものです。『だから、祭壇に供え物をささげようとする場合、兄弟が自分に対して何かうらみをいだいていることを、そこで思い出したなら、その供え物を祭壇の前に残しておき、まず行ってその兄弟と和解し、それから帰ってきて、供え物をささげることにしなさい』（マタイ五・二三～二四）。実際、理性あるものが神へささげることのできる供え物で、祈りの香り高い言葉にまさるものが、何かあるでしょうか。罪から来る悪臭を持たない良心から、ささげられる祈りです。さらに、次の言葉も『祈るべきように』を教えます。『互に拒んではいけない。ただし、合意の上で、祈に専心するために、しばらく相別れ、それからまた一緒になることは、さしつかえない。それは、あなたがたの自制力のないことのゆえに、サタンがあなたがたのことを喜ぶことのないためである』（第一コリント七・五）。結婚には、口にせずにおくべき秘め事があります。その行いは、より慎み深く、より緩やかで、より情欲を離れたものにならなければなりません。そうでないなら、これらのことによって『祈るべきように』が妨げられるからです。そのとき、ここで言われている『合意』（シュンフォーニア）が、情欲の不協和（アシュンフォーノン）を消し去ります。そして、自制のなさを尽きさせ、サタンが人の不幸を喜ぶのを抑えるのです。このほか、次の言葉も『祈るべきように』を教えます。『また立って祈るとき、だれかに対して、何か恨み事があるならば、ゆるしてやりなさい』（マルコ一一・二五）。また、パウロの書いた次の言葉も、『祈るべきように』を示すものです。『祈をしたり預言をしたりする時、かしらに物をかぶる男は、そのかしらをはずかしめる者である。祈をしたり預言をしたりする時、かしらにおおいをかけない女は、そのかしらをはずかしめる者である』（第一コリント一一・四～五）。2:3 しかし、パウロは、これらのことをすべて知っていました。律法と預言者と、福音の満ち満ちた教えとから、これらの何倍ものことを並べることもできました。一つ一つに、さまざまな説き明かしを加えることもです。それでも、パウロは、控えめであるだけでなく真実でもある心から（これらすべての後にもなお、祈るべきことを『祈るべきように』祈るのを知るには、どれほど足りないかを見ていたのです）、こう言います。祈るべきことを、『祈るべきようには、わたしたちは知らない』（ローマ八・二六）。そして、この言葉に、次のことを付け加えます。それによって、足りないものが満たされます。知らなくても、自分の内で足りないものが満たされるのにふさわしい者に、自分を整えた人にです。実際、パウロはこう言います。『御霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、まさって神にとりなしてくださる。そして、人の心を探り知るかたは、御霊の思うところがなんであるかを知っておられる。なぜなら、御霊は、聖徒のために、神の御旨にかなうとりなしをして下さるからである』（ローマ八・二六～二七）。祝福された人々の心の中で『アバ、父よ』と叫ぶ『御霊』は（ローマ八・一五、ガラテヤ四・六）、この幕屋の中でのうめきを、つぶさに知っておられます。それは、倒れた人や背いた人を重くするのに十分なうめきです。御霊は、人を愛する大きな心とあわれみのゆえに、わたしたちのうめきを引き受けてくださいます。そして、『言葉にあらわせない切なるうめきをもって、まさって神にとりなしてくださる』のです。

また、御霊は、ご自分の内にある知恵によってご覧になります。わたしたちの魂が『ちりに伏』すほど低くされ、『卑しいからだ』に閉じ込められているのをです（詩篇四四・二五、ピリピ三・二一）。そこで、ありふれた『うめき』ではなく、『言葉にあらわせない』うめきを用いて、『まさって神にとりなしてくださる』のです。それは、口に言い表わせない、人間が語ってはならない言葉に連なるうめきです（第二コリント一二・四）。この御霊は、神にとりなすだけでは満足なさらず、とりなしを強めて、『まさってとりなしてくださる』のです。わたしの考えでは、それは、まさって勝つ人々のためです。パウロがそういう人で、こう言っています。『しかし、わたしたちは、これらすべての事において勝ち得て余りがある』（ローマ八・三七）。一方、ただ『とりなしてくださる』のは、おそらく、勝つ人々のためでしょう。まさって勝つほどではなく、かといって負けるほどでもなく、勝つ人々です。[2:4]祈るべきことを、『祈るべきようには、わたしたちは知らない。しかし、御霊が、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、まさって神にとりなしてくださる』（ローマ八・二六）。この言葉と結びついているのが、次の言葉です。『わたしは霊で祈ると共に、知性でも祈ろう。霊でさんびを歌うと共に、知性でも歌おう』（第一コリント一四・一五）。実際、わたしたちの知性は、御霊がその前に祈ってくださらなければ、祈ることができません。御霊は、いわば知性を従えて祈ってくださるのです。同じように、知性は、さんびを歌うこともできません。律動と旋律と韻律と調和をもって、キリストにあって父をほめたたえることもできません。『すべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめる』御霊が、まず、そのかたをたたえ、ほめたたえてくださらなければです（第一コリント二・一〇）。御霊は、そのかたの『深み』をきわめ、力の及ぶかぎり捉えておられるのです。わたしの考えでは、イエスの弟子のひとりは、人間の弱さに気づいたのでしょう。どのように祈るべきかに及ばない弱さです。とくに、救い主が父への祈りの中で、知識に満ちた大いなる言葉をお語りになるのを聞いて、そのことを知ったのです。それで、主が祈りをおやめになったとき、こう言ったのです。『主よ、ヨハネがその弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈ることを教えてください』。この箇所のつながりの全体は、次のとおりです。『また、イエスはある所で祈っておられたが、それが終ったとき、弟子のひとりが言った、『主よ、ヨハネがその弟子たちに祈ることを教えたように、わたしたちにも祈ることを教えてください』』（ルカ一一・一）[6]。実際、この人は、律法の教えで育てられ、預言者の言葉を聞き、会堂に通うことも怠らなかった人です。そのような人が、主が『ある所で』祈っておられるのを見るまで、祈り方をまったく知らなかったのでしょうか。いや、そう言うのは筋違いです。実際、この人は、ユダヤ人の慣わしに従って祈ってはいました。しかし、祈りという主題については、自分にもっと大きな知識が要ることを見て取ったのです。また、ヨハネの弟子たちは、エルサレムとユダヤ全土とその附近一帯から、洗礼を受けにヨハネのところに来た人々でした（マタイ三・五〜六）。祈りについて『ヨハネが弟子たちに教えていた』のは、何だったのでしょうか。ヨハネが『預言者以上の者』として（マタイ一一・九）、祈りについて何かを見ていたのでなければ、何を教えることがあったでしょうか。それは、洗礼を受ける人すべてに授けたものではなかったでしょう。おそらく、洗礼を目指して弟子として教えを受けている人々に、ひそかに授けていたのです。[2:5]聖徒たちの心の中で御霊が祈ってくださる、このような、まことに霊的な祈りが、書き記されました。それは、秘められた、驚くべき教えに満ちています。実際、『王国の第一の書』には、ハンナの祈りが一部分だけ記されています。ハンナが『主の前で長く祈っていた』とき、『心のうちで』語った祈りの全体は、書き記されるにはいたらなかったからです（第一サムエル一・一二〜一三）[7]。また、詩篇では、第十六篇に『ダビデの祈り』という表題が付いています（詩篇一七篇）。第八十九篇には『神の人モーセの祈り』という表題があります（詩篇九〇篇）。第百一篇には『貧しい人が気落ちして、主の前にその願いを注ぎ出すときの祈り』とあります（詩篇一〇二篇）。これらの祈りは、まことに御霊によってなされ、語られた祈りでした。ですから、神の知恵の教えにも満ちています。それで、だれかが、その祈りの中で告げられていることについて、こう言うこともできるほどです。『だれが知恵ある者で、これらの祈りを悟るだろうか。だれが悟りある者で、これらを知るだろうか』（ホセア一四・九）。[2:6]ですから、祈りについて論じることは、それほど大きなことです。この大きな問題にふさわしく考え、語るためには、このことについても照らしてくださる父が必要です。また、教えてくださる

長子であるロゴスご自身と、働いてくださる御霊とが必要なのです。それで、わたしは、人として祈ったうえで（わたしは、自分に祈りを受けとめる力がある、などとは決して思っていないからです）、祈りについての論の前に、御霊を受けることを願います。それは、満ち満ちた、霊的な論がわたしたちに与えられ、福音書に記されている祈りが明らかにされるためです。では、いよいよ祈りについての論を始めなければなりません。

訳注

1 ここで写本が空白になっている。ヨハネ一五・一五の『友』の話があったらしい。
2 前の欠けのため、文の途中から始まる。語の並びも乱れているらしい。
3 ここで写本が空白になり、文の続きが欠けている。
4 前の欠けのため、文の途中から始まる。この人はパウロ。
5 この二つの言葉は福音書になく、主の言葉として伝わったもの。
6 ここで写本が空白になり、二行ほどが欠けている。
7 この句は本文が崩れている。『書き記されなかった』の意と解した。

3〜4章　「祈り」という語の二つの意味

3:1 さて、わたしの気づいたかぎりでは、祈り（エウケー）という語が最初に出てくるのは、次のときです。ヤコブが、『兄』エサウの怒りを逃れる身となり、イサクとリベカの勧めに従って、『メソポタミヤ』へ去って行ったときです（創世記二七・四一〜四五、二八・一〜五）。その文言は次のとおりです。『ヤコブは誓願（エウケー）を立てて言った、『主なる神がわたしと共にいまし、わたしの行くこの道でわたしを守り、食べるパンと着る着物を賜い、安らかに父の家に帰らせてくださるなら、主をわたしの神といたしましょう。またわたしが柱に立てたこの石を神の家といたしましょう。そしてあなたがくださるすべての物の十分の一を、わたしは必ずあなたにささげます』』（創世記二八・二〇〜二二）[1]。3:2 ここで、注意しておくべきことがあります。エウケーという語が、ここでは、誓願を立てて約束する人について使われていることです。神からこれこれのものを得たなら、これこれのことをする、と約束する人です（エウケーは、多くのところで、祈りを言うプロセウケーとは別のものだからです）。もっとも、この呼び名は、わたしたちがふだん言うものにも使われます。たとえば、出エジプト記に、こうあるのを見いだしました。十の災いの順で二番目にあたる、かえるの災いの後に[2]。『パロはモーセとアロンを召して言った、『かえるをわたしと、わたしの民から取り去るように、わたしのために主に祈ってください。そのときわたしは民を去らせて、主に犠牲をささげさせるでしょう』』（出エジプト八・八）。しかし、『祈ってください』はパロの言葉だから、という理由で、なかなか信じない人もいるでしょう。エウケーの語が、先に挙げた意味のほかに、ふだんの意味をも表すことをです。その人は、続く次の言葉にも目を留めるべきです。『モーセはパロに言った、『あなたと、あなたの家来と、あなたの民のために、わたしがいつ祈って、このかえるを、あなたとあなたの民と、あなたがたの家から断つべきか、きめてください。ただ、川にだけは残るでしょう』』（出エジプト八・九）。3:3 また、わたしは、次のことに気づきました。三番目の災いのぶよのときには、パロは祈りがなされるよう求めず、モーセも祈りません。しかし、四番目のあぶのときには、パロは『それで、わたしのために主に祈ってください』と言います（出エジプト八・二八）。そのとき、モーセもこう言いました。『わたしはあなたのもとから出て行って、神に祈りましょう。あすあぶの群れがパロと、その家来と、その民から離れるでしょう』（出エジプト八・二九）。そして、少し後にこうあります。『モーセはパロのもとを出て、神に祈った』（出エジプト八・三〇）。また、五番目と六番目の災いのときにも、パロは祈りがなされるよう求めず、モーセも祈りませんでした。一方、七番目の災いのときには、こうあります。『そこで、パロは人をつかわし、モーセとアロンを召して言った、『わたしはこんどは罪を犯した。主は正しく、わたしと、わたしの民は悪い。それで、主に祈ってください。雷と雹と火がやむようにしてください』』（出エジプト九・二七〜二八）。そして、少し後にこうあります。『モーセはパロのもとを去り、町を出て、主にむかって手を伸べひろげたので、雷はやんだ』（出エジプト九・三三）。ここでは、前の場合のように『祈った』とは言われず、『主にむかって手を伸べひろげた』と言われています。それがなぜかは、ほかのところで、もっとふさわしいときに調べるべきでしょう。また、八番目の災いのときにも、パロはこう言います。『そしてあなたがたの神、主に祈って、この死をわたしから離れさせてください』（出エジプト一〇・一七）。『そこでモーセはパロのところから出て、神に祈った』（出エジプト一〇・一八）。3:4 さて、エウケーという語は、ヤコブの場合のように、多くのところでふだんの意味でなく使われている、とわたしは言いました。レビ記にも、こうあります。『主はモーセに言われた、『イスラエルの人々に語って、こう言いなさい。人が、自分の身の値を主にささげる誓願を立てる時は、その値は次のとおりである。男の値は、二十歳から六十歳までは、聖所のはかりで銀五十シケルである』』（レビ二七・一〜三）。また、民数記にもこうあります。『主はまたモーセに言われた、『イスラエルの人々に語って、

こう言いなさい。男または女が、主のために身をきよく保つ誓願を特に立てる時は、ぶどう酒と濃い酒を断って身をきよく保たなければならない』（民数六・一～三）。このあと、ナジルびとと呼ばれる人についての続きがあり、それから、少し後にこうあります。『そして、彼が誓願の日々のあいだ主に聖別されたその日に、彼の頭を聖別しなければならない』（民数六・一一～一二）。また、少し後にこうあります。『これが、誓願を立てた者の律法である。その誓願の日が満ちた日には』（民数六・一三）。さらに、少し後にこうあります。『こうして後、誓願を立てた者は、ぶどう酒を飲むことができる。これが、誓願を立てた者の律法である。誓願にかかわる自分の供え物を、主に誓願する者の律法である。その手の及ぶ物のほかに、きよめの律法に従って立てる誓願の力に応じて』（民数六・二〇～二一）。また、民数記の終わり近くにも、こうあります。『モーセはイスラエルの人々の部族のかしらたちに言った、『これは主が命じられた事である。もし人が主に誓願を立て、あるいは物断ちをもって誓いを立て、またはその身について物断ちをするならば、その言葉を破ってはならない。口から出たことは、すべて行わなければならない。またもし女がまだ若く、父の家にいて、主に誓願を立て、または物断ちをするとしよう。父が彼女の誓願と、その身に断った物断ちのことを聞いて、何も言わないならば、彼女の誓願はすべて立つ。その身に断った物断ちもすべて、彼女に残るであろう』』（民数三〇・一～四）。そして、これに続けて、そのような女について、いくつかのことを定めています。この意味で、箴言にも書かれています[3]。『自分のものを急いで聖別するのは、人にとってわなである。誓願を立てた後で、悔いることになるからである』（箴言二〇・二五）。また、伝道の書にはこうあります。『誓願を立てて、それを果さないよりは、むしろ誓願を立てないほうがよい』（伝道五・五）。また、使徒行伝にはこうあります。『わたしたちの中に、誓願を立てている者が四人いる』（使徒二一・二三）。

[1]そこで、聖書での語の意味を、まず区別しておくことは、筋の通ったことだと、わたしには思われました。エウケーは二つの意味を表し、プロセウケーも同じだからです。実際、プロセウケーという語は、多くのところで、一般の、ふだんの意味に使われています。それだけでなく、わたしたちのふだんの意味でのエウケーについても使われています[4]。『王国の第一の書』の、ハンナについて語られているところです。『その時、祭司エリは主の神殿の柱のかたわらの座にすわっていた。ハンナは心に深く悲しみ、主に祈って、はげしく泣いた。そして誓願を立てて言った、『万軍の主よ、まことに、はしための悩みをかえりみ、わたしを覚え、はしためを忘れずに、はしために男の子を賜わりますなら、わたしはその子を一生のあいだ主にささげ、かみそりをその頭にあてません』』（第一サムエル一・九～一一）。[2]もっとも、ここで、『主に祈って』と『誓願を立てて』に目を留めて、こう言う人がいても、無理はありません。ハンナがこの二つ、つまり『主に祈って』と『誓願を立てて』の二つをしたのなら、こうではないでしょうか。『祈って』のほうは、わたしたちがふだんエウケーと呼んでいるものについて使われています。一方、『誓願を立てて』のほうは、レビ記と民数記で使われている意味について使われているのだ、と。実際、『わたしはその子を一生のあいだ主にささげ、かみそりをその頭にあてません』。これは、本来の意味では祈り（プロセウケー）ではありません。そうではなく、エフタも立てた、あの誓願（エウケー）です。エフタは、次の言葉でそれを立てました。『エフタは主に誓願を立てて言った、『もしあなたがアンモンの人々をわたしの手にわたされるならば、わたしがアンモンの人々のところから無事に帰るときに、わたしの家の戸口から出てきて、わたしを迎えるものはだれでも主のものとし、その者を燔祭としてささげましょう』』（士師一一・三〇～三一）。

訳注

1 ここで写本が空白になっている。誓願の別の例があったらしい。
2 ここで写本が空白になっている。引用を導く文があったらしい。
3 ここで写本が空白になっている。箴言の別の句もあったらしい。
4 ここは筋が通りにくく、『ふだんでない意味での』と直す説もある。

5章　祈りは無益だとする人々の論

5:1 さて、あなたがたは、このあと、まず次の人々のもっともらしい言い分を示すよう求めました。祈りからは何も得られないと考え、そのために、祈ることは余計だと言う人々です。それをしなければならないのなら、わたしは、力の及ぶかぎり、これもためらわずに行いましょう。ここでは、エウケーという語を、もっと広く、もっと単純な意味で使っています[1]。この説は、それほどに評判が悪く、名の知れた擁護者も得ていません。ですから、摂理を受け入れ、神を万物の上に立てる人々の中に、祈りを受け入れない人は、一人も見当たりません。この教えは、まったく神を認めず、神の存在を否む人々のものか、名ばかりに神を立てて、その摂理を奪う人々のものだからです。もっとも、敵対する働きは、すでに、祈るべきではないということについてまで、ある人々を説き伏せることができました。この働きは、最も不敬虔な教えを、キリストの名と神の子の教えにかぶせようとしているのです。この考えの先頭に立つのは、感覚でとらえられるものをまったく取り除き、洗礼も聖餐も用いない人々です。彼らは聖書に言いがかりをつけます。聖書は祈ることについても、この意味で言っているのではなく、別の意味を教えているのだ、と言うのです。5:2 祈りを退ける人々の論は、次のようなものでしょう（もちろん、神を万物の上に立て、摂理があると言う人々のことです。神や摂理をまったく取り除く人々の言うことを調べるのは、いまの課題ではないからです）。『神』は、『すべてのことを、それが生じる前から』ご存じです（スザンナ三五）。どんなことも、現に起こったときに、起こったことによって初めて神に知られるのではありません。それより前には知られていなかった、ということはないのです。それなら、わたしたちが祈る前から、わたしたちに必要なものを知っておられる方に、祈りをささげる必要がどこにあるでしょうか。『天の父は』、わたしたちが『求めない先から』、わたしたちに『必要なものはご存じ』だからです（マタイ六・八）。神は万物の父であり、造り主です。『存在するすべてのものを』愛し、ご自分のお造りになったものを何一つ忌み嫌うことはなさいません（知恵一一・二四）。ですから、わたしたちが祈らなくても、神は一人一人のことを、救いとなるように取り計らってくださるはずです。ちょうど、幼子たちの世話をする父親が、幼子たちの願いを待たないのと同じです。幼子たちは、まったく求めることができないのです。あるいは、知らないために、益になるもの、得になるものとは反対のものを、たびたび欲しがるのです。しかも、わたしたち人間は、ごく幼い子供たちが親の知性に及ばないよりも、はるかに神に及ばないのです。5:3 また、神は、これから起こることを予知しておられるだけでなく、前もって定め置いてもおられるはずです。そして、神にとって、前もって定め置かれたことに反して起こることは、何一つないはずです。ですから、もしだれかが太陽が昇るように祈るなら、その人は愚か者と思われるでしょう。自分が祈らなくても起こることを、祈りによって起こるよう願っているのです。それと同じように、自分が祈らなくても必ず起こるはずのことを、自分の祈りのために起こると思う人は、分別のない者でしょう。さらにまた、夏至になった太陽に悩まされ、焼けつく暑さに苦しむ人がいるとします。その人は、穏やかな気候を楽しもうとして、祈りによって太陽が春の星座へ移ると思います。この人は、どんな狂気をも越えています。それと同じように、人類に避けがたくふりかかる災いを、祈れば受けずに済むと思う人は、どんな錯乱をも越えているでしょう。5:4 また、『罪人は胎を出た時から、そむき去り』（詩篇五八・三）、義人は『母の胎内にある時から』選び分けられています（ガラテヤ一・一五）。さらに、こう言われています。『まだ子供らが生れもせず、善も悪もしない先に、神の選びの計画が、わざによらず、召したかたによって行われるために』、『兄は弟に仕えるであろう』（ローマ九・一一～一二）。もしそうなら、わたしたちが罪のゆるしを願い求めるのは、むなしいことです。力の霊を受けて、キリストに強くしていただき、『何事でも』できるようになることを願い求めるのも、むなしいのです（ピリピ四・一三）。わたしたちが『罪人』であるなら、

『胎を出た時から』そむき去っているからです。また、『母の胎内にある時から』選び分けられたのなら、祈らなくても、最もよいことが訪れるはずだからです。実際、ヤコブは、エサウより『強く』なり、兄が自分に『仕える』と、生まれる前に預言されました（創世記二五・二三）。どんな祈りをささげたからでしょうか。また、『エサウ』は、生まれる前に、どんな不敬虔なことをしたから、憎まれるのでしょうか（マラキ一・三、ローマ九・一三）。また、第八十九篇にあるように、モーセが祈るのは何のためでしょうか。神は、『山が据えられ、地と世界とが形づくられる前から』、モーセの『避け所』なのです（詩篇九〇・一～二）[2]。[5:5] それだけではありません。救われるすべての人についても、エペソ人への手紙に、こう書かれています。父は、『天地の造られる前から』、『彼にあって』、つまり『キリストにあって』、彼らを『選んで』くださいました。彼らが『みまえにきよく傷のない者となるように』です。そして、『愛のうちに』、彼らを『あらかじめ定めて』くださいました。『キリストによって』、ご自分の『子たる身分』をお授けになるためです（エペソ一・三～五）。ですから、人は、『天地の造られる前から』選ばれているか、そうでないかの、どちらかです。選ばれているなら、その人が選びから落ちることはありえません。ですから、祈りは要りません。選ばれてもおらず、あらかじめ定められてもいないなら、祈ってもむなしいのです。たとえ一万回祈っても、聞かれることはありません。神は、『あらかじめ知っておられる者たちを、更に御子の栄光のかたちに似たものとしようとして、あらかじめ定めて下さった』からです（ローマ八・二九、ピリピ三・二一）。『そして、あらかじめ定めた者たちを更に召し、召した者たちを更に義とし、義とした者たちには、更に栄光を与えて下さった』のです（ローマ八・三〇）。実際、ヨシヤは何のために骨を折るのでしょうか。また、なぜ、祈りながら、聞かれるかどうかを思い煩ったのでしょうか。ヨシヤは、何代も前から、名を挙げて預言されていました。何をするかについても、予知されていただけでなく、多くの人の聞くところで預言されてもいたのです。また、ユダも、何のために祈るのでしょうか。その祈りまでが『罪に』変わってしまうというのに（詩篇一〇九・七）。ユダは、ダビデの時代から、その『職』を失い、ほかの者が代わってそれを取ると、前もって告げられていたのです（詩篇一〇九・八、使徒一・二〇）。さらに、神は変わることのない方で、万物をあらかじめ把握し、前もって定め置いておられたことにとどまっておられます。そうであれば、祈りによって神の計画を変えられると思って祈るのは、それだけで筋が通りません。また、神が前もって定め置いてはおられず、一人一人の祈りを待っておられるかのように、神に願い出るのも同じです。祈りに応じて、祈る人にふさわしいことを神が定め置いてくださるように、と願うのです。そうなれば、神は、それまで考えてもおられなかったことを、そのときになって筋が通るとお認めになり、お定めになるのだ、と。[5:6] ここで、あなたがわたしへの手紙で示した問いを、その言葉のまま掲げておきましょう。次のとおりです。『第一に、神が将来のことを予知する方であり、それが起こらなければならないのなら、祈りはむなしい。第二に、すべてが神のご意志に従って起こり、そのはかりごとが揺るがず、お望みのことが何一つ変わりえないなら、祈りはむなしい』。わたしの思うに、祈ることに対して心をなえさせるものを解くのに役立つ次のことを、あらかじめ論じておくべきです。

訳注

1 ここで写本が空白になっている。祈りをまったく退ける人々の話があったらしい。

2 ここで写本が空白になっている。似た問いがもう一つあったらしい。

6〜7章　自分次第のことと神の予知

6:1 動くもののうち、あるものは、動かすものを外に持っています。魂のないもの、ただ凝集力だけで保たれているものがそうです。生長の力や魂によって動くものも、そうであることがあります。そういうものとしてではなく、ただ凝集力だけで保たれているものと同じように動かされるときです。石切り場から切り出された石や、育つ力を失った木は、ただ凝集力だけで保たれていて、動かすものを外に持っているからです。動物の体や、植えられたもののうち運べるものも同じです。だれかに移されるとき、それらは動物や植物として移されるのではありません。石や、育つ力を失った木と同じように移されるのです。すべての体は衰えて流れ去るものなので、これらも動いてはいます。しかし、それは衰えることに伴う動きにすぎません。これらとは別の、第二の動くものは、内にある生長の力や魂によって動くものです。言葉をより厳密に用いる人々は、これを、自分から動くもの、とも言います。第三の動きは、動物のうちにある動きで、自分による動きと呼ばれます。そして、わたしの思うに、理性あるものの動きは、自分を通しての動きです。もし動物から自分による動きを取り去るなら、それは、もはや動物であるとさえ考えられません。ただ生長の力だけで動く植物か、外から何かに運ばれる石のようなものになるでしょう。また、あるものが自分の動きをわきまえているとします。わたしは、そういうものを、自分を通して動くと呼びました。ですから、それは理性あるものでなければなりません。6:2 ですから、自分次第のことは何もない、とする人々は、必ず、きわめて愚かなことを受け入れることになります。第一に、わたしたちは動物ではない、ということです。第二に、理性あるものでさえない、ということです。むしろ、わたしたちは、いわば外から動かすものに動かされていて、自分ではまったく動いていないことになります。そして、わたしたちが行うと考えられていることも、そのものによって行っているのだ、と言われることになるでしょう。それに、だれでも、自分の身に起こることに目を留めて、確かめてみるとよいのです。恥知らずにならずに、こう言えるでしょうか。望むのも自分ではなく、食べるのも自分ではなく、歩くのも自分ではない、と。どんな教えであれ、それに同意して受け入れるのも自分ではなく、ほかの教えを偽りとして退けるのも自分ではない、と。たとえ一万回、言葉巧みに、もっともらしい論を用いて論じ立てても、人が本気でそれに同意することのできない教えがあります。それと同じように、自分次第のことがまったく保たれていないとして、人の営みを本気で考えることは、だれにもできません。実際、何一つ把握できるものはない、と本気で考える人がいるでしょうか。あるいは、どんなことについても判断を控えている者として生きる人がいるでしょうか。また、召使いが過ちを犯したという印象を受けて、その召使いを叱らない人がいるでしょうか。親への務めを果たさない息子を責めない人や、姦淫をした女を、恥ずべきことをしたとして非難し、とがめない人がいるでしょうか。たとえ一万回、言葉巧みに論じる人がいても、真理はわたしたちを強いて、何かへと向かわせ、ほめさせ、とがめさせるからです。自分次第のことが保たれている、という前提で、そうさせるのです。しかも、それがわたしたちのゆえに、ほめられるべきもの、またはとがめられるべきものになる、という前提です。6:3 さて、自分次第のことが保たれているとしましょう。それは、徳へ、あるいは悪徳へ、また、務めへ、あるいは務めに反することへと、数えきれないほどの傾きを持っています。そうであれば、神は、それがどのようなものになるかを、それが生じる前に、必ず知っておられます。ほかのすべてのことと同じく、『天地創造このかた』、また『世の初めから』知っておられるのです（ローマ一・二〇、マタイ二五・三四）。そして、神は、自分次第の一つ一つの行いについてご覧になったことに従って、すべてを前もって定め置いておられます。その中で、自分次第の一つ一つの動きに、摂理から臨むものが、ふさわしく前もって定め置かれています。来るべきことの連なりに従って、その動きに起こるものもそうです。ただし、自分次第のことから、わたしたちの衝動に従って行われる、

来るべきすべてのことの原因に、神の予知はならないのです。仮に神が来るべきことを知っておられなくても、わたしたちは、それで、これこれを行い、これこれを望むことを失わないからです。予知から加わるのは、むしろ次のことです。各人の自分次第のことが、万物を治める営みの中に、世界の成り立ちに役立つ位置を受けるのです。6:4ですから、神が各人の自分次第のことを知っておられるとしましょう。それなら、神が前もってご覧になったうえで、だれにでもふさわしいことが摂理によって定め置かれるのは、理にかなっています。また、だれそれが、どんな心構えでそのように信じて、何を祈り、何が自分に起こるよう望んでいるか。それを神が前もって捉えておられるのも、理にかなっています。それが前もって捉えられているので、それに従って、定め置きの中には、次のようなことも定められるでしょう。「この人は思慮深く祈るだろう。その祈りのゆえに、わたしはこの人の祈りを聞こう。あの人は聞かれるに値しない者になるだろう。あるいは、祈る者が受けても益にならず、わたしが与えるのもふさわしくないものを祈るだろう。そのことのゆえに、あの人の祈りは聞くまい。また、たとえば、だれそれのこの祈りは聞くまい。しかし、同じ人のあの祈りは聞こう」。（将来のことを予知しておられる神が偽ることはありえない。だから物事は避けられないよう決められているのだ、と心を乱す人がいるかもしれません。その人にはこう言うべきです。神が揺るがずに知っておられるのは、まさに次のことです。すなわち、この人は、善いものを揺るがずに確かに望むわけではない、ということです。また、益へ向かう変化を受け入れなくなるほどに、悪いものを望むわけでもない、ということです。）「また、この人が祈るなら、これこれのことをしよう。とがめられることなくわたしに祈り、祈りをおろそかにしない人には、そうするのがわたしにふさわしいからだ。あの人がある程度まで祈るなら、その人が求めまた思うところを『はるかに越えて』、これこれのものを与えよう（エペソ三・二〇）。善を施すことであの人に勝ち、あの人が求めることのできた以上のものを備え与えるのが、わたしにふさわしいからだ。また、これこれの者になるこの人には、これこれの御使いを仕える者として遣わそう。その御使いは、これこれの時から、この人の救いのために共に働き始め、これこれの時まで、この人と共にいるだろう。あの人には、たとえば、これこれの御使いを遣わそう。あの人はこの人よりすぐれた者になるので、この御使いより尊い御使いを遣わすのだ。また、ある人は、すぐれた教えに身をゆだねた後で、力を失い、より物質的なものへと逆戻りするだろう。その人からは、これこれのすぐれた協力者を離れさせよう。協力者が離れると、その人にふさわしく、より悪いこれこれの力が、その怠りにつけ込む機会を見つけて、そばに立つだろう。そして、罪を犯す備えを自分でしてしまったその人を、これこれの罪へと誘い出すだろう」。6:5ですから、万物を前もって定め置いておられる方は、すでに、いわばこうお語りになるでしょう。「アモンはヨシヤを生むだろう。ヨシヤは父の過ちを見ならわず、共にいるこれこれの者たちを通して、徳へ促すこれこれの道を得て、立派で善い者となるだろう。そして、ヤラベアムが悪しく築いた祭壇を打ちこわすだろう。また、わたしはユダのことも知っている。わたしの子が人類のもとに来るとき、ユダは、初めは立派で善い者であろう。しかし、後には道をそれ、人の犯す罪に落ちるだろう。そのため、ユダがこれこれの目に遭うのは、理にかなうことになる」。この予知は、おそらくすべてのことについて、少なくともユダとほかの奥義については確かに、神の子のうちにもあります。神の子は、来るべきことの成り行きを見通して、ユダと、ユダが犯すことになる罪とをご覧になっていたのです。それで、神の子は、ユダが生まれる前から、それを捉えたうえで、ダビデを通してお語りになりました。『神よ、わたしの賛美を黙って見過ごさないでください』と、それに続く言葉です（詩篇一〇九・一）。「わたしは将来のことを、そして、パウロが神を敬うことにどれほどの熱意を持つかを知っている。だから、世界を造る前、世界の創造に取りかかるその初めに、わたし自身のうちでパウロを選ぼう。そして、生まれると同時に、人々の救いのために共に働くこれこれの力に、パウロをゆだねよう。わたしは、パウロを『母の胎内にある時から』選び分ける（ガラテヤ一・一五）。そして、若いパウロのうちには、知識のない熱心が生じる。初めのうちは、パウロがその熱心から、神を敬うことを口実に、わたしのキリストを信じた人々を迫害するのを許そう。また、わたしに仕える者であり証人であるステパノを石で打つ人々の『上着』の番をするのも、許そう（使徒二二・二〇）。パウロは若さにまかせてふるまった後、きっかけを得て、最もよいものへと変わるだろう。わたしがそう許すのは、そのときパウロ

が、わたしの『まえに誇る』ことがないためだ（第一コリント一・二九）。むしろ、『わたしは神の教会を迫害したのであるから、使徒と呼ばれる値うちのない者である』と言うためだ（第一コリント一五・九）。また、神を敬うことを口実にした若い日の過ちの後に、わたしはパウロに恩恵を施す。それを感じ取って、『神の恵みによって、わたしは今日あるを得ている』と言うためだ（第一コリント一五・一〇）。また、パウロは、まだ若者であったときにキリストに逆らって行ったことのために、良心に押しとどめられるだろう。そして、恩恵として示されるその『すぐれた啓示』のために、高ぶることはないだろう（第二コリント一二・六〜七）」。

71 また、太陽が昇るように祈ることについての論には、次のように言うべきです。太陽にも、何か自分次第のことがあります。太陽も、月とともに神をたたえているのです。『日よ、月よ、主をたたえよ』と言われているからです（詩篇一四八・三）。そうであれば、月にも、したがってすべての星にも、自分次第のことがあるのは明らかです。『すべての星よ、光よ、主をたたえよ』と言われているからです。さて、わたしは先に、こう言いました。神は、地上の一人一人の自分次第のことを、地上のものの何かの必要のために用い、それらを然るべく配置しておられる、と。それと同じように、神は、太陽と月と星の自分次第のことを用いて、『すべて天の万象』を定め置いておられる、と考えるべきです（申命記四・一九）。万物と調和した星の運行と動きも、そうして定め置いておられるのです。その自分次第のことは、揺るがず、確かで、堅固で、知恵あるものなのです。また、ほかの人の自分次第のことについて、わたしが祈るのはむだではない、としましょう。それなら、天にあって、万物の救いとなるように舞う星の自分次第のことについて祈るのは、なおさらむだではありません。もっとも、地上のものについては、こう言うことができます。周りの事情から、これこれの印象がわたしたちに加わります。それが、わたしたちの不安定さ、あるいはよりよいほうへ傾く性質を呼び起こし、あれこれを行わせ、言わせるのだ、と。しかし、天にあるものはどうでしょうか。天にあるものは、理性によって整えられた、このような魂を、自分たち自身のゆえに持っています。また、天上の、このうえなく純粋な、このような体を用いています。どんな印象が入り込んで、その一つ一つを、世界に役立つ運行から逸らし、動かすことができるでしょうか。

8〜10章　祈りへの備えと、祈りから受ける益

8:1 さらに、次のようなたとえを用いるのも、理にかなわないことではありません。祈るよう勧め、祈りをおろそかにしないよう戒めるためです。女なしには、また、子を生むのに役立つ営みを用いずには、子をもうけることはできません。それと同じように、これこれのものは得られません。このように祈らず、このような心構えでなく、このように信じず、祈りの前にこう生きていなければ、得られないのです。ですから、くどくどと祈ってはなりません。小さなものを求めてはならず、地のものについて祈ってはなりません。『怒り』や乱れた思いを抱いて、祈りに来てもなりません（第一テモテ二・八）。それどころか、きよめなしに、『祈りに』専心するひまが生まれるとは考えられません（第一コリント七・五）。それに、祈る人は、自分に過ちを犯してゆるしを求める兄弟を心からゆるさないなら、罪のゆるしを得ることもできません。8:2 祈るべきしかたで祈る人や、できるかぎりそこへ向かって励む人には、多くのしかたで益が生じる、とわたしは思います。まず第一に、知性において祈りへと張りつめた人は、必ず何かの益を得ています。祈るときのありさまそのものによって、自分を神の前に差し出すよう、身を整えたのです。そこにおられるそのかたに、目を注いでおられ、そこにおられる方として語るよう、身を整えたのです。このような印象や、これこれのものの記憶は、記憶のもとになったものに関わって、その印象の中で生じた思いを汚します。それと同じように、信じている神の記憶は益をもたらす、と確信すべきだからです。神は、魂の奥の聖所にある動きを見て取っておられます。そのとき魂は、そこにおられ、見張っておられ、あらゆる知性に先回りしておられる方に喜ばれるよう、自分を整えるのです。『心』をお調べになり、『思い』をお探りになる方です（詩篇七・九）。仮に、祈ることに思いを据えた人に、このほかにはもう何の益も生じないとしましょう。それでも、祈りの時にこれほど敬虔に身を整えた人は、並のものを受けたのではない、と考えるべきだからです。これがたびたび行われると、人をどれほど多くの罪から遠ざけ、どれほど多くの正しい行いへと運ぶか。それは、絶えず祈りに身をささげてきた人々が、経験によって知っています。実際、名高く、知恵において益を得た人を思い出し、思い返すことでさえ、わたしたちをその人にならう熱意へと呼び起こします。そして、悪いほうへの衝動をたびたび妨げます。そうであれば、万物の父である神を思い出し、その神に祈ることは、なおさら益をもたらすではありませんか。益を受けるのは、そこにおられ、聞いておられる神の前に、自分は立って語っているのだ、と確信した人々です。

9:1 これまで言ったことを、聖書から次のように裏づけるべきです。祈る人は、自分に過ちを犯した一人一人をゆるすことによって、『きよい手』をあげなければなりません。怒りの情念を魂から消し去り、だれにも憤らずにいるのです。また、ほかの思いで知性が濁らないよう、祈っている時には、祈りの外のことをすべて忘れていなければなりません（そのような者であることが、どうしてこのうえなく幸いでないことがあるでしょうか）。パウロがテモテへの第一の手紙で、こう言って教えているとおりです。『男は、怒ったり思い乱れたりしないで、どんな場所でも、きよい手をあげて祈ってほしい』（第一テモテ二・八）。さらに、女は、とくに祈るときには、魂においても体においても、落ち着いたさまと慎み深いさまを保たなければなりません。何にもまして、とりわけ祈るときには、神を畏れ敬わなければなりません。そして、あらゆるふしだらな思い出、女の情欲にかかわる思い出を、魂の主導部分から追い出していなければなりません。また、『髪を編んだり、金や真珠をつけたり、高価な着物を着たり』して身を飾ってはなりません。信仰を言いあらわしている女が身を飾るのにふさわしいもので、身を飾っていなければなりません。祈るためにこのように自分を差し出した女を、このありさまだけからでも幸いだと言うのに、ためらう人がいるでしょうか。いるなら、わたしは驚きます。女のこのありさまは、パウロが同じ手紙で、こう言って教えたとおりです。『また、女はつつましい身なりをし、適度に慎み

深く身を飾るべきであって、髪を編んだり、金や真珠をつけたり、高価な着物を着たりしてはいけない。むしろ、良いわざをもって飾りとすることが、信仰を言いあらわしている女に似つかわしい』（第一テモテ二・九～一〇）。9:2 預言者ダビデも、聖徒が祈るときに備えているものとして、ほかにも多くのことを言っています。神に自分をささげた人の、祈りへの心の向きと備えは、それだけを考えても、このうえなく益をもたらします。それがわたしたちに明らかになるよう、次の言葉も、ここに並べるべきです。時宜にかなわないことではありません。ダビデは、こう言います。『天に座しておられる者よ、わたしはあなたにむかって目をあげます』（詩篇一二三・一）。また、『神よ、わたしはあなたにむかって魂をあげます』（詩篇二五・一～二）。実際、思いの目は、地上のものにとどまり続けることや、より物質的なものから来る印象で満たされることから、あげられます。そして、造られたものを越えて見渡すほど高く上げられます。ただ神を思うことと、聞いておられる方と厳かに、ふさわしく語り合うことだけに向かうのです。そうであれば、その目は、すでに目そのものに、このうえない益をもたらしたのではないでしょうか。その目は、『顔おおいなしに、主の栄光を』鏡に映すように見つつ、『栄光から栄光へと』、『同じ姿に』変えられていくのです（第二コリント三・一八）。そのとき、その目は、何かより神的な、知性で捉えられるものの流れ出にあずかるからです。それは、『主よ、あなたの御顔の光が、わたしたちの上にしるされました』という言葉に示されています（詩篇四・六）。魂もまた、あげられて霊に従い、体から離れます。そして、霊に従うだけでなく、霊のうちに入りもします。それは、『わたしはあなたにむかって魂をあげます』という言葉に示されています。そうであれば、魂は、すでに魂であることを脱ぎ捨てて、霊的なものになるのではないでしょうか。9:3 恨みを抱かないことが、最大の正しい行いだとしましょう。預言者エレミヤによればそうで、エレミヤは、律法の全体がこの一つにまとめられると言います。『わたしがあなたがたの先祖に、彼らがエジプトから出て来たときに命じたのは、これらのことではない。わたしはこのことを命じた。おのおの、心のうちで隣人に恨みを抱いてはならない』（エレミヤ七・二二～二三、ゼカリヤ七・一〇）。また、わたしたちが恨みを抱いていたところから祈りに来て、救い主の命令を守るとしましょう。救い主は、こうお語りになります。『また立って祈るとき、だれかに対して、何か恨み事があるならば、ゆるしてやりなさい』（マルコ一一・二五）。それなら、明らかに、そのような者として祈りに立つわたしたちは、すでに最上のものを手にしています。

10:1 これまでのことは、仮定として言ったのです。すなわち、祈るわたしたちに、ほかに何も続いて起こらなくても、わたしたちは最上のものを得ている、ということです。祈るべきようにとはどういうことかを悟り、それを成し遂げているのです。しかし、明らかに、このように祈る人は、聞き入れてくださる方の働きに見入ります。そして、まだ語っているうちに、『わたしはここにおる』という言葉を聞くでしょう（イザヤ五八・九）。その人は、祈る前に、摂理に対するあらゆる不満を捨て去っているのです。実際、次の言葉が示しているのは、このことです。『もし、あなたが自分から縛りと、手を挙げることと、つぶやきの言葉とを取り除くなら』（イザヤ五八・九）。起こることに満足する人は、あらゆる縛りから自由になっています。そして、わたしたちを鍛えるためにお望みになることを定め置いておられる神に対して、反対の手を挙げません。それどころか、思いの隠れたところで、人の耳に聞こえる声を出さずにつぶやくことさえしません。このつぶやきは、主人の命令をあからさまには責めない、悪い召使いのつぶやきのようなものです。そのようにつぶやくのは、起こることについて、声に出し、魂のすべてで摂理をののしる勇気はない人々です。しかし、自分が不満に思うことについて、いわば万物の主にさえ気づかれずにいたいと思っているのです。わたしの思うに、ヨブ記の次の言葉も、このことを言っています。『すべてこの事においてヨブは、神の前に、そのくちびるをもって罪を犯さなかった』（ヨブ二・一〇）。それより前の試みについては、こう書かれています。『すべてこの事においてヨブは、神の前に罪を犯さなかった』（ヨブ一・二二）。申命記で、みことばは、まさにそうなってはならないと命じて、こう言います。『あなたの心のうちに、隠れた言葉、不法が生じて、『第七年が近づいた』と言うことのないよう、気をつけよ』と、それに続く言葉です（申命記一五・九）。10:2 ですから、このように祈る人は、これほどの益を前もって受けています。そして、全世界を満たしておられる主の霊と溶け合うのに、いっそうふさわしい者となり

ます。また、地と天のすべてを満たしておられ、預言者を通して、こうお語りになる方とも、溶け合うのにふさわしい者となります。『主は言われる、わたしは天と地とに満ちているではないか』（エレミヤ二三・二四）。さらに、その人は、前に言ったきよめと祈りとによって、神のロゴスにあずかります。ロゴスは、ご自分を知らない者たちの中にさえ立っておられます。そして、だれの祈りからも離れず、ご自分が仲立ちをしておられる人と共に、父に祈ってくださいます。神の子は、わたしたちのささげ物の『大祭司』であり、父のもとでの『助け主』だからです（ヘブル三・一、第一ヨハネ二・一）。御子は、祈る人々のために祈り、呼び求める人々と共に呼び求めてくださいます。しかし、御子を通して絶えず祈ることをしない人々のためには、身内の者のためのようには祈ってくださらないでしょう。また、『失望せずに常に祈るべき』ことについての教えに従わない人々もいます。その人々のためには、すでにご自分のものである人々のためのように、神のもとで『助け主』となってくださることもないでしょう。実際、こう書いてあります。『失望せずに常に祈るべきことを、譬で教えられたのである。ある町に、ひとりの裁判官がいた』と、それに続く言葉です（ルカ一八・一～二）。また、その前には、こうあります。『そして彼らに言われた、あなたがたのうちのだれかに、友人があるとして、その人のところへ真夜中に行き、『友よ、パンを三つ貸してください。友だちが旅先からわたしのところに着いたのですが、何も出すものがありませんから』と言う』（ルカ一一・五～六）。そして、少し後には、こうあります。『しかし、よく聞きなさい、友人だからというのでは起きて与えないが、しきりに願うので、起き上がって必要なものを出してくれるであろう』（ルカ一一・八）。偽りのないイエスの口を信じる人で、ためらわずに祈るよう促されない人がいるでしょうか。イエスは、『求めよ、そうすれば、与えられるであろう』、『すべて求める者は得る』とお語りになるのです（マタイ七・七～八）。というのも、わたしたちが生きたパンを求めると、恵み深い父は、そのパンをお与えになるのです（それは、敵対する者がイエスとその弟子たちの食べ物にしたいと思っている石ではありません）。父から『子たる身分を授ける霊』を受けた人々に、お与えになります（ローマ八・一五）。そして、『父』は、『天から』『良い贈り物』を降らせて、『求めて来る者に』お与えになります（マタイ七・一一、ルカ一一・一三）。

11〜12章　共に祈る御使いと聖徒、絶えず祈ること

11:1 まことに祈る人々と共に祈ってくださるのは、大祭司だけではありません。御使いたちも共に祈ります。『罪人がひとりでも悔い改める』ことを、『天で』喜ぶ御使いたちです。『悔改めを必要としない九十九人の正しい人』のことにもまさって喜ぶのです（ルカ一五・七）。また、先に眠った聖徒たちの魂も共に祈ります。このことは、次のことから明らかです。まず、ラファエルは、トビトとサラのために、理にかなった祭儀を神にささげました。二人の祈りの後のことを、聖書はこう言っているからです。『ふたりの祈りは、大いなるラファエルの栄光の前で聞き入れられた。そして、ふたりをいやすために遣わされた』（トビト三・一六〜一七）。ラファエル自身も、神の命令によって、御使いとして二人のために果たした務めを明かして、こう言います。『さて、あなたとあなたの嫁サラが祈ったとき、わたしは、あなたがたの祈りの記念を、聖なる方の前にささげた』（トビト一二・一二）。そして、少し後には、こうあります。『わたしはラファエル、七人の御使いのひとりである。御使いたちは聖徒たちの祈りをささげ、聖なる方の栄光の前に出入りする』（トビト一二・一五）。現に、ラファエルの言葉によれば、『断食と施しと義とを伴う祈りは良い』のです（トビト一二・八）。次に、エレミヤです。マカバイ記にあるとおり、エレミヤが現れました。その人は『白髪と栄光とにおいて』際立ち、『その身を包む威厳は、驚くべき、このうえなく堂々としたもの』でした（第二マカバイ一五・一三）。そして、『右手を』差し伸べて、『ユダに金の剣を』渡しました（第二マカバイ一五・一五）。そのエレミヤについて、先に眠ったほかの聖徒が、こう言って証ししていました。『これは、民と聖なる都のために多く祈っている人、神の預言者エレミヤである』（第二マカバイ一五・一四）。11:2 実際、知識は、今は、ふさわしい人々に『鏡に映して』、『おぼろげに』現されています。しかし、『その時には、顔と顔とを合わせて』明らかにされます（第一コリント一三・一二）。それなら、ほかの徳についても、これに見合うことを考えないのは、理にかなわないからです。この生で前もって備えられたものは、その時に、本来の意味で完成されるのです。神のみことばによれば、徳の一つで、しかも最も主要なものは、隣人への愛です。人間の弱さの中にいて、より弱い人々と共に戦っている人々にも、この愛はあります。しかし、先に眠った聖徒たちには、この生で戦っている人々への愛が、はるかに多くそなわっている、と考えなければなりません。『もし一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、一つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな共に喜ぶ』（第一コリント一二・二六）。このことは、ここで兄弟を愛する人々に起こるだけではありません。今の生の外にいる人々の愛も、こう言うのがふさわしいからです。『諸教会の心配ごとがある。だれかが弱っているのに、わたしも弱らないでおれようか。だれかが罪を犯しているのに、わたしの心が燃えないでおれようか』（第二コリント一一・二八〜二九）。しかも、キリストご自身が、こう言い表しておられます。弱っている聖徒の一人一人に応じて、ご自分も同じように弱る、とお語りになるのです。『獄に』おり、裸になり、旅人となり、飢え、渇く、と（マタイ二五・三六）。福音書を読む人で、だれが知らないでしょうか。キリストは、信じる者たちに起こることをご自分に引き受けて、ご自分の苦しみとみなしておられるのです。11:3 神の『御使たち』は、イエスのもとに来て、『仕えた』のでした（マタイ四・一一）。御使いたちがイエスに仕えたのは、短い間だけだった、と考えるのはふさわしくありません。イエスが体をもって人々のもとにおられた間だけ、ということです。イエスご自身は今も、信じる者たちの『中で』、食卓につく人のようにではなく、給仕をする者のようにしておられるのです（ルカ二二・二七）。イエスは、『イスラエルの人々』を『ひとりびとり』集め、散らされている人々を寄せ集めようと望んでおられます（イザヤ二七・一二）。また、恐れ、呼び求める人々を救っておられます。そうであれば、どれほど多くの御使いが、このイエスに仕えていることでしょう。教会が育ち、数を増すために、使徒たち以上に力を合わせているのは当然ではありませ

んか。だからこそ、ヨハネの黙示録では、教会を治める御使いたちのことさえ語られているのです。『神の』御使いたちが『人の子の上に』上り下りするのは、むだではないからです（ヨハネ一・五一）。御使いたちは、『知識』の光に照らされた目には見えるのです（ホセア一〇・一二）。11:4ですから、御使いたちは、まさに祈りの時に、祈る人から、その人が何を必要としているかを思い起こさせられます。そして、全般にわたる命令を受けている者として、できることを成し遂げます。わたしの考えたことを受け入れてもらうために、この論について、次のようなたとえを用いるべきです。義を心がけている医者が、病んでいて健康を祈っている人のそばにいるとしましょう。その医者は、だれそれが祈りをささげているその病を、治すべきしかたを知っています。明らかに、この医者は、祈った人をいやそうと動かされるでしょう。まさにこのことが神のお考えの中にあったのだ、と考えるのです。それは、おそらく根拠のないことではありません。病から解放されるようにと祈った人の祈りを、神が聞き入れてくださったのです。あるいは、暮らしに必要なものを有り余るほど持ち、分け合う心のある人が、貧しい人の祈りを聞くとしましょう。その貧しい人は、自分に必要なものについて、神に願い出をささげているのです。明らかに、この人もまた、貧しい人の祈りの中身をかなえるでしょう。父の御旨に仕える者となるのです。父は、祈りの時に、与えることのできる人を、祈ろうとしている人と同じ所に集めてくださいました。与えることのできるこの人は、心の向きが正しいので、これこれのものを願った人を見過ごすことができないのです。11:5ですから、こうしたことが起こるとき、偶然に起こると考えてはなりません。聖徒たちの頭の毛をすべて数えておられる方が、祈りの時に、ほどよく調和させて集めてくださったのです。集められたのは、聞き入れて、仕える者となる人です。その人から善を施されることを必要としている人、信じて願った人に仕えるのです。それと同じように、こう考えるべきです。見守り、神に仕える御使いたちが、祈る人のだれかのもとに、時に集められて来ます。祈る人が願ったことに、心を合わせるためです。それどころか、それぞれの人の御使い、教会の中の『小さい者』の御使いでさえ、『天にいます父の御顔をいつも』仰いでいます（マタイ一八・一〇）。そして、わたしたちを造ってくださった方の神性を見つめています。その御使いは、わたしたちと共に祈り、わたしたちが祈り求めることについて、できるかぎり共に働いてくれるのです。

12:1さらに、聖徒たちの祈りの言葉は力に満ちている、とわたしは思います。とりわけ、祈るときに『霊で』、『知性でも』祈るときです（第一コリント一四・一五）。その知性は、祈る人の思いから昇り、その口から出て行く光に似ています。そして、神の力によって、目に見えない毒を消すのです。その毒は、敵対する力が、祈りをおろそかにする人々の魂の主導部分に注ぎ込むものです。その人々は、イエスの勧めに従ってパウロが語った『絶えず祈りなさい』を守らないのです（第一テサロニケ五・一七）。いわば矢が、祈る人の魂から、すなわち聖徒から出て行くからです。知識と言葉によって、あるいは信仰によって出て行くのです。そして、神に敵する霊たちを射て、打ち倒し、滅ぼします。その霊たちは、罪の縛りをわたしたちにかけようとしているのです。12:2祈りをなすべき行いに結びつけ、祈りにふさわしい行いを結びつける人こそ、『絶えず』祈っているのです。徳の行いや、成し遂げられる戒めも、祈りの一部として取り込まれるのです。聖徒の生涯全体を、ひとつながりの一つの大きな祈りと言うとしましょう。そうしてはじめて、わたしたちは『絶えず祈りなさい』を、行えることとして語られた言葉と受け取れるからです。わたしたちがふだん祈りと呼んでいるものも、この祈りの一部です。それは、毎日、少なくとも三度は行うべきものです。それはダニエルについての記事から明らかです。ダニエルは、あれほどの危険が身に迫っていたのに、一日に三度祈っていました。また、ペテロは『昼の十二時ごろ』、『祈りをするため』『屋上に』上りました。そのとき、天から『降りて来る』『入れ物』を見ました。『四すみをつるされて降りて来る』入れ物です（使徒一〇・九～一一）。こうしてペテロは、三つの祈りの真ん中の祈りを示しています。それは、ペテロより前に、ダビデもこう語っていた祈りです。『朝に、あなたはわたしの祈りを聞いてくださいます。朝に、わたしはあなたの前に立ち、あなたを仰ぎ見ます』（詩篇五・三）[1]。最後の祈りは、次の言葉に示されています。『わたしが手をあげることは、夕べの供え物です』（詩篇一四一・二）。それどころか、夜の時でさえ、この祈りなしに過ごしては、ふさわしく過ごしたことになりません。ダビデは、こう言います。『わたしは夜半に起きて、

あなたの正しいおきてのゆえに、あなたに感謝した』（詩篇一一九・六二）。また、使徒行伝に語られているとおり、パウロは、ピリピで『真夜中ごろ』、シラスと共に祈り、神をほめたたえていました。囚人たちも『彼ら』に耳をすまして聞きいるほどでした（使徒一六・二五）。

訳注

1 この聖句は朝の祈りを言う。本文の一部が欠けているとみる説がある。

13章　祈りによって益を受けた人々

13:1 イエスは祈っておられます。しかも、むなしく祈っておられるのではありません。祈ることによって、お求めになるものを得ておられるのです。おそらく、祈りなしには、それをお受けになることはなかったでしょう。そうであれば、わたしたちのだれが、祈ることを怠ってよいでしょうか。実際、マルコはこう言っています。『朝はやく、夜の明けるよほど前に、イエスは起きて寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた』（マルコ一・三五）。また、ルカはこう言います。『また、イエスはある所で祈っておられたが、それが終ったとき、弟子のひとりが言った』（ルカ一一・一）。別の箇所では、こう言います。『夜を徹して神に祈られた』（ルカ六・一二）。また、ヨハネは、イエスの祈りを書き記して、こう言います。『これらのことを語り終えると、イエスは天を見あげて言われた、『父よ、時がきました。あなたの子があなたの栄光をあらわすように、子の栄光をあらわして下さい』』（ヨハネ一七・一）。同じヨハネのもとには、主がお語りになった言葉も書き記されています。『あなたがいつでもわたしの願いを聞きいれて下さることを、よく知っています』（ヨハネ一一・四二）。この言葉は、『いつでも』祈る方が、『いつでも』願いを聞き入れていただいていることを示しています。13:2 祈るべきしかたで祈ったことによって、神から最も大きなものを得た人々を、数え上げる必要があるでしょうか。それぞれが自分で、聖書からもっと多くの例を拾い集めることができるのです。実際、ハンナはサムエルの誕生に仕えました。サムエルは、モーセと並べて数えられた人です。ハンナがこの誕生に仕えたのは、子を産めずにいたときに、信じて主に祈ったためです。また、ヒゼキヤは、まだ子がなかったときに、自分が死ぬことをイザヤから知らされました。そして、祈って、救い主の系図に取り入れられたのです。また、ハマンのたくらみによって、民がただ一つの命令のもとに、今にも滅ぼされようとしていたときのことです。モルデカイとエステルの断食を伴う祈りが聞き入れられました。そして、モーセの定めた祭りに加えて、モルデカイの日という喜びの日を、民のために生み出したのです。それだけではありません。ユディトも、聖なる祈りをささげて、神と共にホロフェルネスに打ち勝ちます。こうして、ひとりのヘブルの女が、ネブカデネザルの家に恥をもたらしたのです（ユディト一四・一八）。また、『ハナニヤ、アザリヤ、ミシャエル』は（ダニエル三・二四）[1]、祈りを聞き入れられました。そうして、『そよぎ吹く露の風』を受けるにふさわしい者となったのです（ダニエル三・五〇）。その風は、火の炎が働くのを許さなかったのです。また、バビロンの穴にいた獅子たちは、ダニエルの祈りによって口をふさがれます。また、ヨナは、自分を呑んだ海の怪物の腹の中から、聞き入れられることを望み捨てませんでした。そして、海の怪物の腹から出て、ニネベの人々への預言の、果たし残したところを果たします。13:3 わたしたち一人一人も、自分に施された恩恵を感謝して思い起こすことがあるでしょう。そして、それについて神に賛美をささげようとするなら、どれほど多くのことを語り尽くせるでしょうか。実際、長いあいだ子を産まずにいた魂があります。その魂は、自分の魂の主導部分が不妊であり、自分の知性が子を産まないことに気づきました。そして、たゆまない祈りによって、聖霊から、救いをもたらす言葉を身ごもり、生んだのです。その言葉は、真理の洞察に満ちています。また、敵対する力の幾万もの軍勢が、たびたびわたしたちに攻め寄せ、わたしたちを神への信仰から消し去ろうとしてきました。そのとき、どれほど多くの敵が散らされたでしょうか。わたしたちは、『ある者は戦車に』、『ある者は馬に』頼る、と確信しています。しかし、『われらは主のみ名によって』呼び求めて（詩篇二〇・七）、まことに『馬は救いには偽りである』のを見るのです（詩篇三三・一七）。それだけではありません。敵対する者の総大将がいます。それは、欺きに満ち、もっともらしく聞こえる言葉です。その言葉は、信じたと思われている人々の中の多くの者をさえ、すくみ上がらせます。神への賛美に頼る人は、この総大将を、たびたび切り倒すのです。ユディトという名は、賛美と訳されるからです。また、どん

な炎よりも激しく焼く試みに、たびたび陥った人々がいます。その試みは、なかなか打ち勝てないものでした。それでも、その人々は試みから何の害も受けず、まったく無傷で通り抜けました。敵の『火』のにおいによる、わずかな害さえ受けなかったのです（ダニエル三・二七）。そのような人々がどれほど多いかを、言う必要があるでしょうか。さらに、どれほど多くの獣に、人々は出会ったことでしょう。わたしたちに向かって猛り立つ獣、すなわち悪い霊や残忍な人々です。人々は祈りによって、その口をたびたびふさぎました。獣たちは、キリストの肢体となったわたしたちに、歯を立てることができなかったのです。実際、聖徒の一人一人のために、たびたび、『主は獅子のきばをお砕きになった』のです。そして、獅子たちは『流れゆく水のように』消え去りました（詩篇五八・六～七）。また、わたしたちは知っています。神の命令から逃げた人々が、たびたび死に呑まれました。死が、先に力をふるって、その人々を打ち負かしたのです。しかし、その人々は、悔い改めによって、これほど大きな災いから救われました。すでに死の『腹の中に』捕らえられていても、救われうることを望み捨てなかったのです（ヨナ一・一七）。『死は力をふるって呑んだ。しかし、今度は神が、すべての顔から涙をぬぐい去ってくださった』からです（イザヤ二五・八）。[13:4] 祈りによって益を受けた人々を数え上げた後に、このことを語ったのは、わたしにとってどうしても必要だった、と思います。わたしは、霊的ないのち、キリストにあるいのちを慕う人々を、小さなもの、地のものを祈ることから引き離したいのです。そして、この書を読む人々を、奥義に関わることへと招きたいのです。わたしが先に語ったことは、その型だったのです。わたしが先に挙げた、霊的なこと、奥義に関わることについての祈りは、どれも、いつも、ある人によって果たされるからです。それは、『肉に従って』戦うのではなく（第二コリント一〇・三）、『霊によってからだの働きを』殺す人です（ローマ八・一三）。霊的な読みから吟味を経て示されることは、祈った人々に字義のうえで起こったと見える恩恵よりも、重んじられるのです。実際、霊的な律法を霊的な耳で聞くわたしたちは、自分のうちにも、子のない者や不妊の者が生じないよう、努めるべきです。こう努めるのは、子のない者、不妊の者であることを脱ぎ捨てて、ハンナやヒゼキヤのように聞き入れられるためです。また、たくらむ敵、すなわち悪の霊から（エペソ六・一二）、モルデカイやエステルやユディトのように救い出されるためです。また、エジプトは鉄の炉であり、地上のあらゆる場所のしるしです。人の世の悪をのがれ、罪に焼かれず、心を火の満ちたかまどのようにしなかった人がいます。ですから、そのような人はだれでも、火の中で『露』を味わった人々に劣らず、感謝すべきです。また、こう祈った人がいます。『あなたに感謝する魂を、獣に渡さないでください』（詩篇七四・一九）。こう祈って聞き入れられた人は、まむしや毒蛇から何の害も受けませんでした。キリストのゆえに、それらを踏んで行ったのです。また、『獅子と竜とを』踏みにじりました（詩篇九一・一三）。そして、イエスがお与えになった良い権威を用いました。『へびやさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ』権威です（ルカ一〇・一九）。このように、これほどのものから何の害も受けなかった人は、ダニエルにまさって感謝すべきです。ダニエルよりも恐ろしく、害の大きい獣から救い出されたのですから。さらに、ヨナを呑んだものが、どんな海の怪物の型であったかを確信した人がいます。それは、ヨブが語った、あの海の怪物です。『その日をのろう者が、これをのろうように。大いなる海の怪物を制しようとする者が』（ヨブ三・八）。このことを悟った人は、もし何かの不従順のために『海の怪物の腹の中に』入ることがあっても（ヨナ一・一七）、悔い改めて祈るべきです。そうすれば、そこから出て来るでしょう。そして、出て来てからも、神の命令に従い続けるなら、御霊の慈愛にかなって預言するでしょう。そうして、今も滅びようとしているニネベの人々に、救いのきっかけとなることができるのです。ただし、それは、神の慈愛を不満に思わないときです。悔い改める人々に対して、神が峻厳のままでおられるよう求めないときです。[13:5] サムエルは、祈りによって、きわめて大きなことをしたと言われています。まことに神にささげられた人が、聞き入れられるにふさわしい者となったとします。その人はだれでも、それを今も霊的な意味で果たすことができます。こう書かれているからです。『それゆえ、今、あなたがたは立って、主が、あなたがたの目の前で行われる、この大いなる事を見なさい。きょうは小麦刈の時ではないか。わたしは主に呼ばわるであろう。そのとき主は、声と雨とを与えてくださる』（第一サムエル一二・一六～一七）。そして、少し後には、こう言います。『サムエルが主に

呼ばわったので、主はその日、声と雨とをお与えになった』（第一サムエル一二・一八）。聖徒の一人一人、イエスのまことの弟子である人の一人一人に、主はこうお語りになるからです。『目をあげて畑を見なさい。はや色づいて刈入れを待っている。刈る者は報酬を受けて、永遠のいのちに至る実を集めている』（ヨハネ四・三五～三六）。まさにこの刈入れの時に、『主は』、預言者に耳を傾ける人々の『目の前で』、『大いなる事を行われる』のです。聖霊に飾られた人が『主に』呼ばわると、神は天から『声と』、魂をうるおす『雨』とをお与えになるからです。神がそうなさるのは、以前は悪の中にいた人が、主を、また神の恩恵に仕える者を、大いに恐れるようになるためです。神の恩恵に仕えるこの人は、聞き入れられたことを通して、敬うべき者、あがめるべき者として現されたのです。また、エリヤは、神を敬わない者たちに対して三年六か月閉ざされていた天を、後に神の言葉によって開きます。罪のために、以前は魂の雨を奪われていた人々がいます。そのうち、祈りによって魂の雨を受ける人は、だれでも、いつでも、このことを成し遂げるのです。

訳注

1 ダニエル書のギリシア語訳にだけある部分の言葉。

14章　願い、祈り、とりなし、感謝

14:1 わたしは、これらのことを、祈りによって聖徒たちに施された恩恵に当てはめて、解き明かしてきました。そこで、次の言葉をよく考えてみましょう。『大きなものを求めなさい。そうすれば、小さなものは添えて与えられる。天のものを求めなさい。そうすれば、地のものは添えて与えられる』。しるしや型であるものは、まことのもの、知性で捉えられるものと比べれば、どれも『小さなもの』『地のもの』です。おそらく、神のみことばは、聖徒たちの祈りにならうよう、わたしたちを招いているのでしょう。それは、聖徒たちが型として果たしていたことの真実に従って、その祈りを、わたしたちが求めるためです。そのために、みことばは、地の小さな事柄を通して示された『天のもの』と『大きなもの』を語り、こう言っているのでしょう。「霊の人になりたいと願うあなたがたは、祈りによって『天のもの』と『大きなもの』を求めなさい。それは、それを得て、天のものを得た者として天国を受け継ぎ、大きなものを得た者として最も大きな良いものを楽しむためである。また、『地のもの』と『小さなもの』は、体の必要のためにあなたがたに入り用なものだ。それを、父が必要な分だけ備え与えてくださるためである」。14:2 さて、使徒は、テモテへの第一の手紙で、四つのものについて四つの名を語っています。それは、祈りについての論に近いものです。そこで、使徒の文言を引いておきましょう。そして、四つの名の一つ一つを本来の意味で受け取ったときに、正しく理解できるかどうかを見ておくのは、有益でしょう。使徒はこう言います。『そこで、まず第一に勧める。すべての人のために、願いと、祈りと、とりなしと、感謝とをささげなさい』と、それに続く言葉です（第一テモテ二・一）。そこで、わたしはこう考えます。願いとは、何かに欠けている人が、それを得るために、嘆願を込めてささげる祈りです。祈り（プロセウケー）とは、ある人が、より大きな事柄について、栄光をたたえる言葉を伴い、より気高くささげるものです。とりなしとは、いくらか多くの確信を持つ人が、ある事柄について神に向ける願い出です。感謝とは、神から良いものを得たことについて、祈りを込めて恩を言い表すことです。それは、言い表す人が、施された恩恵の大きさを捉えたときです。あるいは、恩恵を受けた人に、その恩恵が大きなものと見えたときです。14:3 最初のもの、すなわち願いの例は、ガブリエルがザカリヤに語った言葉です。ザカリヤは、おそらく、ヨハネの誕生について祈っていたのでしょう。その言葉は、こうです。『恐れるな、ザカリヤよ、あなたの願いが聞きいれられたのだ。あなたの妻エリサベツは男の子を産むであろう。その子をヨハネと名づけなさい』（ルカ一・一三）。また、出エジプト記に、子牛を造ったときのこととして、こう書かれています。『モーセは主なる神の前で願って言った、『主よ、大いなる力をもって、エジプトの国から導き出されたあなたの民にむかって、なぜあなたの怒りが燃えるのでしょうか』』（出エジプト三二・一一）。また、申命記にはこうあります。『そしてわたしは、前のように二度目にも、四十日四十夜、主の前で願った。パンも食べず、水も飲まなかった。あなたがたが犯したすべての罪のためである』（申命記九・一八）。また、エステル記にはこうあります。『モルデカイは、主のすべてのみわざを思い起こしつつ、神に願って言った、『主よ、全能の王なる主よ』』（エステル四・一七）[1]。また、エステル自身も、『主なるイスラエルの神に願って言った、『主よ、わたしたちの王よ』』（エステル四・一七）。14:4 二つ目のもの、すなわち祈りの例は、ダニエル書にあります。『アザリヤは立って、こう祈った。そして、火の中で口を開いて言った』（ダニエル三・二五）。また、トビト記にもあります。『わたしは苦しみのうちに祈って言った、『主よ、あなたは正しい方です。あなたのみわざはすべて正しく、あなたの道はみな、あわれみとまことです。あなたは、とこしえに、まことの正しいさばきをなさいます』』（トビト三・一～二）。しかし、ダニエル書のこの言葉には、ヘブル語の本文にないものとして、疑わしい箇所の印が付けられています[2]。また、トビト記については、割礼の者たちが、聖書に含まれる書ではないとして、異を唱えています。ですから、わた

しは、王国の第一の書から、ハンナの祈りを引きましょう。『主に祈って、はげしく泣いた。そして誓願を立てて言った、『万軍の主よ、まことに、はしための悩みをかえりみ』』と、それに続く言葉です（第一サムエル一・一〇〜一一）。また、ハバクク書にもあります。『預言者ハバククの、歌を伴う祈り。主よ、わたしはあなたの声を聞いて、恐れました。主よ、わたしはあなたのみわざを悟って、驚きました。あなたは二つの生き物の間で知られ、年が近づくとき、はっきりと知られるでしょう』（ハバクク三・一〜二）。この祈りは、祈り（プロセウケー）の定義にかなうことを、はっきりと示しています。プロセウケーは、祈る人によって、栄光をたたえる言葉を伴ってささげられる、ということです。また、ヨナ書にもあります。『ヨナは海の怪物の腹の中からその神、主に祈って、言った、『わたしは悩みのうちから、わたしの神、主に呼ばわると、主はわたしに答えられた。わたしが陰府の腹の中から叫ぶと、あなたはわたしの声を聞かれた。あなたはわたしを淵の中、海のまん中に投げ入れられた。大水はわたしをめぐった』』（ヨナ二・一〜三）。14:5 三つ目のもの、すなわちとりなしの例は、使徒のもとにあります。使徒は、祈り（プロセウケー）をわたしたちの側に置き、とりなしを御霊の側に置いています。それは理にかなったことです。御霊はまさった方であり、とりなしを向ける相手に対して、『確信』を持っておられるのです（第一ヨハネ三・二一）。使徒はこう言います。『何を祈るべきかを、祈るべきようには、わたしたちは知らない。しかし、御霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、まさって神にとりなしてくださる。そして、人の心を探り知るかたは、御霊の思うところがなんであるかを知っておられる。なぜなら、御霊は、聖徒のために、神の御旨にかなうとりなしをして下さるからである』（ローマ八・二六〜二七）。御霊は、まさってとりなし、また『とりなして』くださるからです。一方、わたしたちは祈るのです。また、わたしには、ヨシュアが、ギベオンの上に日がとどまることについて語った言葉も、とりなしであると思われます。『そのとき、神がアモリびとをイスラエルの手にわたされた日に、ヨシュアは主にむかって言った。それは、神が彼らをギベオンで打ち砕かれ、彼らがイスラエルの人々の前で打ち砕かれたときである。ヨシュアは言った、『日よ、ギベオンの上にとどまれ、月よ、アヤロンの谷にやすらえ』』（ヨシュア一〇・一二）。また、士師記では、サムソンがとりなして、『わたしはペリシテびとと共に死のう』と言ったのだと、わたしは考えます。それは、サムソンが『力をこめて身をかがめると、家はその中にいた君たちと、すべての民の上に倒れた』ときです（士師記一六・三〇）。ヨシュアとサムソンについては、とりなしたとは書かれておらず、言ったと書かれています。それでも、二人の言葉は、とりなしであると見えます。そして、名を本来の意味で解するなら、とりなしはプロセウケーとは別のものだと、わたしは考えます。感謝の例は、わたしたちの主の声です。主はこうお語りになりました。『天地の主なる父よ。あなたをほめたたえます。これらの事を知恵のある者や賢い者に隠して、幼な子にあらわしてくださいました』（マタイ一一・二五、ルカ一〇・二一）。『ほめたたえます』は、『感謝します』と同じことだからです。14:6 さて、願いと、とりなしと、感謝とを、聖なる人々にささげることも、場違いではありません。ただし、そのうちの二つ（とりなしと感謝のことです）は、聖徒にだけでなく、ほかの人々にもささげてよいものです。一方、願いは、聖徒にだけささげるものです。それも、パウロやペテロのような人が見いだされるならです。それは、聖徒たちがわたしたちを益するためです。聖徒たちは、罪をゆるすために自分たちに授けられた権威に、わたしたちがあずかるのにふさわしい者としてくれるのです。もっとも、聖徒でない人であっても、わたしたちがその人に不義を行ったなら、話は別かもしれません。その人に対する自分の罪に気づいたなら、そのような人にも願うことが許されているのです。不義を行ったわたしたちに、その人がゆるしを与えてくれるためです。聖なる人々にさえ、これらのものをささげるべきだとしましょう。キリストは、父のみこころによって、これほどの恩恵をわたしたちに施してくださいました。それなら、キリストには、なおさら感謝すべきではありませんか。また、キリストに向かってとりなしもすべきです。ステパノがこう言ったようにです。『主よ、どうぞ、この罪を彼らに負わせないで下さい』（使徒七・六〇）。また、わたしたちは、てんかんの子の父にならって、こう言うでしょう。『お願いです』（ルカ九・三八）。『主よ』、『子を』、あるいはわたし自身を、あるいはだれであれ、『あわれんでください』（マタイ一七・一五）。

訳注

1　エステル記のギリシア語訳にだけある部分の言葉。

2　『わたしたちが印を付けた』と直す説もある。

15章　祈りは父にだけ、子を通してささげる

15:1 さて、祈り（プロセウケー）とはそもそも何かを、わたしたちが理解するとしましょう。そうであれば、生まれたもののだれにも、キリストご自身にさえ、祈るべきではないのではないでしょうか。祈るべきなのは、万物の神であり父である方にだけではないでしょうか。前に述べたとおり、わたしたちの救い主ご自身も、このかたに祈っておられました。そして、このかたに祈ることを、わたしたちにも教えておられます。実際、主は、『わたしたちにも祈ることを教えてください』と聞いて（ルカ一一・一）、ご自分に『祈る』ことを教えておられるのではありません。『天にいますわれらの父よ』と、それに続く言葉を唱えて、父に祈ることを教えておられるのです（マタイ六・九）。実際、ほかのところで示されているとおり、子が、実体においても基体においても、父とは別であるとしましょう。そうであれば、祈るべきなのは、子であって父ではないか、あるいは両方か、あるいは父だけかの、いずれかです。さて、子に祈って父には祈らないというのは、最も不合理で、明らかな事実に反する言い分です。だれであれ、そう認めるでしょう。また、両方に祈るのなら、わたしたちは明らかに、願いを複数形の言葉でささげることになるでしょう。祈りの中で、「あなたがたは、お与えください。恩恵を施してください。備えてください。救ってください」とか、これに似た言葉を言うことになるのです。しかし、それは、それだけでもおかしなことです。また、聖書の中に、だれかがそう言ったと書かれているのを、示せる人もいません。それならば、残るのは、万物の父である神にだけ祈ることです。ただし、大祭司を抜きにしてではありません。この大祭司は、父が『誓いをもって』お立てになった方です（ヘブル七・二〇〜二一）。『誓いを立てて、み心を変えられることはない、『あなたはメルキゼデクの位にしたがってとこしえに祭司である』』とあるとおりです（詩篇一一〇・四）。15:2 ですから、聖徒たちは、自分の祈りの中で神に感謝するとき、キリスト・イエスを通して、神に感謝を言い表すのです。祈ることを厳密に心得ている人は、みずから祈ってお られる方に祈るべきではありません。わたしたちの主イエスが、祈りのときに呼び求めるようお教えになった父に、祈るべきです。それと同じように、主を抜きにして、父に何かの祈りをささげるべきではありません。主ご自身が、そのことをはっきりと示して、こう言っておられるとおりです。『よくよくあなたがたに言っておく。あなたがたがわたしの父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう。今までは、あなたがたはわたしの名によって求めたことはなかった。求めなさい、そうすれば、与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう』（ヨハネ一六・二三〜二四）。実際、主は、わたしに『求めなさい』とはおっしゃいませんでした。ただ『父に』『求めなさい』ともおっしゃいませんでした。そうではなく、『あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう』とおっしゃったのです。イエスがこのことをお教えになるまでは、だれも、子の『名によって』『父に』求めたことはなかったからです。イエスがお語りになった次の言葉は、真実でした。『今までは、あなたがたはわたしの名によって求めたことはなかった』。そして、次の言葉も真実です。『求めなさい、そうすれば、与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう』。15:3 ところが、ある人が、キリストご自身に祈るべきだと考えるとします。その人は、「拝する」という語の意味に惑わされて、わたしたちに次の句を持ち出すかもしれません。『神の御使たちはことごとく、彼を拝すべきである』（申命記三二・四三、ヘブル一・六）[1]。これは、申命記の中で、まぎれもなくキリストについて言われた句です。その人には、こう言うべきです。教会も、預言者によってエルサレムと名づけられ、王たちや女の君たちに拝されるのだ、と。その人々は、教会の養父となり、乳母となります。そのことは、次の言葉で言われています。『見よ、わたしは手をもろもろの国にむかってあげ、旗を島々にむかって立てる。彼らはそのふところにあなたの子らを携え、その肩にあなたの娘たちを載せて来る。もろもろの王

は、あなたの養父となり、その女の君たちは、あなたの乳母となり、彼らはその顔を地につけて、あなたを拝し、あなたの足のちりをなめる。こうして、あなたはわたしが主であることを知り、恥をこうむることがない』（イザヤ四九・二二〜二三）。15:4では、『なぜわたしをよき者と言うのか。父なる神ひとりのほかによい者はいない』とお語りになった方なら（マルコ一〇・一八、ルカ一八・一九）、こうおっしゃることもできるのではないでしょうか。「なぜ、あなたはわたしに祈るのか。父にだけ祈るべきだ。わたしも、父に祈っている。そのことを、あなたがたは聖書から学んでいる。父は、大祭司を、あなたがたのためにお立てになった。その者は、父から、助け主であることを受けた。あなたがたは、その大祭司であり助け主である者に、祈ってはならないからだ。大祭司であり助け主である者を通して、祈るべきなのだ。この者は、『あなたがたの弱さを』思いやることができる。あなたがたと同じように、『すべてのことについて』試みられた。しかし、わたしに賜物をくださった父のおかげで、『罪は犯さずに』試みられたのだ（ヘブル四・一五）。だから、あなたがたがわたしの父からどれほどの賜物を受けたかを、学びなさい。あなたがたは、わたしにあって新たに生まれることによって、『子たる身分を授ける霊』を受けた（ローマ八・一五）。それは、あなたがたが『神の子』と呼ばれ（ローマ八・一四）、わたしの兄弟と呼ばれるためだ。実際、あなたがたは、わたしがダビデを通して、あなたがたについて父に語った声を読んだ。『わたしは、御名をわたしの兄弟たちに告げ知らせ、教会の中で、あなたをほめたたえよう』（詩篇二二・二二、ヘブル二・一二）。同じ一人の父を持つにふさわしいとされた者たちが、その兄弟に祈るのは、理にかなわない。あなたがたは、父にだけ、わたしと共に、わたしを通して、祈りをささげるべきだからだ」。

訳注

1 申命記のギリシア語訳にある句。ヘブル語から訳した聖書にはない。

16〜17章　地のものは、天のものに付いてくる影

16:1 ですから、イエスがこうおっしゃるのを聞くわたしたちは、このかたを通して神に祈りましょう。『みな語ることを一つにし』（第一コリント一・一〇）、祈りのしかたについても分かれないようにしましょう。それとも、ある者は父に、ある者は子に祈るなら、わたしたちは分かれていないでしょうか。子に祈る人々は、父と共にであれ、父を抜きにしてであれ、無学な人の罪を犯しているのです。まったく悪気のないまま、よく吟味せず、調べもしないために犯す罪です。ですから、わたしたちは、神であるこのかたに祈りましょう。父であるこのかたにとりなし、主であるこのかたに願いましょう。そして、神であり、父であり、主である方に感謝しましょう。ただし、このかたは、ただ奴隷の主であるというだけの方ではありません。『父』は（ローマ八・一五、ガラテヤ四・六）、子の主でもあり、子のゆえに子となった者たちの主でもある、と考えるのが理にかなっているからです。『神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である』とあります（マタイ二二・三二、マルコ一二・二七）。それと同じように、このかたは、生まれの卑しい奴隷たちの主ではありません。そうではなく、初めは、幼さのゆえに、恐れによって高貴な者に育てられていく人々の主です。そして、その後は、愛によって、恐れのうちの奴隷の務めよりも幸いな務めに仕える人々の主なのです。魂の中にも、神の奴隷のしるしと、神の子のしるしとがあるからです。それは、心をご覧になる方にだけ、はっきりと見えるしるしです。16:2 ですから、神に『地のもの』や『小さな』ものを求める人は、だれであれ、命じてくださった方に聞き従っていないのです。このかたは、『天の』ものと『大きな』ものを神に求めるよう、お命じになりました。その神は、地のものも小さなものも、何一つお恵みにならない方です。しかし、ある人が反論して、祈りによって聖徒たちに与えられた、体に関わる賜物を持ち出すとします。それだけでなく、福音の声も持ち出すとします。福音は、『地のもの』と『小さなもの』とが、わたしたちに添えて与えられると教えているのです。その人には、こう答えるべきです。だれかがわたしたちに、何であれある物体を贈ってくれたとしましょう。そのとき、だれそれがわたしたちに、その物体の影を贈ってくれた、と言うべきではありません。その人は、物体と影という二つのものを恵もうと意図して、物体を与えたのではないからです。そうではなく、与える人の意図は、物体を与えることです。そして、物体を与えることに、わたしたちがその影をも受け取ることが付いてくるのです。それと同じように、わたしたちの知性がより気高くなって、神がわたしたちに第一にお与えになる賜物を悟るとしましょう。そうすれば、こう言うのが最もふさわしいでしょう。体に関わるものは、大きな、天の、霊の賜物に付随するものだ、と。それは、聖徒たちの『各自に』与えられます。『全体の益になるため』に（第一コリント一二・七）、あるいは『信仰の程度に応じて』（ローマ一二・六）、あるいは、お与えになる方の『思いのままに』与えられるのです（第一コリント一二・一一）。わたしたちには、与えられるものの一つ一つについて、お与えになる方にふさわしいわけを言えないかもしれません。それでも、このかたは、知恵をもってお望みになるのです。16:3 ですから、ハンナの場合、ある不妊の状態から変わって実を結んだのは、サムエルを身ごもった体よりも、むしろ魂のほうでした。また、ヒゼキヤにも、体の種から生まれた子らがいました。しかし、ヒゼキヤが生んでいたのは、体の子よりも、むしろ知性の神的な子でした。また、エステルとモルデカイと民も救い出されました。それは、ハマンとそれに加担した者たちからよりも、むしろ目に見えないたくらみからでした[1]。あのホロフェルネスの力よりも、むしろ、自分の魂を滅ぼそうとした支配者の力を断ち切っていたのです[2]。また、ハナニヤと、共にいた者たちのうちにも、ネブカデネザルの炎に打ち勝った体の露がありました。しかし、そこに生じていたのは、それよりも、むしろ知性で捉えられる祝福でした。だれが、そう認めないでしょうか。その祝福は、すべての聖徒に及ぶもので、イサクがヤコブに語った次の言葉です。『どうか神が、天の露を、あなたに賜わる

ように』（創世記二七・二八）。また、預言者ダニエルのために口をふさがれたのも、感覚でとらえられる獅子よりも、むしろ目に見えない獅子でした。その獅子は、ダニエルの魂に何一つ手出しができなかったのです。感覚でとらえられる獅子とは、聖書のその箇所を読むわたしたちが皆、そこで言われていると受け取ってきた獅子のことです。また、ヨナのように、海の怪物の腹から逃れ出た者が、ほかにいるでしょうか。この怪物は、わたしたちの救い主イエスが制しておられるもので、神のもとから逃げる者をすべて呑み込みます。ヨナは、聖なる者として、聖霊を受け入れる者となっていたのです。

17:1 こう言ってよければ、このような影を生み出す物体を受ける人々がいます。その人々のすべてに、ひとしく同じ影が与えられるわけではありません。一方、ある人々には同じように影が与えられます[3]。そうだとしても、驚くにはあたりません。日時計の問題や、照らす物体に対する影の割合を考察する人々がいます。その人々には、このことが物体の場合にも起こるのが、はっきりわかるからです。現に、ある人々のところでは、ある時に、日時計の針に影がありません。ほかの人々のところでは、いわば影が短く、また、ある人々のところでは、ほかの人々のところより影が長いのです。ですから、次のようなことがあっても、大したことではありません。贈ってくださる方は、第一のものをお恵みになることを意図しておられます。それも、言い表せない、奥義に関わるある割合に従ってお恵みになります。受ける人々と、第一のものが与えられる時とにふさわしくお恵みになるのです。そこで、受ける人々に影がまったく付いてこないことがあります。また、すべてのものの影ではなく、わずかなものの影だけが付いてくることもあります。また、ほかの人々に比べて、小さな影が付いてくることもあります。ほかの人々には、もっと大きな影が付いてくるのです。太陽の光を求める人にとって、物体の影は、あってもなくても、喜びにも悲しみにもなりません。その人は、最も必要なものを持っているのです。光に照らされているなら、影を欠いていても、または影を多く持っていても、あるいは少なく持っていても、そうです。それと同じように、霊のものがわたしたちにあるとしましょう。そして、まことの善いものを余すところなく得るために、神から光を受けているとしましょう。そうであれば、わたしたちは、影という取るに足りないことに、こだわらないでしょう。物質に関わるもの、体に関わるものは、どんなものであれ、すべて、はかなく力のない影のようなものだからです。それらは、万物の神の、救いをもたらす聖なる賜物とは、決して比べものになりません。体に関わる富と、『すべての言葉』と『すべての』知恵とに恵まれた富とを、どうして比べられるでしょうか（第一コリント一・五）。また、肉と骨の健やかさを、健やかな知性や、強い魂や、釣り合いのとれた思いと比べる人がいるでしょうか。気が狂っているのでなければ、だれもしないでしょう。これらはすべて、神のロゴスによって整えられると、体の苦しみを、取るに足りないかすり傷にしてしまいます。かすり傷よりもっと小さいと思えるものにさえ、するのです。17:2 また、花嫁の美しさとは何であるかを悟った人がいます。その花嫁は、『花婿』（ヨハネ三・二九）である神のロゴスが愛しておられる魂で、天を超え、世を超えた美しさに花咲いています。その人は、女や子供や男の体の美しさを、同じ美しさという名で敬うことさえ、恥じるでしょう。本来の意味での美しさを、肉は受け入れることができないからです。肉は、みな醜いものなのです。実際、『肉はみな草のごとく』です。そして、その『栄華』は、女や子供のいわゆる美しさに現れるものですが、預言の言葉によって花にたとえられています。その言葉は、こう言います。『肉はみな草のごとく、その栄華はみな草の花に似ている。草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉は、とこしえに残る』（イザヤ四〇・六〜八、第一ペテロ一・二四〜二五）。また、神の子たちの高貴な生まれを悟った人がいます。その人が、人々のあいだで高貴な生まれと言いならわされているものを、なお本来の意味でそう呼ぶでしょうか。また、知性がキリストの『震われない』『国』を見つめたとします（ヘブル一二・二八）。その知性が、どうして地上のあらゆる国を、取るに足りないものとして軽んじないでしょうか。まだ体に縛られている人の知性が、受け入れることのできるかぎり、御使いたちの軍勢を、できるだけはっきりと見たとします。その中にいる主の軍勢の将たちと、御使いのかしらたちと、天を超えた位、主権、支配、権威とを見たとします。そして、父から、それらと等しい誉れを受けることができる、と捉えたとします。そのような知性は、たとえ影よりも力のないものであっても、比べて軽んじます。愚かな者たちが感嘆しているこれらのものをも、最もかすんだ、取るに足りないものと

して軽んじるのです。そして、たとえこれらがすべて与えられても、それを見過ごすのではないでしょうか。見過ごすのは、まことの支配とより神的な権威を得そこなわないためです。ですから、祈るべきです。第一の、まことに大きな、天のものについてこそ、祈るべきです。そして、第一のものに付いてくる影については、神にゆだねるべきです。この神は、わたしたちが滅びゆく体のゆえに『必要』とするものを、わたしたちが『求めない先から』ご存じなのです（マタイ六・八）。

訳注

1 ここで写本が空白になっている。
2 前の欠けのため、文の途中から始まる。これはユディトの話。
3 『ある人々には影がまったく与えられない』と直す説もある。

18〜19章　二つの主の祈りと、人に見せる祈り

18:1 さて、わたしは、祈りについての問題を、十分に吟味してきました。わたしが語ったことは、神がそのキリストを通してお与えになった恵みに従い、わたしが受け入れることのできたかぎりのものです。願わくは、聖霊のうちにも語ったのであってほしいものです。そうであるかどうかは、あなたがたがこの書き物を読んで、判断するでしょう。わたしは、いよいよ次の課題に進みます。主がお示しになった祈りが、どれほどの力に満ちているかを、よく見たいのです。18:2 何よりもまず、注意しておくべきことがあります。多くの人には、マタイとルカが同じ祈りを書き記したように思えるでしょう。このように祈るべきだという型として、描き示された祈りです。マタイの言葉は、次のとおりです。『天にいますわれらの父よ、御名が聖とされますように。御国がきますように。みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように。わたしたちの、存在を支えるパンを、きょうお与えください。わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしください。わたしたちを試みに引き入れないで、悪しき者からお救いください』（マタイ六・九〜一三）。ルカの言葉は、こうです。『父よ、御名が聖とされますように。御国がきますように。わたしたちの、存在を支えるパンを、日々お与えください。わたしたちに負債のある者を皆ゆるしますから、わたしたちの罪をもおゆるしください。わたしたちを試みに引き入れないでください』（ルカ一一・二〜四）。18:3 このように受け取っている人々には、こう言うべきです。第一に、二つの祈りの言葉には、互いに近いところもいくらかあります。しかし、ほかのところでは違っているように見えます。そのことは、言葉を調べながら、わたしが示しましょう。第二に、主が同じ祈りを、二つの場面でお語りになったということは、ありえません。一つは山の上です。イエスは、そこへ『群衆を見て、登り』、そのとき、『座につかれると、弟子たちがみもとに近寄ってきた。そこで、イエスは口を開き、教えて』おられました（マタイ五・一〜二）。マタイのもとでは、この祈りは、幸いについての告知と、それに続く戒めとのつながりの中に書き記されているからです。もう一つは、『イエスはある所で祈っておられたが、それが終ったとき』、『弟子の』ひとりに向けてお語りになった場面です。その弟子は、『祈ることを、ヨハネがその弟子たちに教えていたように』教えてほしいと願い出たのです（ルカ一一・一）。実際、主が同じ言葉を、前に何の問いもないまま、定めとしてお語りになったとします。その同じ言葉を、弟子の願い出に応えてお告げになることが、どうしてありうるでしょうか。しかし、これに対して、おそらくこう言う人もいるでしょう。二つの祈りは同じ意味を持つ。主は、それを一つの祈りとしてお語りになったのだ。一度は長く続く話の中で、一度は、願い出たほかの弟子に向けてお語りになったのだ。その弟子は、主がマタイの伝える祈りをお語りになっていたとき、たぶんその場にいなかったのだ。あるいは、前にお語りになったことを、覚えていなかったのだ、と。しかし、二つの祈りは、共通する部分をいくらか持つ、別々の祈りだと考えるほうが、よいのではないでしょうか。わたしは、マルコのもとでも探してみました。同じ意味を持つこのような祈りが書き記されているのを、見落としていないかと思ったからです。しかし、そこには、祈りの跡さえ見つかりませんでした。

19:1 わたしが前に述べたとおり、祈る人は、まず、ある仕方で身を整え、心を備えるべきです。そうしてから、祈るべきです。ですから、マタイのもとにある祈りの前に、わたしたちの救い主がその祈りについてお告げになった言葉を見ましょう。それは、次のとおりです。『祈る時には、偽善者たちのようにするな。彼らは人に見せようとして、会堂や広い通りのかどに立って祈ることを好む。アーメン、あなたがたに言っておくが、彼らはその報いを受けてしまっている。あなたは祈る時、自分のへやにはいり、戸を閉じて、隠れた所においでになるあなたの父に祈りなさい。すると、隠れた所であなたを見ておられるあなたの父は、報いてくださるであろう。また、祈る場合、異邦人のように、くどくどと祈

るな。彼らは言葉かずが多ければ、聞きいれられるものと思っている。だから、彼らのまねをするな。あなたがたの父は、求めない先から、あなたがたに必要なものはご存じなのである。だから、あなたがたはこう祈りなさい』（マタイ六・五～九）。19:2 さて、わたしたちの救い主は、多くの箇所で、誉れを好む心に立ち向かっておられます。滅びをもたらす情念に対するように、立ち向かっておられるのがわかります。ここでもそうなさいました。祈りのときに、偽善者のわざを行わないよう戒めておられるのです。人々の前で、敬虔なことや、分け与えることを誇りたがるのが、偽善者のわざだからです。わたしたちは、次の言葉を覚えているべきです。『人々から誉れを受けながら、ただひとりの神からの誉れを求めようとしないあなたがたは、どうして信じることができようか』（ヨハネ五・四四）。そして、人々のもとでの誉れは、たとえ良いことのゆえに生じると思われても、すべて軽んじるべきです。そうして、本来の、まことの誉れを求めるべきです。それは、ただひとりの方からの誉れです。このかたは、誉れにふさわしい者に、ご自分にふさわしく、誉れを受ける者の値打ちを超えて、誉れをお与えになるのです。ですから、良い、称賛に値すると思われるはずの行いそのものも、良く行われているように見えても、汚されてしまいます。わたしたちが、それを『人に』ほめられる『ため』に、あるいは『人に』見せようと『して』行うときです（マタイ六・二）。そのため、それについて、神からの報いは、わたしたちに何も伴いません。イエスの言葉は、どれも偽りがないからです。そして、無理を承知で言うなら、イエスがいつもの誓いを添えてお語りになるときには、いっそう偽りのないものとなります。さて、人からの誉れのために、隣人に善を行っているように見える人々がいます。また、『人に見せようとして』、『会堂や広い通りのかどで』祈る人々がいます。イエスは、そのどちらについても、同じことをおっしゃいます。それは、『アーメン、あなたがたに言っておくが、彼らはその報いを受けてしまっている』という言葉です。実際、ルカの伝える金持ちは、人間としての自分の『生前』に、『よいもの』を受けてしまいました（ルカ一六・二五）。それを受けてしまったために、今の生の後には、もはやそれを得ることができません。それと同じように、だれかに何かを施すときにであれ、祈りのうちにであれ、自分の『報い』を受けてしまう人がいます。その人は、『霊に』ではなく『肉に』まいたのです。ですから、『滅び』を『刈り取り』はしても、『永遠のいのち』を『刈り取る』ことはないでしょう（ガラテヤ六・八）。『肉に』まく人とは、次のような人です。『会堂や町の中で』、『人に』ほめられる『ため』に、自分の『前で』ラッパを吹き鳴らして『施し』をする人です。あるいは、『会堂や広い通りのかどに』立って『祈る』ことを好む人です。『人に』見られて、見た人々から、敬虔で聖なる者だと思われる『ため』です。19:3 それだけではありません。広く、ゆったりとした道を歩む人がいます。その道は『滅び』にいたり（マタイ七・一三）、まっすぐで正しいところが何一つありません。すべて曲がりくねり、かどだらけです（まっすぐな線が、ほとんどの所で折れているからです）。そのような道を歩む人は、だれでも、その道によくない立ち方で立っており、『広い通りのかどで』祈っています。快楽を愛するために、一本ではなく何本もの広い通りに入り込んでいるのです。その通りでは、神性から落ちたために『人のように』死ぬ者たちが（詩篇八二・七）、誉れを与え、幸いだと言っています。その相手は、彼らのあいだで、広い通りで不敬虔を行うのがならいとなっている者たちです[1]。祈るときに、『神よりも快楽を愛する者』であることをあらわす人々は（第二テモテ三・四）、いつも大勢います。その人々は、宴会のさなかや酒盛りの席で、酔って祈りを辱めています。まことに、『広い通りのかどに立って』祈っているのです。快楽に従って生きる人は、だれでも、ゆったりとした道を愛したのです。そのために、イエス・キリストの狭く細い道から落ちてしまっているからです。この道には、ちょっとした曲がりさえなく、かどはまったくありません。

訳注

1 『不敬虔』を『敬虔』と直す説もある。

20〜21章　へやの祈りと、くどくどと祈ること

20:1 さて、教会と会堂とのあいだには、何か違いがあるかもしれません。本来の意味での教会は、『しみも、しわも、そのたぐいのものも』持たず、清く、傷のないものです（エペソ五・二七）。そこには、『遊女から生まれた者』も入らず、『睾丸のつぶれた者』も『切り取られた者』も入りません。それだけでなく、エジプトびともエドムびとも入りません。ただし、彼らに子が生まれ、三代目になったことによって、やっと教会になじむことができるなら、別です。『モアブびと』も『アンモンびと』も入りません。ただし、十代目が満ち、世が終わるなら、別です（申命記二三・一〜三、二三・七〜八）。一方、会堂は、百卒長によって建てられるものです（ルカ七・五）。百卒長は、イエスがおいでになる前の時代に、それを建てました。そのときにはまだ、証しを受けていませんでした。神の子が『イスラエルの中でも』お見いだしにならなかったほどの『信仰』を持っている、という証しです（ルカ七・九、マタイ八・一〇）。もし、教会と会堂とにこのような違いがあるなら、『会堂で』『祈る』ことを好む人は、『広い通りの』かどから遠くはありません（マタイ六・五）。しかし、聖徒はそのような人ではありません。聖徒は、『祈る』ことを、好むのではなく愛するからです。また、聖徒が祈るのは、『会堂で』ではなく教会でです。『広い通りのかどで』ではなく、狭く細い道のまっすぐなところでです。それだけでなく、『人に』見せるためにではなく、『主なる神の前に』姿を現すために祈るのです。聖徒は、『主の恵みの年』を悟り（イザヤ六一・二、ルカ四・一九）、次のように言う掟を守る男だからです。『男子はみな、年に三度、主なる神の前に姿を現さなければならない』（申命記一六・一六、出エジプト二三・一七）。20:2 さて、『見せよう』という語は、注意深く聞くべきです。見えるだけのものは、何一つ善くないのですから。それは、いわば見かけのうえで存在するだけで、まことに存在するのではないのです。印象を惑わすもので、正確に、まことに形を写し出すものではないのです。劇場で何かの劇を演じる役者（ヒュポクリタイ）は、名乗っている者ではありません。また、かぶっている仮面のとおりに見られている者でもありません。それと同じように、見かけによって善の外観をまとう人々はみな、義人ではなく、義の偽善者（ヒュポクリタイ）です。彼らもまた、自分の劇場で演じているのです。その劇場とは、『会堂や広い通りのかど』です。一方、偽善者でなく、自分のものでないものをすべて脱ぎ捨てた人がいます。その人は、前に述べたどの劇場よりもはるかに大きな劇場で、喜ばれるように身を整えます。そして、自分の『へや』に入ります（マタイ六・六）。そこに蓄えられた富のもとで、『知恵と知識との』宝を、自分のために閉じ込めたのです（コロサイ二・三）。その人は、外へはまったく目を向けず、外のものに口を開けて見とれることもありません。そして、感覚に引きずられず、その印象が知性に入り込まないように、感覚器官のあらゆる『戸』を閉じます。そのうえで、父に祈ります。父は、このような隠れた所を避けることも、見捨てることもなさらず、そこに住んでおられます。ひとり子も、共にそこにおられます。実際、主はおっしゃいます。「わたしと『父とは』、『その人のところに行って、その人と一緒に住むであろう』（ヨハネ一四・二三）」。また、明らかなことがあります。わたしたちがこのように祈るなら、義なる方に、神としてだけでなく、父としても願い出ることになるのです。このかたは、子らをお離れにならず、わたしたちの『隠れた所』にいてくださり、それを見ておられます。そして、わたしたちがへやの『戸』を閉じるなら、へやの中のものを、さらに多くしてくださるのです。

21:1 しかし、祈るときには、くどくどと祈るのではなく、神のことを語りましょう（マタイ六・七）。わたしたちがくどくどと祈るのは、次のようなときです。自分自身や、ささげる祈りの言葉に傷がないかを調べずに、朽ちたわざ、あるいは言葉、あるいは思いを口にするときです。それらは卑しく、とがめられるべきもので、主の朽ちないありさまとは無縁なものです。しかし、祈るときにくどくどと祈る人は、すでに、わたしが前に述べたもののうち、より悪いほうの、

会堂の状態にあります。また、広い通りのかどの道よりも、さらに険しい道にいます。善を装う偽善の跡さえ、とどめていないのです。福音書の字義のうえでは、くどくどと祈るのは『異邦人』だけだからです。彼らは、大きな求めや天の求めを、思い浮かべることさえしません。体に関わるものと外のものについて、あらゆる祈りをささげるのです。ですから、天におられ、天の高みを越えて住んでおられる主から、下のものを求める人は、くどくどと祈る異邦人に似ています。21:2また、言葉かずを多くする人は、くどくどと祈っているようです。そして、くどくどと祈る人は、言葉かずを多くしているようです。物質と物体のうちには、一つであるものは何もないからです。そうではなく、一つと思われているものもみな、裂かれ、切り刻まれ、分けられています。多くのものになり、一つであることを失っているのです。善は一つですが、恥ずべきものは多くあるのです。真理は一つですが、偽りは多くあります。まことの義は一つですが、多くの性向がそれを装っています。神の知恵は一つです。しかし、滅び行く知恵、すなわち『この世の者の』知恵と『この世の支配者たちの』知恵は、多くあります（第一コリント二・六）。そして、神のロゴスは一つです。しかし、神と無縁の言葉（ロゴイ）は、多くあります。そのため、『言葉かずが多ければ』、だれも『とが』を免れることはありません（箴言一〇・一九）。また、『言葉かずが多ければ』聞きいれられると思う人は、だれも聞きいれられることができません。ですから、わたしたちの祈りを、くどくどと祈る異邦人や、言葉かずを多くする異邦人に、似せるべきではありません。また、彼らが『蛇に似て』行うどんなことにも、似せるべきではありません（詩篇五八・四）。聖徒たちの神は、『父』であって、その子らに『必要なもの』を『ご存じ』だからです（マタイ六・八）。子らの必要なものは、父の知識にふさわしいものなのですから。しかし、神を知らない人は、神のことも知らず、自分に『必要なもの』も知りません。自分に『必要』だと思っているものは、的を外れているからです。一方、自分に欠けている、よりすぐれた、より神的なものを見つめた人は、見つめたものを得るでしょう。それは、神がご存じのもので、求める前から父がご存じのものです。さて、マタイのもとにある祈りに先立つ言葉について、以上のことを述べました。そこで、いよいよ、祈りそのものが示していることも見ましょう。

22章　神を父と呼ぶ子たち

22:1 『天にいますわれらの父よ』（マタイ六・九）。いわゆる旧約の中に、神を父と呼ぶ人の祈りがどこかに見つかるかどうか、もっと注意深く調べてみる価値があります。わたしは今のところ、力の及ぶかぎり調べましたが、見つけていないからです。ただし、わたしが言うのは、神が父と言われていない、ということではありません。また、神を信じたと認められている人々が神の子と呼ばれなかった、ということでもありません。そうではなく、神を父と呼ぶはばかりのなさは、救い主が告げ知らせてくださったものです。それを、わたしはまだ祈りの中に見つけていない、ということです。神が父と言われ、神の言葉に近づいた人々が子と言われていることは、多くの箇所で見ることができます。たとえば、申命記にもこうあります。『あなたは、あなたを生んだ神を捨て、あなたを養う神を忘れた』（申命記三二・一八）。また、こうもあります。『このかたこそ、あなたを得、あなたを造り、あなたを創造した、あなたの父ではないか』（申命記三二・六）。また、『真実のない子ら』（申命記三二・二〇）ともあります。イザヤ書にはこうあります。『わたしは子らを生み、高くした。しかし彼らはわたしにそむいた』（イザヤ一・二）。マラキ書にはこうあります。『子は父を敬い、しもべはその主人を敬う。わたしがもし父であるならば、わたしの誉れはどこにあるか。わたしがもし主人であるならば、わたしへの恐れはどこにあるか』（マラキ一・六）。22:2 ですから、たしかに神は父と言われ、神への信仰の言葉によって生まれた人々は子と言われています。それでも、子であることの確かさと変わらなさは、昔の人々のもとには見られません。現に、わたしが挙げた箇所そのものが、子と言われている人々がとがめられるべき者であることを示しています。使徒も、こう言っているのですから。『相続人が子供である』あいだは、『全財産の持ち主でありながら、僕となんの差別もなく、父親の定めた時期までは、管理人や後見人の監督の下に置かれている』のです（ガラテヤ四・一～二）。しかし、『時の満ちる』ことは、わたしたちの主イエス・キリストがおいでになったときにあります（ガラテヤ四・四）。そのとき、望む人々は子たる身分を受けるのです。パウロが次の言葉で教えるとおりです。『あなたがたは恐れをいだかせる奴隷の霊を受けたのではなく、子たる身分を授ける霊を受けたのである。その霊によって、わたしたちは『アバ、父よ』と呼ぶのである』（ローマ八・一五）。また、ヨハネによる福音書にはこうあります。『しかし、彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである』（ヨハネ一・一二）。そして、この『子たる身分を授ける霊』のゆえに、わたしたちは次のことを学んでいます。ヨハネの公同の手紙で、神から生まれた人々について言われていることです。『すべて神から生れた者は、罪を犯さない。神の種が、その人のうちにとどまっているからである。また、その人は、神から生れた者であるから、罪を犯すことができない』（第一ヨハネ三・九）。22:3 けれども、ルカのもとに書かれている『祈るときには、こう言いなさい、『父よ』』（ルカ一一・二）とは何かを、悟るとします。そうすれば、まことの子となっていないなら、わたしたちは、この呼びかけを神に向けることをためらうでしょう。わたしたちのほかの罪に加えて、不敬虔の罪にまで問われるおそれがあるのです。わたしの言うことは、こういうことです。パウロは、コリント人への第一の手紙で言っています。『聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』と言うことができない。また、神の霊によって語る者はだれも『イエスはのろわれよ』とは言わない』（第一コリント一二・三）。パウロは、同じものを、聖霊とも、『神の』霊とも呼んでいるのです。しかし、『聖霊によって』イエスを主と言うとはどういうことかは、あまりはっきりしません。数えきれない偽善者や、多くの、異なる教えを持つ者たちが、この言葉を口にするのです。時には悪霊たちまでも、名にある力に負かされて、口にします。ですから、だれも、これらの者のだれかが『聖霊によって』イエスを主と言っている、とあえて言い切りはしないでしょう。そのため、彼らがイエスを主と言っている、とは示されもしないでしょう。

イエスを主と言っているのは、ただ次のような人々だけなのです。神のロゴスに仕えることにおいて、心の構えから『イエスは主である』と言う人々です。そして、何をするにも、このかたのほかにはだれをも主と呼ばない人々です。もし、『イエスは主である』と言う人々がそのような人々であるなら、どうでしょう。罪を犯す者はみな、律法に背いて神のロゴスをのろい、おそらく、行いによって『イエスはのろわれよ』と叫んでいるのです。ですから、このような人は『イエスは主である』と言い、これと反対の構えを持つ者は『イエスはのろわれよ』と言います。同じように、『すべて神から生れた者』で、あらゆる罪から遠ざける神の種にあずかっているので『罪を』犯さない人がいます。その人は、自分の行うことを通して、『天にいますわれらの父よ』と言うのです。御霊みずからも、彼らの『霊』と共に、次のことをあかししてくださいます。彼らは『神の子』であり、神の『相続人』であって、『キリストと共同の相続人』なのです（ローマ八・一六～一七）。彼らは、共に苦しんでいるので、共に栄光を受けることをも、理にかなって望んでいるのですから。心は、よい行いの源であり始まりです。そのような人々が『われらの父よ』を半分だけ言うことのないように、行いと共に、その心も『義に至る』ように信じます。そして、それらと声を合わせて、口も『救いに至る』ように告白するのです（ローマ一〇・一〇）。22:4 ですから、彼らのすべての行いと言葉と思いは、ひとり子であるロゴスによって、このかたにならって形づくられています。そして、『見えない神の』かたちをまねており（コロサイ一・一五）、『造り主のかたちに従って』生じています（コロサイ三・一〇）。この造り主は、『悪い者の上にも良い者の上にも』『太陽を』のぼらせてくださいます。また、『正しい者にも正しくない者にも』雨を降らせてくださいます（マタイ五・四五）。そのため、彼らのうちには『天に属する方のかたち』があり（第一コリント一五・四九）、そのかたご自身も、神のかたちでおられます。ですから、聖徒たちは、かたちの『かたち』であり（第一コリント一一・七）、そのかたちは子なので、子であることを写し取ります。彼らは、キリストの『栄光のからだ』と同じ姿になるだけでなく、その『からだ』のうちにおられる方とも、同じ姿になるのです（ピリピ三・二一）。彼らは、『心を新たにすること』によって姿を変えられ（ローマ一二・二）、『栄光のからだ』のうちにおられる方と同じ姿になります。もし、そのような人々が、すべてにおいて『天にいますわれらの父よ』と言うのなら、明らかなことがあります。ヨハネが公同の手紙で言うとおり、『罪を犯す者は』、『悪魔から出た者である。悪魔は初めから罪を犯しているからである』ということです（第一ヨハネ三・八）。神の『種』は、『神から』生まれた者のうちにとどまります。そして、ひとり子であるロゴスにならって形づくられた人が『罪を犯す』ことができない原因となります。それと同じように、『罪を』犯す人にはみな、悪魔の『種』があります。それが魂のうちにあるあいだは、それを持つ人が正しく行うことができないようにするのです。しかし、『神の子が現れたのは、悪魔のわざを滅ぼしてしまうためである』のです（第一ヨハネ三・八）。ですから、神のロゴスがわたしたちの魂においでになれば、『悪魔の』わざは滅ぼされるでしょう。そうして、わたしたちのうちに置かれた悪い『種』が消し去られ、わたしたちが『神の子』となることができるのです（第一ヨハネ三・一〇）。22:5 ですから、わたしたちは、祈りのために定められたある時に唱える文句を教えられているのだ、と思わないようにしましょう。そうではなく、わたしは前に、『絶えず』祈ることについて調べました（第一テサロニケ五・一七）。それをわたしたちが悟っているなら、『絶えず』祈るわたしたちの生涯の全体が、こう言うようにしましょう。『天にいますわれらの父よ』。その生涯は、『国籍』を、決して地上にではなく、あらゆるしかたで『天に』持っているのです（ピリピ三・二〇）。その天は、神の国が据えられていることのゆえに、神の位となっています。神の国は、『天に属する方のかたち』を帯び、そのため天に属する者となったすべての人のうちに、据えられているのです。

23章　場所に限られない神

23:1 さて、聖徒たちの父は『天に』いますと言われています（マタイ六・九）。だからといって、父が体の形のうちに限られていて、『天に』住んでおられる、と考えるべきではありません。もしそうなら、天が神を包むことになり、神は包まれる者として、天よりも小さいと分かることになるのですから。むしろ、その神性の言い表せない力によって、万物がこのかたに包まれ、まとめ保たれている、と確信すべきです。また、一般に、字面のうえでは、神がある場所におられると言っているように、より単純な人々には思われる言葉があります。そうした言葉は、神についての大きな、霊的な考えにふさわしく、意味を移して受け取るべきです。ヨハネによる福音書にある、次のような言葉がそれです。『過越の祭の前に、イエスは、この世から父のみもとに移るべき自分の時がきたことを知り、世にいる自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された』（ヨハネ一三・一）。また、少し後にはこうあります。『父がすべてのものを自分の手にお与えになったこと、また、自分は神から出てきて、神にかえろうとしていることを思い』（ヨハネ一三・三）。また、別の箇所にはこうあります。『『わたしは去って行くが、またあなたがたのところに帰って来る』と、わたしが言ったのを、あなたがたは聞いている。もしわたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くのを喜んでくれるであろう』（ヨハネ一四・二八）。さらに、また別の箇所にはこうあります。『けれども今わたしは、わたしをつかわされたかたのところに行こうとしている。しかし、あなたがたのうち、だれも『どこへ行くのか』と尋ねる者はない』（ヨハネ一六・五）。実際、もしこれらの言葉を場所の意味で受け取るべきなら、明らかに、次の言葉も場所の意味で受け取るべきことになります。『イエスは彼らに答えて言われた、『もしだれでもわたしを愛するならば、わたしの言葉を守るであろう。そして、わたしの父はその人を愛し、また、わたしたちはその人のところに行って、その人と一緒に住むであろう』』（ヨハネ一四・二三）。23:2 しかし、このことは、父と子が、イエスの言葉を愛する人のもとへ場所を移ることとして起こるのではありません。それなら、先の言葉も、場所の意味で受け取るべきではありません。そうではなく、神のロゴスは、わたしたちのところに降りて来てくださいました。そして、人々のもとにおられるあいだは、ご自分の本来の尊さに比べれば、低くなっておられます。そのロゴスが、『この世から父のみもとに』お移りになる、と言われているのです。それは、わたしたちもまた、かしこで、このかたを完全な方として見るためです。このかたは、わたしたちのもとでのむなしさから、ご自分の『満ちみちたもの』へとお帰りになるのです（コロサイ二・九）。そのむなしさとは、このかたが『おのれをむなしう』された、そのむなしさです（ピリピ二・七）。そこでは、わたしたちもまた、このかたを道案内として、満たされ、あらゆるむなしさから解き放たれるでしょう。ですから、神のロゴスは、世をお離れになって、ご自分を『つかわされたかたのところに』おいでになるがよいでしょう。そして、『父のもとに』お進みになるがよいでしょう。また、ヨハネによる福音書の終わりにある、『わたしにさわってはいけない。わたしは、まだ父のみもとに上っていないのだから』（ヨハネ二〇・一七）という言葉も、より奥義に関わるしかたで悟ろうと求めましょう。子が『父のみもとに』お上りになることを、わたしたちは、より神にふさわしく、聖なる明晰さをもって理解するのです。その上りは、体よりも、むしろ知性が上る上りなのです。23:3 わたしは、これらのことを、『天にいますわれらの父よ』という句と合わせて調べた、と考えています。それは、神が場所の意味で『天に』おられると考える人々の、神についての低い考えを取り除くためです。また、神が体のある場所におられる、とだれにも言わせないためです（そう言うなら、神が体であることも、それに伴うのですから）。神が体であるということには、最も不敬虔な教えが付いてきます。神が分けられ、物質に関わり、朽ちるものだと考えることです。すべての体は、分けられ、物質に関わり、朽ちるものだからです。さもなければ、むなしい思い込みにとらわれず、はっきり捉え

ていると言う人は、わたしたちに言ってみるがよいのです。体が、物質の性質とは別の性質であることが、どうしてありうるのか、と。また、キリストが体をとっておいでになる前の書物にも、神が体のある場所におられると言っているらしい箇所が多くあります。そうであるのですから、その中からもいくつかを挙げるのは、不適当ではないとわたしには思われます。知識の乏しさのゆえに、自分たちの考えのうえでは、万物の上におられる神を、小さく狭い場所に閉じ込めている人々がいます。その人々から、あらゆる迷いを取り除くためです。まず、創世記にはこうあります。『アダム』とエバは、『夕方、楽園の中を歩まれる主なる神の音を聞いた。そこで、アダムとその妻とは主なる神の顔を避けて、楽園の木の間に身を隠した』（創世記三・八）。この言葉の宝の中に入ろうとせず、そもそもその『戸』をたたくことさえしない人々がいます（ルカ一三・二五）。その人々に、わたしは問いましょう。主なる神は『天と地とに』満ちておられます（エレミヤ二三・二四）。また、その人々の考えでは、体のある者のように、『天』を御座とし、『地』を『足』台としておられます（マタイ五・三四～三五）。そのような神が、天と地の全体に比べれば、これほど狭い場所に包まれる、と示せるでしょうか。そうだとすれば、その人々が体のあるものと考えている楽園は、神に満たされないことになります。かえって、楽園は神よりもはるかに大きく、お歩きになる神をも収めることになるのです。そして、その足の運びから『音』が聞こえるのです。さらに、その人々の考えに従えば、もっと不合理なことがあります。アダムとエバが、背きのゆえに神の前で恥じて、『神の顔を避けて、楽園の木の間に』身を隠したということです。実際、聖書は、二人がそのように身を隠そうとした、とは言っていません。そうではなく、ほんとうに『身を隠した』と言っているのです。また、その人々の考えでは、神はどうしてアダムに『あなたはどこにいるのか』とお尋ねになるのでしょうか（創世記三・九）。[23:4] これらのことについては、わたしは創世記の言葉を調べたときに、さらに詳しく論じました。それでも、これほど大きな問題をまったく黙って過ぎないように、今も、足りるだけ思い起こしておきます。申命記で神が語っておられる、『わたしは彼らのうちに住み、彼らのうちに歩むであろう』（第二コリント六・一六）という言葉です。楽園での神の歩みも、聖徒たちのうちでの神の歩みと同じようなものだからです。そのとき、罪を犯す者はみな、神から身を隠し、神の見守りを避け、はばかりのなさから離れるのです。実際、同じように、『カインは神の顔を離れて出て行き、エデンに向かい合うノドの地に住んだ』のです（創世記四・一六）。ですから、神は、聖徒たちのうちに住んでおられるように、天にも住んでおられます。その天とは、『天に属する方のかたち』を帯びたすべての聖徒でしょう（第一コリント一五・四九）。または、キリストでしょう。救われる者はみな、キリストのうちで『光』となり、天の星となっているのです（ピリピ二・一五）。あるいはまた、神は、天にいる聖徒たちのゆえに、そこに住んでおられるのでしょう。こう言われているとおりです。『天に住んでおられる方よ、わたしはあなたにむかって目をあげます』（詩篇一二三・一）。また、伝道の書には、『神の前で言葉を出そうと急いではならない。神は上の天にいまし、あなたは下の地におるからである』とあります（伝道五・二）。この言葉は、隔たりを示そうとしています。『卑しい』からだのうちにいる者たちと（ピリピ三・二一）、神とのあいだの隔たりです。その神は、御使いたちと聖なる力たちのもとに、あるいはキリストご自身のもとにおられます。その御使いたちと力たちは、助けとロゴスによって高められているのです。実際、こう考えても不合理ではありません。キリストご自身は、本来の意味で父の御座であり、より比喩的に天と呼ばれています。そして、キリストの教会は地と名づけられ、父の『足台』なのです。[23:5] こうして、わたしは、神をある場所におられる方として示すと思われている旧約の言葉も、いくつか加えました。神の書は、神がある場所におられると教えているように見えることがあります。そのときにも、読む人がそれをより高く、より霊的に聞き取るようにしたいのです。そのために、わたしに与えられている力に応じて、あらゆる面から説得しようとしました。これらのことは、『天にいますわれらの父よ』という句と合わせて調べるのがふさわしいことでした。この句は、いわば、神の実体を、すべての生まれたものから分けているのです。神の実体は、それらのものと交わりません。それでも、それらのもののうちに、神のある種の栄光と力、そして、こう言ってよければ、神性の流れ出たものが生じるからです。

24章　御名が聖とされますように

24:1 『御名が聖とされますように』（マタイ六・九、ルカ一一・二）。祈る人は、あるときは、祈り求めているものがまだ起こっていないことを示します。また、あるときは、それをすでに得ていながら、それがとどまらないことを示して、守られるよう願います。言葉のうえで見るかぎり、ここでは明らかに、父の名がまだ聖とされていないものとされています。少なくともマタイとルカによれば、わたしたちは『御名が聖とされますように』と言うよう命じられているのです。こう言う人もいるでしょう。人間が、神の『名』を、まだ聖とされていないものとして、それが聖とされるよう願うとは、どういうことか、と。父の『名』とは何か、それが聖とされるとはどういうことかを、よく考えてみましょう。24:2 さて、『名』とは、名づけられるものの固有の性質を表す、要点をまとめた呼び名です。たとえば、使徒パウロには、ある固有の性質があります。一つは魂の性質で、それによって、その魂はこれこれのものです。一つは知性の性質で、それによって、その知性はこれこれのことを観想します。一つは体の性質で、それによって、その体はこれこれのものです。そこで、これらの性質の固有のところ、ほかの者と重なり合わないところが、『パウロ』という名によって示されるのです（パウロとまったく同じ人は、存在するもののうちに、ほかにいないからです）。しかし、人間の場合には、固有の性質がいわば変わるので、聖書によれば、名もまた正しく変えられます。実際、『アブラム』の性質が変わったとき、その人は『アブラハム』と呼ばれました（創世記一七・五）。シモンの性質が変わったとき、『ペテロ』と名づけられました（マルコ三・一六、ヨハネ一・四二）。また、イエスを迫害していた『サウロ』の性質が変わったとき、『パウロ』と呼ばれました（使徒九・四、一三・九）。しかし、神は、ご自身、変わることも移ろうこともなく、いつも同じであられる方です。その神にも、いわば名と言えるものがありますが、それはいつも一つです。それは、出エジプト記で言われている『有る者』です（出エジプト三・一四）。あるいは、何かそのように言い表されうる名です。さて、神について、わたしたちは皆、何かしらのことを思い描いて、何かを考えています。しかし、神が何であるかを、皆が考えているわけではありません（すべてのことにおいて神の聖さを捉える人は、まれであり、あえて言えば、まれな人々の中でもさらにまれだからです）。そうであるので、わたしたちは理にかなって、自分の内にある神についての考えが聖なるものとなるよう教えられています。それは、わたしたちが、神の創造と摂理と裁きと選びのうちに、神の聖さを見るためです。また、お見捨てになること、受け入れてくださること、お退けになることのうちにも、その聖さを見るためです。さらに、一人一人にそのふさわしさに従って報いをお与えになり、また罰しておられることのうちにも、それを見るためです。24:3 実際、こう言ってよければ、これらのことや、これに似たことのうちに、神の固有の性質が特徴づけられるのです。わたしは、聖書によれば、その性質が『神の名』と言われているのだと考えます。出エジプト記には、こうあります。『あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない』（出エジプト二〇・七）。申命記には、こうあります。『わたしの語り出すことは、雨のように待ち望まれよ。わたしの言葉は、露のように降れ。若草の上の大雨のように、青草の上の雪のように。わたしは主の名を呼び求めたからである』（申命記三二・二〜三）。詩篇には、こうあります。『彼らは、よろず代に、あなたの名を思い起こすであろう』（詩篇四五・一七）。実際、神についての考えを、当てはめるべきでないものに当てはめる人は、『神、主の名』を『みだりに』唱えているのです。また、聞く人々の魂が実を結ぶのを助ける雨を、語り出すことのできる人がいます。露に似た励ましの言葉を差し出す人です。また、言葉が人を造り上げる勢いによって、聞き手に、きわめて益になる大雨や、きわめて効き目のある雪を降らせる人です。そのような人は、そのゆえに、これらのことができるのです。その人は、これらのことについて、自分が、全うしてくださる神を必要としていることに思い至ります。そして、先に述べた

ものを本来の意味でお授けになる方を、自分のもとに呼び求めるのです。また、神についてのことをはっきりと語る人は、だれでも、学ぶよりも、むしろ思い起こしているのです。だれかから聞いているように思えても、神を敬うことの奥義を自分で見いだしていると考えていても、そうなのです。24:4 祈る人は、ここで言われたことを理解して、神の『名』が聖とされるよう求めなければなりません。それと同じように、詩篇には『われらは共にその名を高めよう』（詩篇三四・三）と言われています。そこでは、預言者が命じているのです。あらゆる一致のうちに、同じ知性、同じ思いで、神の固有性についてのまことの高い知識に至るように、と。神の『名』を『共に』高めるとは、こういうことだからです。ある人が、神に引きあげられ、敵に打ち勝ったので、神性の流れ出たものにあずかります。敵は、その人が倒れるのを喜ぶことができませんでした。そのとき、その人は、自分があずかった神の力そのものを高めるのです。このことは、第二十九篇で、こう示されています。『主よ、わたしはあなたを高めます。あなたはわたしを引きあげ、敵がわたしの事によって喜ぶのを、ゆるされなかったからです』（詩篇三〇・一）。また、自分のうちに神のための家を奉献した人は、神を高めます。その詩篇の表題も、『ダビデの家の奉献の歌の賛歌』（詩篇三〇篇）となっているのですから。24:5 さらに、『御名が聖とされますように』と、それに続いて命令の形で言われている句について、言っておくべきことがあります。聖書を訳した人々も、祈願の形の代わりに、たびたび命令の形を用いた、ということです。詩篇には、こうあります。『偽りのくちびる、正しい者に逆らって不法を語るくちびるは、口のきけないものであれ』（詩篇三一・一八）。『ありますように』の代わりに、こう言っているのです。また、第百八篇には、ユダについて、こうあります。『債主は、彼の持ち物をすべて探り尽くせ』、『彼を助ける者はあるな』（詩篇一〇九・一一～一二）。この詩篇は、全体が、ユダにこれこれのことが起こるようにという、ユダについての求めだからです。ところが、タティアノスは、次のことを悟りませんでした。『あれ』（ゲネーテートー）という語は、いつも祈願の形を意味するのではなく、ときには命令の形をも意味するのです。そのため、『光あれ』（創世記一・三）とおっしゃった神について、きわめて不敬虔な考えを抱きました。神が、光があるようにとお命じになったよりも、むしろお祈りになったのだ、と考えたのです。『なぜなら』と、この人は、神を否む考えで言います。『神は闇の中にいた』と。この人に対しては、次のように問うべきです。次の言葉も、どう受け取るのでしょうか。『地は青草をはえさせよ』（創世記一・一一）。『天の下の水は集まれ』（創世記一・九）。『水は這う生き物をいだせ』（創世記一・二〇）。『地は生き物をいだせ』（創世記一・二四）。神は、しっかりした所にお立ちになるために、『天の下の水が一つ所に』集まるよう、お祈りになるのでしょうか。あるいは、地から生えるものにあずかるために、『地は、はえさせよ』とお祈りになるのでしょうか。神が、水に住むもの、空を飛ぶもの、あるいは陸に住むものについても、お祈りになるとしましょう。神には、光を必要となさるのに似た、それらのものへのどんな必要がおありになるのでしょうか。もし、この人から見ても、命令の言い方で言われたこれらのことについて祈るのが、筋の通らないことだとします。それなら、どうして、『光あれ』についても同じことを言うべきでないのでしょうか。祈願の形ではなく、命令の形で言われたものだ、と。ここでの祈りは、命令の形の言葉で言われています。それで、わたしには、この人の誤った解釈を思い起こしておくことが、どうしても必要だと思われました。だまされて、この人の不敬虔な教えを受け入れた人々のゆえにです。わたしも、かつて、そういう人々に出会ったことがあります。

25章　御国がきますように

25:1 『御国がきますように』（マタイ六・一〇、ルカ一一・二）。わたしたちの主であり救い主である方の言葉によれば、『神の国は』『見られるかたちで』『来るものではない』のです。『また『見よ、ここにある』『あそこにある』などとも言えない』のです。そうではなく、『神の国は』わたしたちの『うちに』『ある』のです（ルカ一七・二〇〜二一）。『言葉は、はなはだ』『近くあって』、わたしたちの『口にあり』、わたしたちの『心にある』からです（申命記三〇・一四、ローマ一〇・八）。そうであれば、明らかに、神の国がくるよう祈る人は、自分のうちにある神の国について、理にかなって祈っています。それが芽生え、実を結び、全うされるよう祈っているのです。すべての聖徒は、神に治められ、神の霊的な律法に従っています。そして、いわば、よい法のもとにある町に住むように、自分自身に住んでいるのです。その人のもとには父がおられ、全うされた魂のうちで、キリストが父と共に治めておられます。わたしが少し前に挙げた、次の言葉のとおりです。『わたしたちはその人のところに行って、その人と一緒に住むであろう』（ヨハネ一四・二三）。わたしは、こう考えます。神の国とは、魂の主導部分の幸いな状態であり、知恵ある思いが整っていることです。キリストの国とは、聞く人々にとって救いとなる、出てゆく言葉（ロゴイ）であり、義とそのほかの徳の、なし遂げられる行いです。神の子は、ロゴスであり、義だからです。一方、罪人はみな、『この世の』支配者の圧制のもとにあります（第一コリント二・六）。罪人はみな、今の悪の世の身内となっているのですから。ある方が、『わたしたちを今の悪の世から救い出そうとして、ご自身をわたしたち罪人のために』おささげになりました。罪人は、この方に、自分をゆだねないのです。この方は、『わたしたちの父なる神の御旨に従って』、『救い出』そうとなさったのです。ガラテヤ人への手紙で言われているとおりです（ガラテヤ一・四）。自ら進んで罪を選ぶことによってこの世の支配者の圧制のもとにある人は、罪にも治められています。そのため、わたしたちは、パウロから、わたしたちを治めようとする罪に、もはや従わないよう命じられています。まさに、次の言葉によって命じられているのです。『だから、罪が、わたしたちの死ぬべきからだのうちで治めることのないようにし、罪の情欲に従うことのないようにしなさい』（ローマ六・一二）。25:2 しかし、『御名が聖とされますように』と『御国がきますように』の二つについて（マタイ六・九〜一〇、ルカ一一・二）、こう言う人もいるでしょう。祈る人は、聞き入れられることを求めて祈り、いつかは聞き入れられる。そうであれば、明らかに、いつか、ある人には、先に述べた意味で、神の『名』が聖とされる。その人には、神の『国』も臨むことになる。しかし、そうなれば、その人は、すでにあるものを、まだないもののように、『御名が聖とされますように。御国がきますように』と言って祈る。それが、どうして、なお務めにかなうことになるのか。もしそうなら、いつかは、『御名が聖とされますように。御国がきますように』と言わないことが務めになるだろう、と。これに対しては、こう言うべきです。『知識の』言葉と『知恵の』言葉を得ようと祈る人は（第一コリント一二・八）、いつも務めにかなって、これらのことを祈るでしょう。その人は、聞き入れられて、『知恵』と『知識』の観想を、いつも、より多く受けるでしょう。ただし、今のところ受け入れることのできるかぎりのことを、『一部分』知るだけです。しかし、全きものは、『部分的なもの』をすたらせて、『その時』現れるでしょう。それは、知性が、感覚なしに、知性で捉えられるものに、『顔と顔とを合わせて』向かうときです（第一コリント一三・九〜一二）。それと同じように、わたしたち一人一人に神の『名』が聖とされることと、神の国が臨むことにも、『全きもの』があります。しかし、それは、『知識』と『知恵』についての『全きもの』も『来』なければ、ありえないのです。おそらくは、そのほかの徳についての全きものも、来なければなりません。わたしたちが全き状態へと進むのは、『前のもの』に向かってからだを伸ばしつつ、後のものを忘れるときです（ピリピ三・一三）。ですから、絶えず前

進するわたしたちにとって、わたしたちのうちにある神の国に、その極みが臨むでしょう。それは、使徒のもとで言われていることが満たされるときです。すなわち、キリストは、すべての敵がご自分に従わされたとき、『国を父なる神にお渡しになります。『神がすべての者にあって、すべてとなられる』ためです（第一コリント一五・二四、二八）。そのため、『絶えず』祈りながら（第一テサロニケ五・一七）、ロゴスによって神のようにされている心の状態で、天にいますわれらの父に、こう言いましょう。『御名が聖とされますように。御国がきますように』。[253] さらに、神の国について、次のことも心得ておくべきです。『義と不義との係わり』はなく、『光とやみとの交わり』もなく、『キリストとベリアルとの調和』もありません（第二コリント六・一四～一五）。それと同じように、罪の国は、神の国と共にあることができないのです。ですから、もし、わたしたちが神に治められたいと望むなら、こうしましょう。決して『罪が、わたしたちの死ぬべきからだのうちで治める』ことのないようにするのです。また、罪の命令に従わないようにしましょう。罪は、わたしたちの魂を、『肉の働き』と（ガラテヤ五・一九）、神と無縁のことへと誘い出すのです。そうではなく、『地上の肢体』を殺しましょう（コロサイ三・五）。そして、『御霊の』実を結びましょう（ガラテヤ五・二二）。そうして、主が、霊の『楽園の中』のように、わたしたちのうちをお歩きになるようにするのです（創世記三・八）。そのとき主は、ご自分のキリストと共に、ただひとり、わたしたちを治めてくださいます。キリストは、わたしたちのうちで、わたしたちが受けたいと祈っている霊の『力』の『右に』座しておられます（マタイ二六・六四）。わたしたちのうちにいる、その敵がみな、その『足台』となる『まで』、キリストは座しておられます（詩篇一一〇・一）。また、すべての支配と権威と力がわたしたちから滅ぼされるまで、そうしておられるのです。実際、これらのことは、わたしたち一人一人において起こりうるのです。最後の敵である死が滅ぼされることも、起こりうるのです（第一コリント一五・二四～二六）。それは、わたしたちのうちでも、キリストが、こうおっしゃるためです。『死よ、おまえのとげは、どこにあるのか。陰府よ、おまえの勝利は、どこにあるのか』（第一コリント一五・五五）。ですから、今すでに、わたしたちの『朽ちるもの』は、『朽ちないもの』を着なければなりません。きよめとあらゆる清らかさのうちにある聖さも、着なければなりません。また、死が滅ぼされて、『死ぬもの』は、父の『死なないもの』をまとわなければなりません（第一コリント一五・五三～五四）。こうして、神に治められているわたしたちは、今すでに、新しく生まれることと復活との良いもののうちにいることになるのです。

26章　みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように

26:1 『みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように』（マタイ六・一〇）。ルカは、『御国がきますように』の後、この言葉を言わずにおいて、次の句を置きました。『わたしたちの、存在を支えるパンを、日々お与えください』（ルカ一一・二〜三）。そのため、わたしが冒頭に掲げた言葉を、マタイのもとにだけあるものとして、これまでの句に続けて調べましょう。祈るわたしたちは、まだ『地に』います。そして、天の身内であるすべての者のもとで、神の『みこころ』が『天に』行われてきたことを悟っています。ですから、祈りましょう。『地に』いるわたしたちにも、あの者たちと同じく、すべてにおいて神の『みこころ』が行われるように、と。そうなるのは、わたしたちが、神の『みこころ』に反することを何一つ行わないときです。神の『みこころ』が、『天におけるように』、『地に』いるわたしたちにも成し遂げられたとします。そのとき、わたしたちは、天にいる者たちに似た者となります。あの者たちと同じように、『天に属する方のかたち』を帯びたのですから（第一コリント一五・四九）。そして、天の『国』を受け継ぐでしょう（マタイ二五・三四）。わたしたちの後に『地に』いる人々は、『天に』いるようになったわたしたちにも似た者となるよう、祈るのです。26:2 もっとも、マタイのもとでだけは、『天におけるように、地にも』の句を、三つの願いに共通に掛けて受け取ることもできます。そうすれば、祈りのうちに唱えるようわたしたちに命じられている言葉は、次のようになります。『御名が聖とされますように』、『天におけるように、地にも』。『御国がきますように』、『天におけるように、地にも』。『みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように』（マタイ六・九〜一〇）。実際、神の『名』は、『天に』いる者たちのもとで聖とされました。神の『国』は、その者たちに臨みました。神の『みこころ』は、その者たちのうちで行われてきました。これらはみな、『地に』いるわたしたちには欠けています。しかし、わたしたちに備わることができます。それは、これらすべてについて神に聞き入れていただくのにふさわしい者へと、自分を整えることによってです。26:3 しかし、『みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように』の句のゆえに、こう問う人もいるでしょう。どうして、神の『みこころ』が『天に』行われているのか。そこには『悪の霊』がいて（エペソ六・一二）、そのために、神の『つるぎ』は『天において』も酔うのに（イザヤ三四・五）。また、神の『みこころ』が『天に』行われるとおりに、『地に』も行われるよう、わたしたちが祈るとしよう。そうなら、わたしたちは、気づかずに、反対のことも『地に』とどまるよう祈っているおそれがある。それらも、天から来るのだから。『地に』多くの悪いことが起こっているのは、人を打ち負かす『悪の霊』のゆえであり、その霊は『天上に』いるのだ、と。さて、天を比喩として解き、天はキリストであり、地は教会だと言う人がいます。実際、キリストほどふさわしい父の『御座』が、ほかにあるでしょうか（ヘブル一・八）。教会ほどの神の『足台』が、ほかにあるでしょうか（イザヤ六六・一）。この人は、問われていることを、たやすく解くでしょう。この人は、こう言います。教会に属する一人一人は、父の『みこころ』を受け入れるよう祈るべきだ。キリストが受け入れておられるのと同じしかたで受け入れるよう、祈るべきだ、と。キリストは、父ご自身の『みこころ』を行うためにおいでになり、それを余すところなく全うなさった方です。実際、このかたについた者は、このかたと共に『一つの霊』となることができます。そのために、『みこころ』を受け入れるのです。それは、『天に』果たされている『ように』、『地にも』果たされるためです。パウロによれば、『主につく者は』、『一つの霊になる』からです（第一コリント六・一七）。わたしは、こう思います。この解き明かしは、それを注意深く考える人には、軽んじてよいものではないでしょう。26:4 しかし、この解き明かしに反対する人は、この福音書の終わりにある言葉を持ち出すでしょう。主が、復活の後に、十一人の弟子たちにおっしゃった言葉です。『わたしは、天におけるように、地にも、いっさいの権威を授けられた』（マ

タイ二八・一八）。主は、こうおっしゃっているからです。『天に』ある者たちへの権威を持っておられて、『地に』ある者たちへの権威を加えてお受けになった、と。『天に』ある者たちは、以前からロゴスによって照らされていました。一方、『世の終り』には（マタイ二八・二〇）、『地に』ある者たちも、神の子に与えられた権威のゆえに、ならうようになります。ならうのは、救い主が権威をお受けになった者たち、すなわち『天に』いて正しく行っている者たちのわざです。ですから、救い主は、ご自分の弟子となる者たちを、祈りを通して、いわば父に対する協力者にしようと望んでおられます。それは、『地に』あるものを、権威のもとにある者たちの幸いな終わりへとお導きになるためです。『地に』あるものは、救い主が『天におけるように、地にも』お受けになった権威のゆえに正されます。そうして、『天に』あって真理とロゴスとに従わされている者たちと同じようになるのです。一方、天は救い主であり、地は教会だ、と考えたい人がいます。この人は、『すべての造られたもの』の長子を天だと言います（コロサイ一・一五）。父は、この長子の上に、御座の上でのように憩っておられるのです。この人は、こう見いだすでしょう。救い主がお着になった『人』が、復活の後に、こうおっしゃるのです。『わたしは、天におけるように、地にも、いっさいの権威を授けられた』。その『人』は、『おのれを』低くなさり、『死に至るまで』従順におなりになったので（ピリピ二・八）、あの力と親しく結ばれたのです。『天に』ある者たちは、いわば、ひとり子のうちにある者たちです。救い主における人は、その者たちへの権威をお受けになりました。それは、ひとり子の神性と溶け合い、ひとり子と一つになって、ひとり子と交わりをお持ちになるためでした。26:5 しかし、二つ目の説明は、まだ難問を解いていません。神の『みこころ』が、どうして『天に』あるのか、という難問です。『天上に』いる『悪の』霊が、『地に』いる者たちを相手に戦っているのに、というのです。その難問は、次のように考えれば、こう解くことができるでしょう。まだ『地に』いても、『国籍』を『天に』持っている人がいます（ピリピ三・二〇）。その人は、宝を『天に』たくわえ（マタイ六・二〇）、心を『天に』持ち、『天に属する方のかたち』を帯びています。その人は、もはや『地から』出た者ではなく（ヨハネ三・三一）、『下の』『世』の者でもありません（ヨハネ八・二三）。そうではなく、天から出た者であり、『この』世よりもすぐれた天の『世』の者なのです。それは、場所のゆえではなく、心の向きのゆえです。それと同じように、なお『天上に』とどまっている『悪の霊』は、『国籍』を『地に』持っています。そして、相手に戦う手立てによって、人にたくらみを仕掛け、『地に』宝をたくわえています。また、『土に属する者のかたち』を帯びています（第一コリント一五・四九）。その土に属する者とは、『主がお造りになったものの初めであって、御使いたちに笑いものにされるように造られた』者です（ヨブ四〇・一九）。その霊は、天に属するものではありません。その邪悪な心の状態のゆえに、天に住んでもいないのです。ですから、『みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように』と言われるときには、こう考えるべきです。あの霊たちは、『天に』いるのでさえありません。あの霊たちは、その志において、電光のように『天』から落ちた者と共に、落ちてしまっているのです（ルカ一〇・一八）。26:6 また、わたしたちの救い主は、こう祈るべきだとおっしゃいました。父の『みこころ』が、『天におけるように』、そのように『地にも』行われますように、と。おそらく、主が命じておられるのは、必ずしも、『地』という場所にいる者たちについての祈りではありません。その者たちが、天の場所にいる者たちに似るように、という祈りではないのです。そうではなく、主は、次のことをお望みになって、祈りをお命じになっているのです。『地に』あるすべてのもの、すなわち、より劣ったもの、地に属するものの身内となったものが、よりすぐれたものに似ることです。よりすぐれたものとは、『天に国籍』を持ち、みな天となったものです。実際、罪を犯す者は、どこにいようとも『地』です（創世記三・一九）。悔い改めないなら、どこかで、自分と同類の地へと行くことになるでしょう。一方、神の『みこころ』を行い、救いをもたらす霊的な律法に背かない者は、天です。ですから、わたしたちが、罪のゆえにまだ『地』であるなら、こう祈りましょう。わたしたちより前に天となった人々、あるいは天である者たちに、神の『みこころ』が達しました。それと同じように、わたしたちにも、それが正すしかたで及びますように、と。また、もし、わたしたちが、もはや地ではなく、すでに神に天とみなされているなら、こう願い求めましょう。『天』と同じように、『地に』も、つまりより劣ったものにも、神の『みこころ』

が満ちますように、と。それは、こう言ってよければ、地を天とするためです。地がもはや決して地ではなく、すべてが天となるためです。実際、わたしが解き明かしてきた意味で、神の『みこころ』が『天における』ように『地にも』行われるとします。そうなれば、地は地にとどまらないでしょう。それは、ちょうど次のようなことです（ほかの例で、もっとはっきり言うなら）。神の『みこころ』が、節制のある人々に行われてきたように、放縦な人々にも行われるとします。そうなれば、放縦な人々は節制のある者となるでしょう。あるいは、神の『みこころ』が、正しい人々に行われてきたように、正しくない人々にも行われるとします。そうなれば、正しくない人々は正しい者となるでしょう。そのため、神の『みこころ』が『天に』行われてきたように、『地にも』行われるなら、わたしたちはみな天となるでしょう。役に立たない肉と、それと同類の血とは、『神の国』を継ぐことができません（第一コリント一五・五〇）。しかし、もし肉と地とちりと血から、天の実体へと変わるなら、継ぐと言われもするでしょう。

27章 1〜7節　わたしたちの、存在を支えるパンを、きょうお与えください

27:1 『わたしたちの、存在を支えるパンを、きょうお与えください』（マタイ六・一一）。あるいは、ルカのように言えば、『わたしたちの、存在を支えるパンを、日々お与えください』（ルカ一一・三）。ある人々は、わたしたちが体に関わるパンについて祈るよう言われているのだ、と考えています。そう考えているのですから、この人々の誤った考えを取り除くのがふさわしいでしょう。以下の言葉によって取り除き、存在を支えるパンについての真理を示すのです。そこで、この人々に向かって、こう言うべきです。主は、天のもの、大きなものを求めるべきだとおっしゃいました。わたしたちの肉に行き渡るパンは、天のものではありません。それを願うことも、大きな求めではありません。それなのに、どうして主は、地の小さなことについて、父に願い出をささげるようお命じになるのでしょうか。この人々の言うとおりなら、主は、ご自分がお教えになったことをお忘れになったかのようです、と。27:2 しかし、わたしたちは、師である主に従います。パンについて教えてくださる方に従うのです。そして、そのことを、より多くの言葉で示しましょう。主は、ヨハネによる福音書で、ご自分を捜しにカペナウムへ来た人々に、こうおっしゃいます。『よくよくあなたがたに言っておく。あなたがたがわたしを尋ねてきているのは、しるしを見たためではなく、パンを食べて満腹したからである』（ヨハネ六・二六）。実際、イエスが祝福なさった『パンを』食べ、それで満たされた人は、神の子をいっそう正確に捉えようと尋ね求めます。そして、このかたのもとへと急ぐのです。ですから、主は、ふさわしくも、こうお命じになります。『朽ちる食物のためではなく、永遠の命に至る朽ちない食物のために働くがよい。これは人の子があなたがたに与えるものである』（ヨハネ六・二七）。これを聞いた人々は、こう尋ねて言いました。『神のわざを行うために、わたしたちは何をしたらよいでしょうか』。『イエスは彼らに答えて言われた、『神がつかわされた者を信じることが、神のわざである』』（ヨハネ六・二八〜二九）。また、詩篇に書かれているとおり、神は『そのロゴスを』『つかわして』、『彼らをいやし』てくださいました（詩篇一〇七・二〇）。『彼ら』とは、明らかに、病んでいた者たちのことです。このロゴスを信じる者たちは、『神のわざ』を行います。それは、『永遠の命に至る朽ちない食物』なのです。また、主は、こうおっしゃいます。「わたしの『父は』、『天からのまことのパンをあなたがたに与える。神のパンは、天から下ってきて、この世に命を与えるものである』」（ヨハネ六・三二〜三三）。まことの『パン』とは、『まことの』『人』を養うものです。『神のかたちに』造られた人を養うのです（創世記一・二七）。このパンに養われた人は、『造り主』に『似た者』ともなります（創世記一・二六、コロサイ三・一〇）。ロゴスよりも魂を養うものが、何かあるでしょうか。神の知恵よりも、それを受け入れる人の知性にとって尊いものが、何かあるでしょうか。真理よりも、理性ある本性にふさわしいものが、何かあるでしょうか。27:3 これに対して、こう反論する人がいるとします。主が、存在を支えるパンを、ご自分とは別のパンであるかのように求めよとお教えになるはずはない、と。その人は、次のことを聞くべきです。ヨハネによる福音書でも、主は、あるところでは、ご自分とは別の何かについてのように語っておられます。また、あるところでは、ご自身がパンであるとして語っておられるのです。別のものについてのように語っておられるのは、次の言葉です。『モーセは天からのパンをあなたがたに与えた』が、それは『まことの』パンでは『ない』。『天からのまことのパンをあなたがたに与えるのは、わたしの父なのである』（ヨハネ六・三二）。ご自身についてのように語っておられるのは、次のところです。主は、『そのパンをいつもわたしたちにください』と言った人々に（ヨハネ六・三四）、こうおっしゃいます。『わたしが命のパンである。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決してかわくことがない』（ヨハネ六・三五）。また、少し後では、こうおっしゃいます。『わたしは天から下ってきた生きたパンである。それを食べる者は、いつまでも生きるであろう。わたしが与え

るパンは、世の命のために与えるわたしの肉である』（ヨハネ六・五一）。27:4 さて、聖書によれば、すべての食物が『パン』と呼ばれます。それは、モーセが『パンも』食べず、『四十日、水も』飲まなかった、と書き記されていることから明らかです（出エジプト三四・二八）。また、養う言葉は、さまざまで、多様です。すべての人が、神の教えの堅さと力強さによって養われることができるわけではないのです。このようなわけですから、主は、より全き人々にふさわしい、競技者の食物を示そうとお望みになって、こうおっしゃいます。『わたしが与えるパンは、世の命のために与えるわたしの肉である』。また、少し後では、こうおっしゃいます。『人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があり、わたしはその人を終りの日によみがえらせるであろう。わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物である。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにおり、わたしもまたその人におる。生ける父がわたしをつかわされ、また、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者もわたしによって生きるであろう』（ヨハネ六・五三～五七）。これこそ『まことの』『食物』、すなわちキリストの『肉』です。この肉は、『ロゴス』でありながら、『肉』となったのです。こう言われているとおりです。『ロゴスは肉となり』（ヨハネ一・一四）。わたしたちがこのかたを食べ、飲むとき、このかたは『わたしたちのうちに宿った』のです。そして、このかたがわたしたちに行き渡ってくださるとき、『わたしたちはその栄光を見た』という言葉が満たされます。『天から下ってきたパンは、先祖たちが食べたが死んでしまったようなものではない。このパンを食べる者は、いつまでも生きるであろう』（ヨハネ六・五八）。27:5 一方、パウロは、『幼な子』であり、『普通の人間のように』歩いているコリントの人々に語りかけて、こう言います。『あなたがたに乳を飲ませて、堅い食物は与えなかった。食べる力が、まだあなたがたになかったからである。今になってもその力がない。あなたがたはまだ、肉の人だからである』（第一コリント三・一～三）。また、ヘブル人への手紙では、こう言います。『あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要とする者になっている。すべて乳を飲んでいる者は、幼な子なのだから、義の言葉を味わうことができない。しかし、堅い食物は、善悪を見わける感覚を実際に働かせて訓練された、全き人のとるべきものである』（ヘブル五・一二～一四）。また、『ある人は、何を食べてもさしつかえないと信じているが、弱い人は野菜だけを食べる』という言葉があります（ローマ一四・二）。わたしは、この言葉も、パウロが第一に体に関わる食物について言っているのではない、と考えます。そうではなく、魂を養う神の言葉について言っているのです。最も信仰があり、最も全き人は、すべてにあずかることができます。パウロは、この人を『ある人は、何を食べてもさしつかえないと信じている』という言葉で示しています。一方、より弱く、より不完全な人は、より単純な、あまり力強さを生まない教えで満足します。パウロは、この人を指そうとして、『弱い人は野菜だけを食べる』と言うのです。27:6 また、ソロモンが箴言で言っている言葉も、次のことを教えているのだと、わたしは考えます。単純さのゆえに、教えのうち、より力強いもの、より大きなものを受け入れられない人がいます（とはいえ、誤ったことを考えているのではありません）。一方、より機敏で鋭く、事柄に大きく取り組みながら、万物の平和と調和の道理を明らかにしない人がいます。前の人のほうが、後の人よりもすぐれている、ということです。その言葉は、ソロモンのもとで、次のようになっています。『友情と好意のうちにある野菜のもてなしは、敵意のうちにある、飼い葉おけからの子牛にまさる』（箴言一五・一七）。現に、わたしたちは、しばしば、素朴で簡素なもてなしを、やましくない良心とともに喜んで受けてきました。わたしたちにそれ以上のものを出すことのできない人々のもとで、もてなされたのです。それは、『神の知識に逆らって』高ぶる言葉の高みよりも、むしろ喜ばしいものでした（第二コリント一〇・五）。その高みは、大いにもっともらしく、ある教えを告げます。『律法と預言者』をお与えになった方、すなわちわたしたちの主イエスの父とは無縁の教えです（ルカ一六・一六）。ですから、わたしたちは、生きたパンを父に求めましょう。それは、食物の乏しさのために魂が病むことのないためです。また、『主の言葉のききん』のために神に対して死ぬことのないためです（アモス八・一一）。このパンは、存在を支えるパンと同じものです。わたしたちの師である救い主に従い、信じて、よりふさわしく生きながら、求めるのです。27:7 さて、『存在を支える』（エピウーシオス）とは何かも、ここで考えるべきです。

まず、次のことを知っておくべきです。『エピウーシオス』という語は、ギリシア人のうち、知者たちのだれも口にしたことがありません。一般の人々のふだんの言葉で使い慣らされてもいません。そうではなく、この語は、福音書記者たちが作ったもののように思われます。現に、マタイとルカは、この語を世に出し、それについて一致しました。語は、二人のもとで少しも違っていないのです。同じことを、ほかの語についても、ヘブル語の書を訳した人々がしています。実際、ギリシア人のだれが、かつて、『エノーティズー』という呼び名を、『耳に受け入れよ』の代わりに用いたでしょうか。だれが、『アクーティステーティ』を、『自分に聞かせよ』の代わりに用いたでしょうか。『エピウーシオス』という呼び名とよく似たものが、モーセのもとに書かれています。神がおっしゃった言葉です。『あなたがたはわたしに対して』、『存在に添う民』（ペリウーシオス）『となるであろう』（出エジプト一九・六、五）。わたしには、どちらの語も、存在（ウーシア）から作られたように思われます。一方は、存在に寄与するパンを表し、他方は、存在のまわりにとどまり、それにあずかる民を指しているのです。

27章 8〜12節　存在とは何か、だれが何によって養われるか

27:8 ところで、無形のものの実在を第一のものと主張する人々がいます。この人々には、本来の意味での存在は、無形のものに当てはまるとみなされています。無形のものは、あることを確かに保ち、付け加わることも受け入れず、取り去られることも被りません。こうしたことは、体に固有のことだからです。体については、成長と衰えが起こります。体が流れ去るものであって、外から入ってきて支え、養うものを必要とするためです。この入ってくるものが、ある時に、流れ出るものよりも多ければ、増加が起こります。少なければ、減少が起こります。また、入ってくるものをまったく受け取らず、こう言ってよければ、混じりけのない減少にあるものも、おそらくあるでしょう。一方、無形のものの実在は後から付いてくるもので、体の実在が第一のものだと考える人々がいます。この人々にとって、存在の定義は次のとおりです。存在とは、存在するものの第一の物質、すなわち、存在するものがそこから生じるものです。または、体の物質、すなわち、体がそこから生じるものです。または、名づけられるものの物質、すなわち、名づけられるものがそこから生じるものです。または、性質のない、最初に実在するものです。または、存在するものに先立って実在するものです。または、あらゆる変化と移ろいを受け入れながら、それ自体の定義においては移ろわないものです。または、あらゆる移ろいと変化に耐えるものです。この人々によれば、存在は、それ自体の定義においては、性質も形も持たず、定まった大きさも持ちません。そして、用意された場所のように、あらゆる性質に向けて置かれています。また、この人々は、区分のうえで、働きと作用を総じて性質と呼びます。動きと状態は、この働きと作用のうちにあることになります。この人々は、存在は、それ自体の定義においては、これらのどれにもあずからない、と言うからです。しかし、存在は、受けるものとして、いつもそのどれかと離れずにある。それでも、働きかけるものがどのように働きかけ、変えても、そのあらゆる働きを受け入れるのだ、と言います。この人々によれば、存在と共にあって全体を貫いている張りが、あらゆる性質と、存在をめぐる営みとの原因であるはずだからです。また、この人々は、存在は全体にわたって変わりうるもの、全体にわたって分けうるものだと言います。そして、どの存在も、どの存在とも混じり合うことができる、ただし、一つにまとまったままで、と言うのです。27:9 わたしは、『存在を支える』『パン』（マタイ六・一一、ルカ一一・三）と、存在に添う民のゆえに、存在について調べてきました。そして、存在の意味するところを区別するために、以上のことを述べました。また、それより前のところで、わたしたちが求めるべきパンは、知性で捉えられるものでした。そうであるのですから、存在も、パンと同類のものだと考えなければなりません。体に関わるパンは、養われる者の体に行き渡って、その者の存在に入っていきます。そのように、『生きた』、『天から』下ってきた『パン』も、知性と魂に行き渡ってくださいます（ヨハネ六・五一）。そうして、そこからの食物に自分を差し出した者に、ご自分の力を分け与えてくださるのです。存在をパンと同類と考えるべきなのは、そのためです。こうして、このパンは、わたしたちが求める『存在を支える』『パン』となるのです。また、養われる者は、『食物』の性質に応じて、違った力を持つようになります。『堅い』食物で競技者にふさわしいものか、乳のような、野菜のような食物かによるのです（ヘブル五・一二〜一四）。それと同じように、神のロゴスも、幼な子には乳としてふさわしく与えられます。あるいは、弱い人には野菜として適して、あるいは、戦う人には肉として時にかなって与えられます。そうであれば、養われる者はそれぞれ、自分を差し出したロゴスに見合って、これこれのことができるようになります。そして、これこれの者になるのです。もっとも、食物と思われていながら、毒であるものもあります。病気を起こすものもあり、行き渡ることさえできないものもあります。これらすべてを、養うと思われている教えの違いにも、類比によって移して当てはめるべきです。ですから、存在を支えるパンとは、理性ある本性に最もよく合い、存在そ

のものと同類のパンです。このパンは、魂に、健康と、壮健さと、力とを、ともにもたらしてくださいます。また、ご自分を食べる者に、ご自分の不死を分け与えてくださいます（神のロゴスは不死だからです）。27:10 この存在を支えるパンは、聖書では、別の名で『命の木』と呼ばれているように、わたしには思われます（創世記二・九）。その木に『手を』伸ばし、そこから取る者は、『永久に生きる』のです（創世記三・二二）。また、この『木』は、ソロモンのもとで、第三の名で、神の『知恵』と呼ばれています。次の言葉です。『知恵は、これを捕えるすべての者には命の木であり、主に寄りかかるように寄りかかる者には、確かなものである』（箴言三・一八）。また、御使いたちも、神の知恵によって養われています。真理に従って知恵をもって観想することから力を得て、自分のわざを成し遂げるのです。そうであるのですから、詩篇では、御使いたちも養われると言われています。そこでは、神の人々、すなわちヘブルびとと呼ばれる人々が、御使いたちと交わり、いわば食卓を共にする者となっています。『人は御使いのパンを食べた』という言葉が、そのようなものです（詩篇七八・二五）。実際、わたしたちの知性が、次のように考えるほど貧しくなることがありませんように。御使いたちは、ある体に関わるパンに、いつもあずかって養われている。エジプトを出た人々の上に、天から下ったと記されているパンである。ヘブルびとは、まさにそのパンを、御使いたち、すなわち神に仕える霊たちと分け合ったのだ、と（ヘブル一・一四）。27:11 わたしは、『存在を支える』『パン』と、『命の木』と、神の知恵と、聖なる人々と御使いたちとに共通の食物とを調べています。その折に、創世記に書かれている三人の人についても考えてみるのは、時にかなわないことではないでしょう。三人はアブラハムのもとに宿り、パンを作るためにこねた、三ますの『細かい麦粉』にあずかりました（創世記一八・二〜六）。これは、まったく比喩として言われているのではないでしょうか。聖徒たちは、知性で捉えられ、理性にかなう食物を、人々にだけでなく、より神的な力にも、ときに分け与えうるのです。それは、その力の益のためか、あるいは、聖徒たちが自分のために得ることのできた、最も養いとなるものを示すためです。御使いたちは、このように示されることで喜び、養われます。そして、いっそう進んで、あらゆるしかたで力を貸そうとするようになります。先に養いとなる教えによって備えられ、御使いたちを喜ばせ、こう言ってよければ、養い育てた人がいます。御使いたちは、これから先、その人がより多く、より大きなことを捉えるのに、心を合わせて助けるようになるのです。人が御使いたちを養うとしても、驚くにはあたりません。キリストでさえ、『戸』のそばに立ってたたいておられる、と言い表しておられるのですから（黙示録三・二〇）。ご自分に戸をあけた人のもとにお入りになり、その人の物から、『彼と』共に食事をなさるために、たたいておられるのです。その後で、キリストご自身も、先に自分の力に応じて神の子をもてなしたその人に、ご自分の物を分け与えてくださるのです。27:12 さて、存在を支えるパンにあずかる人は、『心』を強くされて、神の子となります（詩篇一〇四・一五）。一方、『竜』にあずかる人は、目に見えないエチオピヤ人にほかなりません。『竜』の網のゆえに、その人自身もへびに変わるのです。そのため、その人は、洗礼を受けたいと言っても、みことばに責められて、こう聞かされることになります。『へびよ、まむしの子らよ、迫ってきている神の怒りから、のがれられると、おまえたちにだれが教えたのか』（ルカ三・七、マタイ三・七、二三・三三）。また、ダビデは、エチオピヤ人の食卓に供される竜の体について、こう言っています。『水の上で竜どもの頭を砕かれた。あなたは竜の頭を打ち砕き、これをエチオピヤの民に食物として与えられた』（詩篇七四・一三〜一四）。神の子は存在として実在しておられ、敵対する者も実在しています。そのどちらもが、この人かあの人かの食物となることが、不合理でないとします。それなら、よりすぐれた力とより悪い力のすべて、また人々について、次のことを受け入れるのを、なぜためらうのでしょうか。わたしたち一人一人は、これらすべてから養われうる、ということです。現に、ペテロは、カイザリヤで百卒長コルネリオと、共に集まった人々と交わろうとしていました。また、その後、異邦人にも神の言葉を分け与えようとしていました。そのとき、ペテロは、天から『四すみをつるされて降りて来る』『入れ物』を見ます。『その中には』、『地上のあらゆる四つ足と這うものと獣』がいました（使徒一〇・一一〜一二、一一・五〜六）。そのとき、ペテロは、『立って』ほふり、食べるよう命じられます（使徒一〇・一三、一一・七）。ペテロは断って、「あなたはご存じです。『清くないものや汚れたものは、一度もわたしの口にはいったことがござい

ません』」と言いました（使徒一一・八）。その後で、ペテロは、『どんな人間をも清くないとか、汚れているとか言ってはならない』と命じられます（使徒一〇・二八）。神がおきよめになったものを、ペテロが清くないとしてはならないので、そう命じられるのです。その言葉が、こう言っているからです。『神がきよめたものを、清くないなどと言ってはならない』（使徒一〇・一五、一一・九）。ですから、モーセの律法には、清い食物と汚れた食物があり、多くの生き物の名によって区別されています。それは、理性ある者たちのさまざまな気質を指しています。そして、この人々はわたしたちの養いとなり、あの人々はその反対である、と教えています。それは、神がすべての人をきよめて、養いとなる者にしてくださるまでです。あるいは、『あらゆる種類』から出た人々を、そうしてくださるまでです（マタイ一三・四七）[1]。

訳注

1 『あるいは』を『～も』と直す説もある。

27章 13〜17節　きょうと日々、世々の暦

27:13 さて、これらのことはこのようであり、食物にはこれほどの違いがあります。そうであるのですから、述べたすべての食物にまさって、ただ一つのものが、存在を支えるパンです。このパンについて、そのパンにふさわしい者とされるよう、祈るべきです。『初めに』『神と共に』おられた、神であるロゴスに養われて（ヨハネ一・一）、神のようにされるよう祈るのです。しかし、こう言う人もいるでしょう。『エピウーシオス』という語は、『来る』（エピエナイ）という語から形づくられた。そのため、わたしたちは、きたるべき世に属するパンを求めるよう命じられている。神がそのパンを先取りして、今すでにわたしたちにお与えくださるよう、求めるのである。こうして、いわば、あす与えられるはずのものが、『きょう』わたしたちに与えられる。『きょう』は今の世を、あすはきたるべき世を指すと受け取るのだ、と。しかし、わたしの判断する限りでは、前の解き方のほうがすぐれています。そのうえで、マタイのもとで添えられている『きょう』、あるいはルカのもとに書かれている『日々』を調べましょう（マタイ六・一一、ルカ一一・三）。さて、聖書の多くの箇所では、世の全体を『きょう』と呼ぶならいがあります。たとえば、『これは、きょうに至るまで、モアブびとの先祖である』という言葉がそうです。『これは、きょうに至るまで、アンモンびとの先祖である』も同じです（創世記一九・三七〜三八）。また、『この話は、きょうに至るまでユダヤ人の間にひろまっている』もそうです（マタイ二八・一五）。また、詩篇には、『きょう、あなたがたがみ声を聞いたなら、あなたがたの心を、かたくなにしてはいけない』とあります（詩篇九五・七〜八）。また、ヨシュア記では、このことがきわめて明らかに、こう言われています。『きょうの日々に、主にそむいてはならない』（ヨシュア二二・一九、二九）。もし、この世の全体が『きょう』であるなら、過ぎ去った世が『きのう』なのではないでしょうか。わたしは、聖書が、詩篇と、パウロのもとのヘブル人への手紙とで、このことを言っていると受け取っています。詩篇では、こうです。『千年も、あなたの目には、過ぎ去ったきのうの日のようです』（詩篇九〇・四）。名高い千年の期間が何であるにせよ、それは、『きょう』とは違う『きのう』の日にたとえられています。また、使徒のもとには、こう書かれています。『イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない』（ヘブル一三・八）。神にとっては、世の全体が、わたしたちのもとでの一日の長さほどの割合にあたるとしても、驚くにはあたりません。わたしは、それよりも短いものにあたる、とさえ思います。27:14 律法には、『日』、あるいは『月』、あるいは『季節』、あるいは『年』ごとに記されている祭り、あるいは祭りの集いがあります（ガラテヤ四・一〇）。その意味するところが、世々を指しているのかどうかも、調べるべきです。実際、『律法』が『きたるべき』ものの『影』を持っているなら（ヘブル一〇・一）、多くの安息日は、ある多くの日々の『影』でなければなりません。また、新月も、時の隔たりをおいて始まるものでなければなりません。その新月が、どのような月がどのような太陽と会合するときに執り行われるのか、わたしにはわかりません。また、『初めの』『月』と、十日目から『十四日まで』の日々があります。十四日から『二十一日まで』の種入れぬパンの祭りもあります（出エジプト一二・二、六、一八）。これらも、『きたるべき』ものの『影』を含んでいるとします。それなら、だれが『知恵のある』者でしょうか。多くの月のうちの初めの月と、その十日目と、それに続く日々とを見るほどに、神の『友』である者は、だれでしょうか（ホセア一四・九、ヤコブ二・二三）。七週の祭りと、第七の月とは、それをお定めになった神おひとりだけが知っておられることです。それについて、わたしが何を言う必要があるでしょうか。第七の月の新月は『ラッパ』の日で（レビ二三・二四）、その『十日』は『贖罪の日』です（レビ二三・二七）。また、七年目ごとの年々は、ヘブルびとの奴隷が自由になり、負債の『ゆるし』が行われ（申命記一五・一〜二）、聖なる地が耕作から休む年です。それを解き明かすほどに、キリストの知性を受け入れた人は、だ

れでしょうか。さらに、七年ごとの祭りよりも上に、ヨベルと呼ばれるものがあります。それが何であるかを、いくらかでもはっきりと思い描くことは、だれにもできません。その中の律法がまことのものとして満たされることを、思い描くこともできません。できるのは、すべての世々にわたる定めについての、父のご計画を観想した人だけです。その定めは、父の『窮めがたい』『さばき』と、測りがたいその道とに従っています（ローマ一一・三三）。27:15 わたしは、使徒の二つの言葉を突き合わせて、しばしば戸惑いを覚えました。イエスは、『世々』の終わりに、『罪を取り除くために』、『一度だけ』『現れ』てくださいました。もし、この世の後に、きたるべき世々があるのなら、どうしてその時が『世々』の終わりなのか、ということです。使徒の言葉は、次のとおりです。ヘブル人への手紙では、こうです。『しかし事実、ご自身をいけにえとしてささげて罪を取り除くために、世々の終りに、一度だけ現れたのである』（ヘブル九・二六）。また、エペソ人への手紙では、こうです。『それは、わたしたちに対する慈愛による神の恵みの絶大な富を、きたるべき世々に示すためであった』（エペソ二・七）。これほど大きなことについて推し量りながら、わたしはこう考えます。一年の終わりは最後の月で、その後に、別の月の初めが始まります。それと同じように、多くの世々が、いわば世々の一年を満たすのであれば、今の世が、その終わりなのではないでしょうか。その後に、きたるべきある世々が始まり、その初めにあたるのが、きたるべき世です。そして、そのきたるべき世々において、神は、『慈愛による神の恵みの』富を、お示しになるでしょう。最も罪深く、聖霊をけがした者は、今の世の全体にわたって罪に捕らえられ、きたるべき世でも初めから終わりまで捕らえられます。その後、その者は、どのようにしてかはわかりませんが、取り計らわれることになるのです。27:16 そうであれば、これらのことを見て、ある聖なる安息日の休みを観想するために（ヘブル四・九）、思いのうちに世々の一週を見た人がいるとします。その人は、神の聖なる新月を見るために、世々の一月を思い描き、年の祭りを見て取るために、世々の一年を思い描いたとします。その祭りには、『男子は皆』、『主なる神』の前に姿を現さなければなりません（出エジプト二三・一七、申命記一六・一六）。また、聖なる第七の年を捉えるために、これほど大きな世々から成る、それに見合った年々を思い描いたとします。そして、これほどのことをお定めになった方をほめたたえるために、世々の七年目の年を七つ思い描いて、調べたとします。その人が、どうして、これほど大きな世の一日の、一時間の最も小さな部分について、細かなことにこだわっていられるでしょうか。どうして、あらゆることをしないでいられるでしょうか。その人は、この地上での備えによって、存在を支えるパンを受けるにふさわしい者となるでしょう。そうして、そのパンを『きょう』という日に、また『日々』受けようと、あらゆることをするはずです。『日々』の意味は、前に述べたことから、もう明らかになっています。限りない昔から限りない先までおられる神に、『きょう』祈る人がいます。『きょう』についてだけでなく、いわば『日々』についても祈る人です。その人は、『わたしたちが求めまた思うところを、はるかに越えて』お与えになれる方から（エペソ三・二〇）、受けることができるからです。誇張して言ってよければ、その人は、『目がまだ見ず』にいたものを超えたものをも受けられます。『耳がまだ聞かず』にいたものを超えたものも、『人の心に思い浮びもしなかった』ものを超えたものも、受けられるのです（第一コリント二・九）。27:17 わたしたちは、『存在を支える』『パン』が、このパンの父から『わたしたちに』与えられるよう祈ります。そのときの『きょう』と『日々』が理解されるよう、これらのことも、どうしても調べる必要があったと、わたしには思われます。最後の書では、『わたしたちの、存在を支えるパンを、きょうお与えください』とは言われていません（マタイ六・一一）。『わたしたちの、存在を支えるパンを、日々お与えください』と言われています（ルカ一一・三）。そのため、その書に従って、先に『わたしたちの』を調べるとします[1]。それでも、このパンがどのようにして『わたしたちの』ものなのかは、調べるべきです。さて、使徒は、『生も、死も、現在のものも、将来のものも、ことごとく』聖徒のものである、と教えています（第一コリント三・二二）。このことについては、今は語る必要がありません。

訳注

1 ここは筋が通りにくく、『先に』を『先の書と同じく』と直す説もある。

28章 1〜6節　さまざまな負債

28:1 『わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしください』（マタイ六・一二）。あるいは、ルカのように、『わたしたちに負債のある者を皆ゆるしましたから、わたしたちの罪をもおゆるしください』です（ルカ一一・四）。負債については、使徒もこう言っています。『すべての人に、負債を返しなさい。貢を納むべき者には貢を納め、恐るべき者は恐れ、税を納むべき者には税を納め、敬うべき者は敬いなさい。互に愛し合うことの外は、だれにも何も負ってはならない』（ローマ一三・七〜八）。ですから、わたしたちは負債を負っています。与えることだけでなく、穏やかな言葉や、これこれの行いにおいても、ある務めを持っているのです。それだけでなく、その人々に対して、ある、これこれの心の持ち方をすることも負っています。わたしたちは、これらのものを負っています。そして、神の律法が命じることを果たしてそれを返すか、あるいは、健全な道理を軽んじて返さずに負ったままでいるかです。28:2 兄弟たちへの負債についても、同じように考えるべきです。兄弟とは、神を敬うことの道理によって、キリストにあって、わたしたちと共に新たに生まれた人々のことです。また、母を同じくし、あるいは父を同じくする兄弟たちのことでもあります。同じ町の人々への負債もあります。すべての人への共通の負債もあり、とりわけ旅人への、とりわけ父の年ごろの人への負債があります。さらに、子として、あるいは兄弟として敬うのがふさわしい人々への負債もあります。ですから、兄弟たちに負っていることを果たさない人は、しなかったことについて、負債のある者のままでいます。また同じように、知恵の、人を愛する霊によって、わたしたちが人々に当然すべきことがあります。そのうちの何かを怠るなら、負債はさらに大きくなります。それだけでなく、わたしたち自身に対することでも、わたしたちは負っています。体を、これこれのしかたで用いることを負っています。快楽を愛して、体の肉をすり減らすために用いるのではありません。また、魂にはこれこれの配慮を向け、知性の鋭さに心を配ることを負っています。言葉にも、とげがなく、役に立ち、けっして無益でないように心を配ることを負っています。わたしたち自身に対して、自分が負っていることも行わないなら、わたしたちの負債は、さらに重くなります。28:3 これらすべてに加えて、わたしたちは、神の、すべてにまさる『作品』であり、神に形づくられたものです（エペソ二・一〇）。そのような者として、神に対して、ある心の持ち方を保つことを負っています。また、『心をつくし』、『力をつくし』、『思いをつくして』神を愛する愛を保つことも負っています（マルコ一二・三〇、ルカ一〇・二七）。これらを正しく行わないなら、わたしたちは主に対して罪を犯し、神に負債のある者のままでいます。そのとき、だれがわたしたちのために祈るでしょうか。エリが、王国の第一の書で、こう言っているからです。『もし人が人に対して罪を犯すならば、人々は彼のために祈るであろう。しかし人が主に対して罪を犯すならば、だれが彼のために祈るであろうか』（第一サムエル二・二五）。それだけでなく、キリストがご自分の血によってわたしたちを買い取ってくださったので、わたしたちは負債のある者です。どの奴隷も、自分を買い取った者に対して、自分のために支払われたこれこれの額の金について、負債のある者です。それと同じです。わたしたちには、『聖霊』に対する負債もあります。この負債は、わたしたちが聖霊を悲しませないときに返されます。『この聖霊によって』、わたしたちは『あがないの日のために』証印を押されたのです（エペソ四・三〇）。また、聖霊を悲しませずに、わたしたちから取り立てられる実を結ぶときにも、返されます。そのとき、聖霊はわたしたちと共にいてくださり、わたしたちの魂を生かしてくださいます。わたしたち一人一人には、『天にいます』『父の』『み顔を』見ている御使いがいます（マタイ一八・一〇）。それがだれなのかを、わたしたちははっきりとは知りません。それでも、わたしたちの一人一人が、よく調べてみれば、その御使いにも何かの負債を負っていることは明らかになります。また、わたしたちが、世と御使いたちと人々との劇場にいるのなら、

次のことを知るべきです。劇場に出る者は、観客の目の前で、これこれのことを言い、あるいは行う負債を負っています。それをしなければ、その者は、劇場全体を侮った者として罰せられます。それと同じように、わたしたちも、全『世』と、すべての『御使いたち』と、人類とに対して、これらのことを負っています（第一コリント四・九）。それがどのようなことかは、望むなら、知恵から学ぶことになるでしょう。28:4 これらは、より一般的な負債です。それとは別に、教会に養われているやもめの負債があります。執事の負債も、長老の負債も、それぞれあります。また、監督の負債は最も重いものです。全教会の救い主がそれをお取り立てになり、返されなければ罰をお下しになります。また、使徒も、夫と妻とに共通の、ある負債をその名で呼んで、こう言っています。『夫は妻に負債を返し、妻も同様に夫に返すべきである』（第一コリント七・三）。そして、こう続けます。『互に拒んではいけない』（第一コリント七・五）。わたしたちは、負っているものを返さなければ捕らえられ、あるいは、返せば自由にされます。その負っているものがどれほどあるかを、これ以上、わたしが言う必要があるでしょうか。この書を読む人は、述べたことから、自分にかかわることを拾い出せるのですから。ただ、生きているあいだ、夜も昼も、どの時にも負債を負っていないということは、ありえません。28:5 しかし、負っている中で、人は負債を返すか、あるいは拒むかです。生きているあいだに返すこともできますし、拒むこともできます。ある人々は、だれにも何も負っていません。ある人々は、ほとんどを払って、わずかを負っています。ある人々は、わずかを返して、より多くを負っています。おそらく、何も返さず、すべてを負っている人もいるでしょう。もっとも、すべてを返して何も負わなくなる人も、ある時がたってから、それをやり遂げるのです。そのため、その人は、前の負債についてのゆるしを必要とします。このゆるしは、ある時から、そのような者になろうと励んだ人が、得てしかるべきものです。そのような者とは、当然すべきことのうち、返されていないものとして負うものが何一つない人です[1]。これらの不法な働きは、魂の主導部分に刻まれて、『わたしたちを責めて不利におとしいれる』『証書』となります（コロサイ二・一四）。わたしたちは、この証書によってさばかれます。それは、すべての人が、こう言ってよければ、自分の手で書きしるした書物が、持ち出されるようなものです。その時、『わたしたちはみな』、『キリストの』『さばきの座の前に立つ』のです。立つのは、『それぞれ、善であれ悪であれ、体を通して行ったことに応じて、報いを受けるため』です（ローマ一四・一〇、第二コリント五・一〇）。箴言にある言葉も、これらの負債について言われています。『人の顔をはばかる者よ、自分を保証に入れてはならない。その人が返すあてを持たないなら、人々は、あなたの脇腹の下の、あなたの寝床を取り上げるであろう』（箴言二二・二六～二七）。28:6 わたしたちが、これほど多くの者に負っているのなら、必ず、わたしたちに負っている人々もいます。人としてのわたしたちに負っている人々もいれば、同じ町の人としてのわたしたちに負っている人々もいるからです。ほかに、父としてのわたしたちに負う人々も、子としてのわたしたちに負う人々もいます。さらに、夫としてのわたしたちに妻たちが負い、あるいは、友としてのわたしたちに友が負っています。わたしたちに負債のある人々は、たいへん多くいます。そのうちのある人々が、わたしたちに対する務めを返すことに手ぬるいときがあるでしょう。ですから、そのときに、その人々に恨みを抱かずに接し、自分の負債を思い起こすなら、より人を愛するふるまいになります。その負債を、わたしたちは、人々に対してだけでなく、神ご自身に対しても、しばしば怠ってきたのです。わたしたちは、負債のある者でありながら、返したのではなく、拒んできたものがあります。隣人に対してこれこれのことをしておくべきだった時は、過ぎ去ってしまいました。そのことを思い起こすなら、わたしたちにもまた負債を負いながら、それを返していない人々に対して、より柔和になるからです。とりわけ、神に対してわたしたちが犯した不法を忘れないなら、そうなります。また、『高いところに向けて』わたしたちが語った不義を忘れないなら、そうなります（詩篇七三・八）。その不義は、真理を知らないために語ったものか、あるいは、身に降りかかった境遇への不満から語ったものです。

訳注

1 ここに本文の欠けがあるとみる説もある。

28章 7〜10節　ゆるすことと、ゆるさずにおくこと

28:7 仲間に『百デナリ』をゆるさなかった者がいます（マタイ一八・二八）。わたしたちに負債を負った人々に、より柔和になろうとしないなら、わたしたちはその者と同じ目にあうでしょう。福音書にあるたとえによれば、その者は前もってゆるされていました。それなのに、主人は彼を閉じ込めて、前もってゆるしていたものを取り立てます。主人は彼に言います。『悪い怠惰な僕よ』、『わたしがあなたをあわれんでやったように、あなたの仲間をあわれんでやるべきではなかったか』（マタイ二五・二六、一八・三三）。そして、『負債全部を返してしまうまで』彼を『獄に』入れよ、と言うのです（マタイ一八・三〇、三四）。主は、これに続けて、こうおっしゃいます。『あなたがためいめいも、もし心から兄弟をゆるさないならば、天の父もまたあなたがたに対して、そのようになさるであろう』（マタイ一八・三五）。もっとも、わたしたちに罪を犯した人々が悔い改めると言うなら、たとえ負債のある者がそれを何度しても、ゆるすべきです。主がこうおっしゃるからです。『もし』『あなたの兄弟が』『あなたに対して』『一日に七度罪を犯し』、『そして七度『悔い改めます』と言って帰ってくれば、ゆるしてやるがよい』（ルカ一七・四、三）。悔い改めない人々に対して、わたしたちが厳しいのではありません。そうではなく、そのような人々が、自分自身に対して悪いのです。『教訓を捨てる者は、自分自身を憎む』からです（箴言一五・三二）。ただし、そのような人々についても、いやしが生じるよう、あらゆる手を尽くして求めるべきです。その人は、すべてにわたってゆがんでしまったので、自分の悪に気づきもしません。そして、『酒による』酔いよりも滅びをもたらす酔い、すなわち悪の暗がりからくる酔いに酔っているのです（イザヤ五一・二一）。28:8 ルカは、『わたしたちの罪をもおゆるしください』と言って、マタイと同じことを言っています（ルカ一一・四）。罪は、わたしたちが負っていながら返さないことから成り立つのですから。ルカは、負債のある者のうち、悔い改める者だけをゆるそうとする人に、余地を与えないようです。救い主がお定めになったことを、ルカは言っているのです。わたしたちは祈りの中で、『わたしたちに負債のある者を皆ゆるしますから』と付け加えなければならない、という定めです。もっとも、わたしたちは皆、自分に対して犯された罪をゆるす権威を持っています。このことは、『わたしたちに負債のある者をゆるしましたように』という句から明らかです（マタイ六・一二）。『わたしたちに負債のある者を皆ゆるしますから』という句からも、明らかです。しかし、使徒たちのようにイエスから息を吹きかけられ、『実によって』見分けられることのできる人がいます（マタイ七・一六、二〇）。その人は、聖霊を受け入れた者です。また、神の子のように、道理にかなって行うべき一つ一つのことについて御霊に導かれるので、霊の人となった者です。その人は、そのような者として、神がおゆるしになることをゆるし、いやしがたい罪はゆるさずにおきます。預言者たちは、自分のことではなく、神のご意志のことを語って、神に仕えました。それと同じように、その人も、ゆるす権威をただひとり持っておられる神に仕えているのです。28:9 ヨハネによる福音書では、使徒たちによってなされるゆるしについての言葉が、こうなっています。『聖霊を受けよ。あなたがたが、ある人々の罪をゆるせば、その人々にゆるされ、ある人々の罪をゆるさずにおけば、ゆるされずに残るであろう』（ヨハネ二〇・二二〜二三）。もし人がこれを吟味せずに受け取るなら、使徒たちを非難する人もいるでしょう。使徒たちは、すべての人がゆるされるよう、すべての人にゆるすのではない。そうではなく、『ある人々の』『罪を』ゆるさずにおく。そのため、その罪は、使徒たちのゆえに神のもとでもゆるされずに残るのだ、と。しかし、人を通して神によって人々になされる罪のゆるしを理解するには、律法から例を取るのが役に立ちます。律法による祭司たちは、ある罪のためには、犠牲をささげて当の人々の過ちがゆるされるようにすることを、禁じられています。律法の祭司は、ある罪についての権威を持ち、故意でない罪や過ちのためにささげる務めを持っています。だからといって、姦淫や故意

の殺人、あるいはもっと重いほかの罪過のためにも、『燔祭と罪祭』をまさかささげはしないでしょう（詩篇四〇・六）。ですから、それと同じように、使徒たちも、使徒たちに似た者となった人々も、『大いなる』『大祭司』にならう祭司です（ヘブル四・一四、一〇・二一）。その人々は、神への奉仕の心得を受けています。そして、御霊に教えられて、どの罪のために、いつ、どのようなしかたで、罪のための犠牲をささげるべきかを知っています。また、どの罪のためにはそうすべきでないかも、見分けています。現に、祭司エリは、子らのホフニとピネハスが罪を犯していることを知っていました。そして、二人の罪のゆるしに何も力を貸せない者として、それが実現する望みを捨てていることも、次の言葉で認めています。『もし人が人に対して罪を犯すならば、人々は彼のために祈るであろう。しかし人が主に対して罪を犯すならば、だれが彼のために祈るであろうか』（第一サムエル二・二五）。28:10 どうしてなのか、わたしにはわかりませんが、ある人々は、祭司の位を越えることを自分に許しています。おそらく祭司の心得をきわめもしないで、偶像礼拝さえゆるし、姦淫や淫行もゆるすことができると誇っているのです。そのようなことをあえてした人々のための自分たちの祈りによって、『死に至る』罪さえ解かれる、というつもりなのです。その人々は、『死に至る罪がある。これについては、願い求めよ、とは言わない』という言葉を読んでいないからです（第一ヨハネ五・一六）。また、最も雄々しいヨブについても、黙って過ごすべきではありません。ヨブは子らのために犠牲をささげ、『わたしの子らは、思いの中で神に対して悪いことを考えたかもしれない』と言っています（ヨブ一・五）。ヨブは、罪が犯されたかどうか疑わしく、しかも、くちびるにさえ達していないことのために、犠牲をささげているからです。

29章 1〜9節　地上の一生はすべて試み

29:1『わたしたちを試みに引き入れないで、悪しき者からお救いください』（マタイ六・一三）。このうち、『悪しき者からお救いください』の句は、ルカのもとでは語られていません。救い主が、できないことを祈るようにお命じになるのでないなら、次のことは調べるに値する、とわたしには思えます。地上の人々の一生は、すべて試みです。それなのに、どうしてわたしたちは、『試みに』入らないように祈れと命じられているのでしょうか。実際、わたしたちは地上にあって、『御霊に反して』戦う肉をまとっています（ガラテヤ五・一七）。その肉の『思いは』『神に』『敵する』ものであり、肉は『神の律法に』決して従い得ないのです（ローマ八・七）。そのかぎりで、わたしたちは試みの中にいるのです。29:2『地上の』人間の『一生』がすべて『試み』であることを、わたしたちはヨブから、次の言葉によって学んでいます。『地上の人々の一生は、試みではないか』（ヨブ七・一）。また、第十七篇からも、同じことが次の言葉で示されています。『わたしはあなたによって、試みから救われる』（詩篇一八・二九）。さらに、パウロも、コリントの人々に書き送っています。そして、神が恵んでくださるのは、試みられないことではなく、力に余る試みを受けないことだ、と言っています。その言葉はこうです。『あなたがたの会った試みで、人間的でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試みに会わせることはないばかりか、試みと同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えてくださるのである』（第一コリント一〇・一三）。『戦い』が、『御霊に反して』欲し、あるいは戦う『肉』『に対する』もの『である』とします。あるいは、『すべての肉の』魂に対するものであるとします（レビ一七・一一）。人間的な試みで試みられる人々の『戦い』は、そのようなものです。この魂とは、魂の主導部分のことです。この主導部分は、自分が宿る体の部分と同じ名で、心（カルディア）と呼ばれています。あるいは、わたしたちが、先へ進んだ、より全き競技者として、もはや『血肉に対して』戦わないとします。また、すでに踏みにじった人間的な試みの中で、試されることもないとします。そして、わたしたちの競技は、『もろもろの支配と、権威と、このやみの世の主権者、また悪の霊に対する』ものであるとします（エペソ六・一二）。どちらにしても、わたしたちは試みられることを免れてはいないからです。29:3では、神は、すべての人を何らかのしかたで試みておられます。それなのに、どうして救い主は、『試みに』入らないように祈れと、わたしたちにお命じになるのでしょうか。実際、あのユダヤの女[1]は、そのときの長老たちに向かってだけでなく、その書を読むすべての人々に向かっても、こう言っています。『神がアブラハムになさったすべてのこと、イサクをお試みになったすべてのことを、思い起こしなさい。スリヤのメソポタミヤで、母の兄弟ラバンの羊を飼っていたヤコブに起ったすべてのことを、思い起こしなさい。主は、彼らの心を試すために、彼らを火でお練りになった。ご自分に近づく者たちを戒めのためにお打ちになる主は、それと同じようにわたしたちに報復なさるのではないからである』（ユディト八・二六〜二七）。また、すべての正しい人について、普遍のこととして言い表している人々もいます。ダビデは『正しい者には災が多い』と言っています（詩篇三四・一九）。また、使徒は使徒行伝で、『わたしたちが神の国にはいるのには、多くの苦難を経なければならない』と言っています（使徒一四・二二）。29:4『試みに』入らないように祈ることについて、多くの人々が気づかずにいることがあります。わたしたちがそれを悟らないとします。そうであれば、使徒たちは祈っても聞き入れられなかったのだ、と言うべき時でしょう。使徒たちは、その生涯のすべての時を通して、数えきれないほどの苦しみを受けたのです。『苦労したことはもっと多く、むち打たれたこともっと多く、投獄されたことは、はるかにおびただしく、死に面したこともしばしばあった』のです（第二コリント一一・二三）。とりわけパウロは、『ユダヤ人から五度、四十に一つ足りない』むちを受けました。『三度』むちで打たれ、『一度』石で打たれ、『三度』難船し、『一昼夜、海の上』で過ごしま

した（第二コリント一一・二四～二五）。パウロは、『四方から』患難を受け、途方にくれ、迫害に会い、倒される人でした（第二コリント四・八～九）。そして、こう言い表してもいます。『今の今まで、わたしたちは飢え、かわき、裸にされ、打たれ、宿なしであり、苦労して自分の手で働いている。はずかしめられては祝福し、迫害されては耐え忍び、ののしられては優しい言葉をかけている』（第一コリント四・一一～一三）。使徒たちでさえ、祈っても得られなかったとします。それなら、彼らより劣る者が祈って、神に聞き入れていただける、どんな望みがあるでしょうか。29:5 また、第二十五篇には、こうあります。『主よ、わたしをためし、わたしを試み、わたしの心と思いとを練りきよめてください』（詩篇二六・二）。救い主の命令のねらいが何かを、正確に知らない人もいます。その人は、これが、わたしたちの主が祈りについてお教えになったことに反している、と考えるでしょう。無理もないことです。しかし、ある人が理性の満ちる年に達して、試みを知るようになったとします。その人が、人々は試みの外にいる、と考えたことが、いつあったでしょうか。また、罪を犯さないための戦いをしなくてよいかのように、人が気をゆるめてよい時が、どこにあるでしょうか。ある人は貧しいでしょうか。その人は、盗みをして、『神の名』にかけて誓うことのないよう、用心しなければなりません。では、富んでいるでしょうか。気をゆるめてはなりません。『飽き足りて偽る者』となり、思い上がって『だれがわたしを見ているか』と言うことがありうるからです（箴言三〇・九）。現に、パウロは、『すべての言葉にもすべての知識にも』富んでいました（第一コリント一・五）。そのパウロでさえ、そのことで高慢になって罪を犯す危険を、免れてはいません。そうではなく、高慢になら『ないように』、彼を打つサタンのとげを必要としているのです（第二コリント一二・七）。また、自分にすぐれたところがあると自覚し、悪から離れて、翼を得たように舞い上がる人もいるでしょう。その人は、『省かれたことの第二の書』でヒゼキヤについて言われていることを、読むべきです。ヒゼキヤは、『その心の高ぶり』のゆえに倒れた、と言われているのです（第二歴代三二・二五～二六）。29:6 わたしは、貧しい人について、多くを語りませんでした。そのために、貧しさに関わる試みなどないかのように、気をゆるめる人がいるなら、その人は知るべきです。たくらむ者は、『貧しい者と乏しい者とを倒す』ためにたくらんでいるのです（詩篇三七・一四）。ソロモンによれば、『貧しい者は脅しに耐えられない』のですから、なおさらです（箴言一三・八）。また、次のような人々がどれほど多いかを、語る必要があるでしょうか。体に関わる富を、よく管理しなかった人々がいます。その人々は、その富のゆえに、福音書の金持ちと共に、刑罰の中に場所を得ました。また、貧しさを卑しく耐えた人々がいます。その人々は、『聖徒』の間でふさわしいことよりも、奴隷のように卑屈にふるまって（エペソ五・三）、天の望みから落ちてしまいました。また、富と貧しさの両方の中間にいる人々もいます。その人々も、ほどよい持ち物のことで罪を犯すことを、まったく免れているわけではありません。29:7 しかし、体が健やかで丈夫な人は、そのこと自体のゆえに、自分はあらゆる試みの外にいる、と思っています。けれども、『神の宮を』損なうことが（第一コリント三・一七）、丈夫で健やかな人々のほかに、だれの罪であるのか。それを言うことは、だれもあえてしないでしょう。この箇所のことは、すべての人にはっきりとしているからです。では、病む人のうち、だれが、『神の宮を』損なうことへの誘いを逃れたでしょうか。病む人は、そのときには暇があり、汚れたことについての思いを、とてもよく受け入れてしまうのです。まして、『油断することなく』『心を』守らないとします（箴言四・二三）。そのとき、ほかにどれほど多くのことがその人をかき乱すかを、言う必要があるでしょうか。実際、多くの人々が、痛みに負け、病を雄々しく耐えるすべを知りませんでした。そして、そのとき、体よりも、むしろ魂を病んでいたことが明らかになったのです。また、多くの人々が、不名誉を逃れようとして、キリストの名を高貴に担うことを恥じ、永遠の恥に落ちてしまいました。29:8 しかし、人々のもとで誉れを与えられているときには、試みられていないものとして安らいでいられる、と思う人がいます。けれども、多くの人々のもとでの誉れを、良いものとして誇る人々がいます。その人々に、『人々』から『報いを受けてしまっている』と告げられるのは（マタイ六・二）、どうして厳しいことでないでしょうか。また、次の言葉は、どうして叱責でないでしょうか。『互に誉れを受けながら、ただひとりの神からの誉れを求めようとしないあなたがたは、どうして信じることができようか』（ヨハネ五・四四）。また、高貴な生まれとされる人々が、

高慢のうちに犯す罪過を、わたしが数え上げる必要があるでしょうか。また、生まれの卑しいと言われる人々は、無知のゆえに、上に立つとされる人々にへつらってひれ伏します。それも、数え上げる必要があるでしょうか。このへつらいは、まことの友愛を持たずに、人々の間で最も美しいもの、すなわち愛を装う人々を、神から引き離すのです。29:9ですから、前に述べたとおり、『地上の人の』『一生』は、すべて『試み』『である』のです。そのため、試みから救われるよう祈りましょう。それは、試みられないことによってではありません（それはできないことだからです。とりわけ『地上に』いる者たちには）。そうではなく、試みられても負かされないことによってです。わたしの考えでは、試みられて負かされる人が、『試みに』入るのです。その人は、試みの網に捕らえられています。救い主は、その網に前もって捕らえられている人々のために、その網の中にお入りになりました。そして、雅歌に言われているとおり、『網からのぞいて』（雅歌二・九）、前もって捕らえられて『試みに』入った人々に『答え』てくださいます。ご自分の花嫁である人々に、こう『言って』くださるのです。『わが近しい者よ、わが麗しき者よ、わがはとよ、立って、来なさい』（雅歌二・一〇）。また、どの時も人にとって試みの時であることについて、次のことも付け加えましょう。神の律法を『昼も夜も』口ずさむ人がいます（詩篇一・二）。その人は、『正しい者の口は知恵を口ずさむ』という言葉を、正しく行おうと努めています（詩篇三七・三〇）。そのような人でさえ、試みられることを免れてはいないのです。

訳注

1 ユディト記のユディトのこと。

29章 10〜14節　神が試みに引き入れ、引き渡すこと

29:10 現に、次のような人々がどれほど多いかを、語る必要さえあるでしょうか。その人々は、神の書を吟味することに身をささげていながら、律法と預言者に告げられていることを取り違えました。そして、神を認めない不敬虔な教えに、あるいは愚かでこっけいな教えに、身をささげてしまったのです。聖書を読むことを怠ったという非難を受けないと見える人々がいます。そのうちにも、このようなことでつまずく者が、数えきれないほどいるのですから。同じことを、使徒の書と福音書を読むときにも、多くの人々が経験しています。聖徒たちは、子と父を神として語り、真理のとおりに考えてきました。ところが、その人々は、自分の愚かさのゆえに、それとは別の子あるいは父を作り上げるのです。実際、神について、あるいはそのキリストについて、まことのことを考えない人がいます。その人は、まことの神と、そのひとり子から落ちてしまっています。その人の愚かさは、あるものを作り上げ、それを父であり子であると思い込みました。その人はそれを拝していますが、まことに拝しているのではありません。その人がこうなったのは、聖なるものを読むときの試みに気づかなかったことのゆえです。試みは、そのときにも戦いとしてその人に迫っていたのに、その人はそれに向かって武装して立つこともしなかったのです。29:11 ですから、わたしたちが祈らなければならないのは、試みられないようにではありません（それはできないことだからです）。そうではなく、試みに巻き込まれないように祈るのです。試みに捕らわれて負けてしまった人々は、この目にあっているのです。さて、祈りの外では、『試みに入らないように』と書かれています（ルカ二二・四〇）。これが何を言うかは、これまで述べたことから、いくらかはっきりしたでしょう。一方、祈りの中では、わたしたちは父なる神に、『わたしたちを試みに引き入れないで』と言うべきです。そうである以上、次のことは見ておく値打ちがあります。神が、祈らなかった人、あるいは聞き入れられなかった人を『試みに』お引き入れになるということを、どう受け取るべきかです。『試みに』入るのは、負ける人です。そうであれば、神が人を『試みに』お引き入れになると考えるのは、不合理だからです。神が、いわばその人を負けることへとお引き渡しになる、ということになってしまいます。『試みに入らないように祈りなさい』という言葉を、どのように解き明かす人にも、同じ不合理が待ち受けています。実際、『試みに』陥ることが悪であり、わたしたちはそれにあわないように祈っているとします。そうであれば、善い神が人を悪にお巻き込みになると考えるのは、どうしておかしなことでないでしょうか。善い神は、『悪い』『実』を結ぶことのおできにならない方なのです（マタイ七・一八）。29:12 そこで、このことについては、パウロがローマ人への手紙で次のように語っていることを、並べて置くのが役に立ちます。『彼らは自ら知者と称しながら、愚かになり、不朽の神の栄光を変えて、朽ちる人間や鳥や獣や這うものの像に似せたのである。ゆえに、神は、彼らを心の欲望のうちに、自分のからだを互にはずかしめる汚れへと、お引き渡しになった』（ローマ一・二二〜二四）。また、少し後で、こう言っています。『それゆえ、神は彼らを恥ずべき情念へとお引き渡しになった。すなわち、彼らの中の女は、その自然の関係を不自然なものに代えた。男もまた同じように、女との自然の関係を捨てて、燃え上がった』と、それに続く言葉です（ローマ一・二六〜二七）。さらに、少し後で、こう言っています。『そして、彼らは神を認めることを正しいとしなかった。それで、神は彼らを、なすべからざる事をなす、正しからぬ思いへとお引き渡しになった』（ローマ一・二八）。ともかく、これらすべてのことについては、神性を切り分ける人々に目を向けるべきです。その人々は、わたしたちの主の善い父を、律法の神とは別の方だと考えています。その人々に向かって、こう言うべきです。善い神が、祈りのかなわない人を『試みに』お引き入れになるとします。前に何か罪を犯した人々がいます。主の父が、その人々を、『心の欲望のうちに』、『自分のからだを互にはずかしめる』『汚れへと』お引き渡しになるとします。神性を切り分ける人々自身は、この方

がさばくことと罰することから離れておられる、と言います。それなのに、この方が『恥ずべき情念へと』、また『なすべからざる事をなす、正しからぬ思いへと』お引き渡しになるとします。そうであれば、神に欲望へと引き渡されなかった人々は、『自分の心の欲望のうちに』陥ることはなかったはずです。神に情念へと引き渡されなかった人々は、『恥ずべき』情念に屈することもなかったはずです。このように罪に定められた人々も、神に引き渡されなければ、『正しからぬ思いに』落ち込まなかったはずではありませんか。29:13 さて、このことが、あの人々をひどくかき乱すことを、わたしはよく知っています。あの人々は、次のことのゆえに、天と地の造り主である神とは別の神を作り上げたのです。律法と預言者の中に、このようなことを数多く見いだしたのです。そして、このような言葉を口になさる方は善い方ではないとして、つまずいたのです。一方、『わたしたちを試みに引き入れないで』については、問いが持ち上がりました。そのために、わたしは使徒の言葉も並べて置いたのです。そこで今、わたしたちも、これらの不合理に対して、取り上げるに値する解決を見いだせるかどうかを、考えるべきです。わたしの考えでは、神は、理性ある魂の一つ一つを、その魂の永遠のいのちに目を注ぎながら、取り計らっておられます。魂は、いつも自由意志を持っています。そして、魂は、自分自身が原因となって、二つのうちのどちらかになります。より善いものの中を上って善の頂に至るか、あるいは、不注意からさまざまに下って、悪のこれこれの広がりへと落ちるかです。ところで、早く、手短にすむいやしを受けると、ある人々は、自分の陥った病を軽んじるようになります。たやすくいやせるものと思うのです。そのため、健やかになった後に、二度も同じ病に陥ることがありうるのです。ですから、神は、そのような人々については、悪がある程度まで増していくのを、もっともなことにお見過ごしになります。悪が、その人々のうちで、いやせないほどに大きく広がるのを、見逃しておられるのです。その人々は、悪に長くとどまり、欲する罪に満たされて飽きれば、その害を感じとるでしょう。そして、かつて受け入れたものを憎むようになり、いやされるでしょう。そうして、いやされて得た魂の健康を、いっそう確かに享受することができるでしょう。神が悪の広がりをお見過ごしになるのは、そのためです。たとえば、かつてイスラエルの人々の中にいた『寄り集まりびとは』、『欲望を起こした。そして、イスラエルの人々も座って泣き、言った。『だれがわれわれに肉を食べさせてくれるのか。われわれは、エジプトでただで食べた魚を思い起す。きゅうりも、すいかも、にらも、たまねぎも、にんにくも。いま、われわれの魂は干からびてしまった。われわれの目の前には、このマナのほか何もない』』（民数一一・四～六）。それから、少し後で、こう言われています。『モーセは、彼らが氏族ごとに、おのおのその入口で泣くのを聞いた』（民数一一・一〇）。また、少し後で、主はモーセにこうおっしゃいます。『また、民に言いなさい。『あす、身をきよめなさい。あなたがたは肉を食べるであろう。あなたがたが主の前で泣いて、だれがわれわれに肉を食べさせてくれるのか、エジプトにいた時は良かった、と言ったからである。主はあなたがたに肉をお与えになり、あなたがたは肉を食べるであろう。一日だけ食べるのではない。二日でも、五日でも、十日でも、二十日でもない。一か月の間、食べるであろう。ついには、あなたがたの鼻から出るまでになる。そして、それはあなたがたにとって吐き気となるであろう。あなたがたが、あなたがたのうちにおられる主に従わなかったからである。その前で泣いて、なぜ、われわれはエジプトから出てきたのか、と言ったからである』』（民数一一・一八～二〇）。29:14 では、この話を見てみましょう。わたしは、この話をあなたがたの前に並べました。『わたしたちを試みに引き入れないで』の句と、使徒の言葉とにある不合理を、解決するためです。それが役に立ったかどうかを見るのです。イスラエルの人々の中にいた『寄り集まりびと』は、『欲望を』起こしました。そして、『イスラエルの人々も』その人々と共に『泣いた』のです。欲するものを持っていないあいだは、その人々が、それに飽きることも、その情念をやめることもできなかったことは、明らかです。しかし、人を愛する善い神は、その人々に欲するものをお与えになりました。そのときにも、その人々のうちに欲望が残るような与え方は、お望みになりませんでした。そのため、神は、その人々が『肉』を『一日』だけ食べるのではない、とおっしゃいます。わずかのあいだだけ肉にあずかっていたとします。そうであれば、その人々の情念は、それに焼かれ燃やされた魂の中に、とどまり続けたであろうからです。また、欲するものを『二』『日』のあいだお与えになるのでもありません。神は、それをその人々にとって飽き飽きするものにしようと

お望みになりました。そこで、恵みを与えておられるように見える言葉をお語りになります。しかし、悟ることのできる人にとっては、それは、いわば約束ではなく脅しなのです。こうおっしゃるのです。「あなたがたが『肉』を食べて過ごすのは、ただ『五』『日』でもない。その倍でもなく、さらにその倍でもない。そうではなく、まる一か月のあいだ肉を食べ続けて、これほど長く『食べるであろう』。吐き気の苦しみと共に、『鼻から出るまで』である。出てくるのは、あなたがたが良いと思っていたものと、それへの貪められるべき、恥ずべき欲望である。わたしがそうするのは、もはや欲することのないあなたがたを、この生から去らせるためである。あなたがたは、そのような者として出て行き、欲望からきよい者となる。そして、どれほどの労苦を経て欲望から解き放たれたかを、覚えているだろう。そのため、もう決して欲望に陥らないか、あるいは、陥るとしても長い時の巡りの後になるか、そのどちらかになることができる。そのときには、あなたがたは、欲望のゆえに受けた苦しみを忘れている。そして、自分に気をつけず、あらゆる情念から完全に解き放つ理性を身に着けないなら、悪に陥るだろう。後になって生成を欲し、自分の欲するものを二度得ることを、再び必要とするだろう。そして、欲するものを憎むようになり、そうしてはじめて、善いものと天の食物とへ、走り戻ることを必要とするだろう。この食物を軽んじて、より悪いものを求めたのである。」

29章15〜19節　清めの火と、試みが明らかにするもの

29:15 ですから、次の人々も、これらの人々と同じ目にあうでしょう。『不朽の神の栄光を変えて、朽ちる人間や鳥や獣や這うものの像に似せた』人々です（ローマ一・二三）。その人々は、見捨てられることによって、『心の欲望のうちに、からだをはずかしめる汚れへと』引き渡されるのです（ローマ一・二四）。はずかしめられるのは、ある方の名を、魂も感覚もない物体にまで引き下ろした者たちのからだです。その方は、感覚する理性あるものすべてに、感覚することだけでなく、理性をもって感覚することをお与えになりました。ある者たちには、さらに、完全に、徳にかなって感覚し、考えることもお与えになったのです。このような人々を、その人々に見捨てられた神が、こんどはご自分のほうからお見捨てになります。そして、『恥ずべき』『情念』へとお引き渡しになるのは、もっともなことです。その人々は、自分の愛した、疥癬のかゆみのような快楽を通して、『迷いの』『報いを』『身に受ける』のです（ローマ一・二六〜二七）。実際、その人々に『迷いの』報いが生じるのは、次のときよりも、むしろ『恥ずべき情念へと』引き渡されるときなのです。次のときとは、見分ける火によって清められるときと、獄の中で負債の一つ一つを最後の一コドラントまで取り立てられるときです（マタイ五・二五〜二六）。その人々は、『恥ずべき』情念に引き渡されます。それも、自然にかなうものだけでなく、自然に反するものの多くにも引き渡されます。そうして引き渡される中で、その人々は汚れ、肉によって鈍くなるからです。そのとき、その人々は、いわば、もはや魂も知性も持たず、全身が肉となってしまうのです。一方、火と獄の中では、その人々は、『迷いの』『報い』を受けるのではありません。そうではなく、迷いの中で犯した悪を清めるための恩恵を受けるのです。その恩恵は、快楽を愛する者たちに付いてくる、救いをもたらす苦労と共に与えられます。こうして、その人々は、あらゆる汚れと血から解き放たれます。その人々は、それらに汚れ、まみれていたので、自分たちの滅びの中で、救われることを思うことさえできなかったのです。それゆえ、神は『シオンの息子たちと娘たちの汚れを』『洗い流し』てくださるでしょう。そして、『審判の霊と焼き尽くす霊とをもって、その中から血を清め』てくださるでしょう（イザヤ四・四）。神は、『溶かす炉の火のように、また洗う者の草のように』、『入って』おいでになるからです（マラキ三・二）。そして、このような薬を必要とする人々を、洗い流し、清めてくださいます。その人々がこの薬を必要とするのは、次のことのゆえです。『神を』『認める』ことを、正しいと見きわめたうえで望む、ということをしなかったのです（ローマ一・二八）。その人々は、この薬に引き渡されて、自分から『正しからぬ思い』を憎むようになるでしょう。神は、だれにとっても、善が強いられたように生じることをお望みにならず、自分から進んで生じることをお望みになるからです。おそらく、ある人々は、悪と長く親しんできたために、その醜さにやっと気づくのでしょう。そして、誤って美しいと思い込んでいたその悪から、背を向けるのでしょう。29:16 考えてみてください。パロは、かたくなにされていなかったときに、『主は正しく、わたしと、わたしの民は悪い』と言いました（出エジプト九・二七）。神がパロの心をかたくなになさるのも、パロがこの言葉を言えるようになるためではないでしょうか。しかし、パロが、かたくなにされることから早く解かれたとします。そうであれば、パロは、かたくなにされるという悪を軽んじ、さらに何度も、かたくなにされるに値する者となるでしょう。そうならないように、パロは、長いあいだかたくなにされ、長いあいだ何かを被ることを必要とするのです。そこで、箴言に言われているとおり、『鳥に網が張られるのは、不当なことではない』とします（箴言一・一七）。そうではなく、神が人を『わなに』お引き入れになるのは、もっともなことだとします。『あなたはわれらをわなに引き入れ』と言った人のとおりです（詩篇六六・一一）。また、翼あるもののうち、より安いほうの雀でさえ、『父の』計らい『なしに』は、『わなに』落ちることがない、とします（マタイ一〇・二九）。『わなに』落ちる者は、

上に昇るために与えられた翼の力を正しく用いなかったので、そのために落ちるのです。これらのことがそうであれば、わたしたちは祈りましょう。神の正しいさばきによって『試みに』引き入れられるに値することを、何もしないように、と。神によって、自分の心の『欲望のうちに』、『汚れへと』引き渡される者は、皆、試みに引き入れられるのです。『恥ずべき情念へと』引き渡される者も、皆そうです。また、ある人々は、『神を』自分の『うちに持つことを正しいとしなかった』のです。その人々は、そのために、『なすべからざる事をなす、正しからぬ思いへと』引き渡されます。この人々も、皆そうです。29:17 試みられることが何の役に立つかといえば、次のとおりです。わたしたちの魂が受け入れたものは、神のほかのすべての者に、いや、わたしたち自身にさえ隠れています。それが、試みを通して明らかになるのです。そうなるのは、わたしたちがどのような者であるかが、もはや隠れたままにならないためです。それだけではありません。わたしたち自身も、自分を知って、望むなら自分の悪に気づくためでもあります。また、試みを通して自分に明らかにされる善のゆえに、感謝するためでもあります。わたしたちに起こる試みは、わたしたちがどのような者であるかが現れるために起こります。あるいは、わたしたちの心に隠されているものが見分けられるために起こるのです。このことを、ヨブ記で主が語っておられる言葉と、申命記に書かれている言葉が示しています。それは次のとおりです。『あなたが正しい者として現れるためのほかに、わたしがあなたに語ったと思うのか』（ヨブ四〇・八）。また、申命記にはこうあります。『あなたを苦しめ、あなたを飢えさせ、マナをもってあなたをお養いになった』。『かむへびと、さそりと、渇きのある』『荒野で』、『あなたをお導きになった』。それは、『あなたの心のうちが見分けられる』『ため』でした（申命記八・三、二、一五）。29:18 また、聖書の物語からも思い起こしたいなら、次のことを知るべきです。エバのだまされやすさと、その思いのもろさは、エバが神に聞き従わずにへびに聞いたときに生じたのではありません。そうではなく、それより前からあったことが、あばかれたのです。へびがエバに近づいたのも、次のことのゆえです。へびは、自分の狡猾さで、エバの弱さを見てとったのですから。また、カインの中でよこしまさが生じ始めたのも、カインが『弟を』『殺した』ときではありません（創世記四・八）。それより前にも、『人の心をご存じである神は』、『カインとその供え物とを顧みることをなさらなかった』からです（創世記四・五、使徒一五・八）。ただ、カインの悪が明らかになったのが、アベルを殺したときだったのです。さらに、ノアが、自分で作った『ぶどう酒』を飲んで『酔い』、裸になっていなかったとします（創世記九・二〇〜二一）。そうであれば、ハムの軽率さと父への不敬虔は、現れることがなかったでしょう。その兄弟たちの、生みの親に対するうやうやしさと恥じらいも、現れなかったでしょう。また、エサウがヤコブに対して企てたたくらみは、『祝福』を奪われたことをきっかけにしたように見えました（創世記二七・四一）。しかし、それより前から、エサウの魂は、『不品行な』、『俗悪な』者となる根を持っていたのです（ヘブル一二・一六）。また、ヨセフは、どんな欲望にも捕らわれないよう備えていました。その節制の輝きも、女主人がヨセフに恋をしなかったなら、わたしたちは知ることがなかったでしょう。29:19 ですから、試みが次々と続く合間の時には、いま迫っているものに向かって立ちながら、起こりうるすべてのことに備えましょう。何が起ころうとも、備えのない者としてあばかれず、最も注意深く自分を鍛えた者として明らかにされるように、備えるのです。わたしたちが自分にできることをすべて成し遂げるなら、人の弱さのために足りないところは、神が満たしてくださるからです。神は、ご自分を『愛する者たち』と共に働いて、『万事を』『益となるように』してくださる方です（ローマ八・二八）。その人々とは、神がご自分の偽りのない予知『に従って』、あらかじめ見ておられる者たちです。その人々が自分によってどのような者になるかを、見ておられるのです。

30章　悪しき者から救われること

30:1 ルカは、『わたしたちを試みに引き入れないで』と言うことで（ルカ一一・四）、意味のうえでは次の句をも教えたのだ、とわたしには思われます。『悪しき者からお救いください』という句です（マタイ六・一三）。そして、主が、弟子には、すでに益を受けていた者として、より簡潔な形をお語りになったのは、もっともなことです。一方、多くの人々には、よりはっきりした教えを必要とする者として、より明らかな形をお語りになったのも、もっともなことです。神が『わたしたちを』『悪しき者から』救ってくださるのは、次のときではありません。敵が、どのような策略によっても、自分の意志に仕える者たちによっても、わたしたちにまったく組み打ちを挑んでこないときです。そうではなく、神が救ってくださるのは、わたしたちが、起こることに対して勇敢に立ち、勝つときなのです。わたしは、次の言葉も、このように受け取ってきました。『正しい者には患難が多い。しかし、そのすべての中から彼らを救ってくださる』（詩篇三四・一九）。実際、神が患難から『救ってくださる』のは、患難がもはや起こらなくなるときではありません。パウロも、『いつも患難を受け』ている、と言っているのですから。『患難を受け』ないときは一度もない、という意味です。そうではなく、『患難を受け』ても、神の助けによって窮しないときなのです。ここで患難を受けると言うのは、ヘブルびとのもとにある、ある伝来の言い方によります。心の向きによらずに起こる苦境について、このように言うのです。一方、窮すると言うのは、心の向きに関わるもの、すなわち、患難に負けて、それに屈してしまった者について言うのです。ですから、パウロは見事にこう言っています。『いつも患難を受けても窮しない』（第二コリント四・八）。わたしは、詩篇の次の言葉も、これと似ていると思います。『患難の中で、あなたはわたしを広くしてくださった』（詩篇四・一）。わたしたちを慰め、救ってくださる神のロゴスが、共に働き、そばにいてくださいます。それによって、苦境の時に、わたしたちの思いの明るさと快さが、神から生じます。それが、広がりと呼ばれているからです。30:2 ですから、人が『悪しき者から』救われることも、同じように受け取るべきです。神がヨブをお救いになったのは、悪魔が、これこれの試みにヨブを巻き込む権威を受けなかったことによってではありません（受けたからです）。そうではなく、ヨブが『起こったすべてのことにおいて』、『主の』前で何の罪も犯さなかったことによってです（ヨブ一・二二）。また、正しい者として現れたことによってです。こう言った者は、恥をかかされました。『ヨブはいたずらに主を敬いましょうか。あなたは、彼の外と、その家の内と、彼のすべての所有物の外とに、まわりからまがきを設けられたではありませんか。また、彼のわざを祝福し、その家畜を地にふやされたではありませんか。しかし今、あなたの手を伸べて、彼のすべての所有物を撃ってごらんなさい。彼は必ずあなたの顔に向かって、あなたをほめたたえるでしょう』（ヨブ一・九～一一）。この者は、そのときも、ヨブについて偽りを言ったことになったのです。ヨブは、これほどの苦しみを受けても、敵対する者が言っていたように、神を『顔に向かって』ほめたたえるのではありません。そうではなく、試みる者に引き渡されても、主をほめたたえ続けます。そして、『主に向かって何か言葉を言って、死になさい』と言う妻を叱ります（ヨブ二・九）。また、こう言ってとがめます。『あなたは愚かな女のひとりのように語った。われわれは主の手から幸をうけたのだから、災をも、忍ぶべきではないか』（ヨブ二・一〇）。また、二度目に、ヨブについて、『悪魔は主に言った。『皮には皮をもってします。人は自分の命のために、その持っているすべての物をも与えます。しかしいま、あなたの手を伸べて、彼の骨と肉とを撃ってごらんなさい。彼は必ずあなたの顔に向かって、あなたをほめたたえるでしょう』』（ヨブ二・四～五）。しかし、悪魔は、徳の競技者に負けて、偽りを言う者であることが示されます。ヨブは、最もつらいことを受けたにもかかわらず、耐え続けたからです。『くちびるで』、『神の』前で何の罪も犯さなかったのです（ヨブ二・一〇）。ヨブは、二度の組み打ちを戦って勝ち

ました。そして、三度目には、これほど大きな闘いを闘いません。三つにわたる組み打ちは、救い主のために取っておかれなければならなかったからです。その組み打ちは、三つの福音書に書きしるされています。人として考えられたわたしたちの救い主が、三度とも敵にお勝ちになったのです。30:3ですから、わたしたちは、『試みに』入らないことと、『悪しき者から』救われることを、悟ったうえで神に求めたいのです。そのために、これらのことをいっそう念入りに調べ、自分のうちで探りましょう。そして、神に聞くことを通して、神に聞いていただくにふさわしい者となり、願い求めましょう。試みられても殺されないように、また、『悪しき者の』火の矢に射られても（エペソ六・一六）、それによって火がつかないように、と。それによって火がつくのは、十二の預言者のひとりの言葉によれば、『心が』『炉のように』なったすべての人です（ホセア七・六）。しかし、『信仰の』たてで、『悪しき者』から自分たちに放たれる『火の矢』をすべて消す人々には、火がつきません。それは、その人々が、自分のうちに、『永遠の命に至るまでわきあがる水』の川を持つときです（ヨハネ四・一四、七・三八）。その川は、『悪しき者の』ものが力をふるうのを許しません。そうではなく、神に満ちた、救いをもたらす思いの洪水によって、それをたやすく解き崩すのです。その思いは、霊の人であろうと努める者の魂に、真理の観想から刻まれます。

31章　祈る人のありさまと姿勢、祈る場所

31:1 これまでのことに続いて、次のことを論じても、場違いではないと、わたしには思われます。祈りについての問いを論じ尽くすためです。いくらか手ほどきふうに論じるのです。まず、祈る人が持つべきありさまと姿勢です。また、祈るべき場所と、特別な事情がないかぎり目を向けるべき方角です。さらに、祈りにふさわしい、えり抜きの時と、そのほかこれらに似たことがあれば、それについてです。そして、ありさまは魂に、姿勢は体に帰すべきです。さて、上でわたしが言ったように、パウロは、ありさまを示して、『怒ったり思い乱れたりしないで』『祈る』べきだと言います。また、姿勢を示して、『きよい手をあげて』と言います（第一テモテ二・八）。この姿勢は、詩篇から取ったものだと、わたしには思われます。詩篇には、こうあります。『わたしの手をあげることが、夕べの供え物となりますように』（詩篇一四一・二）。場所については、『だから、男は、どんな場所でも祈ってほしい』とあります。方角については、ソロモンの知恵にこうあります。『それは、あなたに感謝するには太陽より先に起き、光が昇る前にあなたに願い出るべきことが、知られるためである』（知恵一六・二八）。31:2 ですから、わたしには、こう思われます。祈りに来ようとする人は、しばらく立ち止まって自分を整え、祈りの全体に向けて、いっそう心を向け、力強くなるのがよいのです。あらゆる試みと思いの乱れを捨て去り、自分が近づく方の偉大さを、できるかぎり思い起こします[1]。また、その方に、気の抜けた、緩んだ心で、いわば軽んじるようにして近づくのは不敬虔なことだ、とも思い起こします。そして、ほかのものをすべて捨て去り、そのようにして祈りに来るのがよいのです。手を伸べるより先に、いわば魂を伸べ、目を上げるより先に、知性を神に向けて張りつめさせます。立ち上がるより先に、魂の主導部分を地から起こして、万物の主に向けて立たせます。また、自分に不正を行ったと思われる人のだれかに対する恨みを、すべて捨て去ります。それも、神が自分にも恨みを抱かないでくださるよう望むのと、同じほどに捨て去るのです。祈る人自身も、不正を行い、多くの隣人に罪を犯した者なのです。あるいは、正しい道理に反してなした何かしらのことを、自分で知っている者なのです。実際、体のありさまは無数にあります。しかし、手を伸べ、目を上げるありさまを、ほかのすべてにまさって選ぶべきです。そのことを疑ってはなりません。そうする人は、祈るときに魂にふさわしい特質のかたちを、いわば体の上にも帯びるのです。ただし、これは、特別な事情がないかぎり、第一にこうすべきだ、とわたしは言っているのです。実際、特別な事情があるときには、軽くない足の病のゆえに、座って祈ることも、ときにはふさわしく許されています。あるいは、熱やそのような病のゆえに、横になって祈ることも許されています。また、周りの事情のゆえに、そうしているそぶりさえ見せずに祈ることもできます。たとえば、わたしたちが船に乗っているときです。また、用事のために、身を退いて、負っている祈りをささげることができないときです。31:3 また、ひざをかがめることについて、知るべきです。人が神の前で自分の罪を訴え出て、それのいやしとゆるしを嘆願しようとするときには、ひざをかがめることが欠かせません。それは、ひれ伏し、従う者のしるしなのです。パウロも、こう言っています。『こういうわけで、わたしは、天上にあり地上にあって『父』と呼ばれているあらゆるものの源なる父に、ひざをかがめる』（エペソ三・一四～一五）。一方、知性で捉えられる、ひざをかがめることがあります。そう呼ばれるのは、存在するもの一つ一つが、『イエスの御名によって』神の前にひれ伏したことによります。そして、神の前に自分を低くしたことによります。使徒は、次の言葉で、これを明らかにしているとわたしには思われます。『それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめるためである』（ピリピ二・一〇）。実際、天上のものの体が、体のひざまで持つような形をしていると考えるべきではありません。これらについて厳密に論じた人々のもとで、その体は球形であることが示されているのです。これを受け入れようとしない人がいるとし

ます。その人は、道理に対して恥知らずにふるまうのでないかぎり、次のことも受け入れるでしょう。神がそれらのためにお造りになったものが何一つむだにならないよう、肢体の一つ一つに働きがある、ということです。そして、その人は、どちらに転んでもつまずくでしょう。神がそれらに体の肢体を、むだに、それぞれの働きのためでなくお造りになった、と言うにしてもそうです。また、腸や直腸が、天上のものにおいてもそれぞれの働きを果たしている、と言うにしてもそうです。また、彫像のように、表面だけが人の形をしていて、深いところはもはやそうでない、と考える人がいるとします。その人は、ひどく愚かにふるまうことになるでしょう。わたしがこれらのことを言うのは、ひざをかがめることを調べ、次の言葉を見てのことです。『イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめるであろう』。また、預言者の書に書かれている『すべてのひざはわが前にかがむ』（イザヤ四五・二三）という言葉も、同じことです。31:4 場所についても、知るべきです。どんな場所も、よく祈る人によって、祈るのにふさわしい場所となります。『どんな場所でも、あなたがたはわたしに香をささげる』と、『主は言われる』からです（マラキ一・一一）。また、『だから、男は、どんな場所でも祈ってほしい』ともあります。とはいえ、一人一人が、静かに、気を散らされずに祈りを果たすためには、次のようにするのも秩序にかなっています。できるなら、自分の家のうちで、こう言ってよければ、より神聖な場所を選び、そこで祈るのです。そのとき、その場所についての全般の吟味に加えて、こう調べます。祈るこの場所で、律法に背くことや、正しい道理に反することが、かつてなされなかったかどうかです。実際、そこで律法に背いた人は、いわば、自分だけでなく、祈りの場所をも、神の見守りがそこから逃げ去るほどのものにしたのです。さらに考えてみると、この場所について、言っておくべきことがあります。重いことと思われるかもしれませんが、念入りにそれを吟味する人には、おそらく軽んじられないことでしょう。律法に背くのではない交わりがなされる場所があります。使徒の言葉によって『譲歩としてであって、命令としてではなく』（第一コリント七・六）許されている交わりです。その場所で神に願い出ることが、神にかない、清いことかどうかを、吟味すべきです。実際、しかるべきしかたで『祈に』専心することは、『合意の上でしばらく』それに身をゆだねるのでなければ、できません（第一コリント七・五）。そうであるなら、おそらく、場所についても、できるなら考えるべきでしょう。31:5 祈りの場所、すなわち信じる者たちが一つ所に集まる集会の場所には、益となる何か喜ばしいものがあります。そう考えるのが当然なのは、次のことのゆえです。信じる者たちの集まりのそばには、御使いの力が立っています。わたしたちの主、救い主ご自身の力も、そして聖徒たちの霊も立っています。わたしが思うに、先に眠った聖徒たちの霊も、また明らかに、まだ世に生きている聖徒たちの霊も立っているのです。ただ、それがどのようにしてなのかを言うのは、たやすくありません。御使いについては、こう考えるべきです。『主の使は主を恐れる者のまわりに陣をしいて彼らを救う』のだとします（詩篇三四・七）。また、ヤコブは、『すべての災からわたしを救う御使い』と言います（創世記四八・一六）。ヤコブが、自分についてだけでなく、悟っておられる神に身をささげたすべての人々についても、真実を語っているのだとします。それなら、多くの人がキリストの栄光のために真心から集まっているときには、こうなるのが当然です。一人一人の御使い、すなわち『恐れる者』一人一人の『まわりに』陣をしく御使いがいます。その御使いが、守り導くよう任されているその人と共に、陣をしくのです。こうして、聖徒たちが集まるところには、二重の教会があることになります。人々の教会と、御使いたちの教会です。また、ラファエルは、ただひとりトビトの祈りを、また、その後にサラの祈りを、『記念』としてささげた、と言います（トビト一二・一二）。サラは、トビアに嫁いだことで、のちにトビトの嫁となった人です。それなら、多くの人が、同じ心、同じ思いで共に歩み（第一コリント一・一〇）、キリストにあって一つの体とされているときには、何と言うべきでしょうか。主の力が教会に共にあることについては、パウロがこう言っています。『あなたがたもわたしの霊も共に、主イエスの力と共に集まって』（第一コリント五・四）。『主イエスの』力が、エペソ人とだけでなく、コリント人とも結びついている、というのです。また、まだ体をまとっているパウロが、コリントで自分の霊によって力を合わせると考えたのだとします。それなら、世を去った幸いな人々も、同じように、霊によって諸教会に来ることについて、望みを捨てるべきではありません。おそらく、体の中

にいる者よりも、いっそうそうするのです。ですから、教会での祈りを軽んじるべきではありません。そこに真心から集まる者にとって、その祈りは何か特別なものを持っているのです。31:6 イエスの力も、パウロとそれに似た人々の霊も、真心から集まる人々と共に歩み、共に集まります。聖徒一人一人の『まわりに』陣をしく『主の』御使いたちもそうです。それと同じように、次のように推し量るべきでしょう。ある人が、聖なる御使いにふさわしくない者となったとします。そして、罪を犯し、神を軽んじて律法に背くことによって、悪魔である御使いに自分をゆだねたとします。そのような者は、似た者がまれであるうちは、御使いたちの摂理の目を長く逃れることはないでしょう。その摂理は、教会を見守る神のみこころに仕えて、そのような者の罪過を多くの人々に知らせるのです。しかし、そのような者たちが多くなり、人間的な徒党を組んで集まることもあります。より体に関わる何かを営みながら集まるのです。そうなれば、見守られることはないでしょう。このことは、イザヤ書で主がお語りになる言葉に示されています。『あなたがたが、わたしの前に姿を現そうとして来ても』（イザヤ一・一二）、むだなのです。主は、こうお語りになるからです。『わたしは、あなたがたから目をそむける。たとい願いを多くしても、わたしは聞かない』（イザヤ一・一五）。前に、聖なる人々と幸いな御使いたちの二重の集いについて述べました。おそらく、それに代わって、こんどは、不敬虔な人々と悪い御使いたちの二重の集まりが、一つ所に生じるからです。そして、そのような者たちの集まりについて、聖なる御使いたちと神聖な人々は、こう言うでしょう。『わたしは、むなしさの会合と共にすわらなかった。律法に背く者と共に入ることはしない。わたしは悪を行う者の教会を憎んだ。不敬虔な者と共にすわることはしない』（詩篇二六・四～五）。31:7 このことのゆえに、わたしはこう思います。エルサレムとユダヤ全土で、多くの罪を犯すようになった人々がいました。その人々が敵の手に落ちたのは、律法を捨てた民が見捨てられたことによるのです。神にも、盾となって守る御使いたちにも、聖なる人々による救いにも、見捨てられたのです。実際、集まり全体が、ときに見捨てられて、試みに陥ることもあります。『持って』いると思っている『ものまでも』取り去られるために（ルカ八・一八）、そうなるのです。のろわれたいちじくと同じです。いちじくは、飢えておられたイエスに実を差し上げなかったので、『根元から』取り去られました（マルコ一一・二〇）。その人々は枯れていき、信仰による命の力を少しでも持っていたなら、それさえ失うのです。わたしは、祈りの場所を調べ、場所としての特別なものを示してきました。聖徒たち、しかも、いっそう敬虔に教会として一つ所に集まる人々の集会についてです。そのためには、これらのことを言うのが欠かせなかったと、わたしには思われます。

訳注

1 『試み』を『気を散らすもの』と直す説もある。

32〜34章　祈りの方角、祈りの四つの項目、結び

32:1 さて、祈るときに目を向けるべき方角についても、少し述べておくべきです。方角は四つあります。北と南の方角、西と東の方角です。そのうち東の方角が、次のことをはっきり示していると、だれがすぐに認めないでしょうか。魂がまことの光の昇るところを見つめている、というしるしとして、そちらを向いて祈りをささげるべきだ、ということです。ある人が、家の戸口がどちらに向いていようと、むしろ家の開いているほうに向かって願い出をささげたいと望むとします。天を仰ぐことには、壁を見ることよりも、人を引きつける何かがある、と言うのです。そして、たまたま家の東側が開いていないとします。その人には、こう言うべきです。人の建物は、人の定めによって、あれこれの方角に開いています。しかし、東は、本性によって、ほかの方角にまさって選ばれています。それなら、本性によるものを、定めによるものよりも先にすべきです、と。さらに、野で祈ろうとする人は、この言い分によるなら、どうして西よりもむしろ東に向かって祈るでしょうか。しかし、野では道理にかなって東を選ぶべきなら、どうして、どこでもそうすべきでないことがあるでしょうか。これについては、ここまでにしておきます。

33:1 祈りの項目について、なお論じ、そうして論を閉じるのがよいと、わたしには思われます。書き示すべき項目は四つあると、わたしには思われます。わたしは、それらが聖書の中に散らばっているのを見いだしました。一人一人が、これらの項目に沿って、祈りに形を与えるべきです。その項目とは、次のとおりです。まず、祈りの初め、その序のところで、力の限り、神の栄光をたたえる言葉を語るべきです。キリストを通して、聖霊において語り、キリストの栄光も共にたたえ、聖霊も共にほめたたえるのです。その後で、一人一人が、みなに共通の感謝を置くべきです。多くの人々への恩恵を、感謝のときに持ち出すのです。また、自分ひとりが神から得たものへの感謝も置くべきです。感謝の後には、自分の罪を厳しく訴える者となって、神の前で求めるべきだと、わたしには思われます。第一に、罪を犯させる性向から解き放たれるための、いやしを求めます。第二に、これまでの罪のゆるしを求めます。罪の言い表しの後に、第四に、大きなもの、天のものについての求めを、つなげるべきだと、わたしには思われます。自分ひとりのものも、みなに共通のものも求め、身内の者と最も親しい者のためにも求めるのです。そして、すべての終わりに、キリストを通して、聖霊において、神の栄光をたたえる言葉で、祈りを閉じるべきです。33:2 わたしは、前に言ったように、これらの項目が聖書の中に散らばっているのを見いだしました。栄光をたたえる言葉の項目は、第百三篇の次の言葉にあります。『主よ、わが神よ、あなたはいとも大いなる方です。あなたは誉と威厳とをお召しになり、光を衣のようにおまといになり、天を皮のようにお張りになる方。水の中におのが高殿の屋根をおふきになり、雲をおのれの乗り物となさり、風の翼に乗ってお歩きになる方。おのが御使いたちを風となさり、おのれに仕える者たちを火の炎となさり、地をその堅い基の上におすえになる方。地はとこしえに傾くことがない。淵は衣のようにその覆いとなり、山々の上に水が立つ。あなたのとがめによって水は逃げ、あなたの雷の声によっておじまどう』（詩篇一〇四・一〜七）。この詩篇の大部分も、父の栄光をたたえる言葉を含んでいます。自分でもっと多くの箇所を集めてみれば、栄光をたたえる言葉の項目が、多くのところに散らばっていることがわかります。33:3 感謝の例としては、王国の第二の書にある次の言葉を挙げておきましょう。ナタンを通してダビデに与えられた約束の後で、ダビデが語った言葉です。ダビデは神の賜物に驚き、それを感謝して、こう言いました。『わが主、主よ、わたしがだれ、わたしの家が何であるので、あなたはこれほどまでにわたしを愛してくださったのですか。わが主よ、わたしは、あなたの前で、ほんの小さな者とされました。そして、あなたは、しもべの家について、はるか後のことまでお語りになりました。わが主、主よ、これが人の律法です。ダビデはこの上、何をあなたに申しあげることができましょう。主よ、今、あなた

はしもべを知っておられます。しもべのゆえに、あなたは行ってくださいました。あなたの心に従って、このあなたの大いなることをすべて行い、しもべに知らせてくださいました。あなたをあがめるためです、わが主、主よ』（第二サムエル七・一八～二二）。33:4 罪の言い表しの例は、次の言葉です。『わたしのすべてのとがから、わたしを救ってください』（詩篇三九・八）。また、ほかのところには、こうあります。『わたしの愚かによって、わたしの傷は悪臭を放ち、腐れただれました。わたしは悩み、いたく折れかがんで、ひねもす悲しんで歩くのです』（詩篇三八・五～六）。33:5 求めの例は、第二十七篇にあります。『罪人と共にわたしを引き行かないでください。悪を行う者らと共に、わたしを滅ぼさないでください』（詩篇二八・三）。また、これに似た言葉があれば、それも例となります。33:6 栄光をたたえる言葉で始めた人は、栄光をたたえる言葉で終えて、祈りを閉じるのが、道理にかなっています。万物の父を、『イエス・キリストにより』、聖霊において、ほめたたえ、父に栄光を帰しながら、閉じるのです。『このかたに、栄光が永遠より永遠にあるように』（ローマ一六・二七）。

34:1 以上が、わたしが力の限り論じ抜いてきたことです。祈りについての問題と、福音書にある祈りと、マタイのもとでその祈りの前に語られていることについてです。学ぶことをこよなく好み、神を敬うことにおいてまことに真実な兄弟姉妹、アンブロシオスとタティアネよ。しかし、わたしは、次の望みを捨てていません。あなたがたが『前のものに』からだを伸ばし、後ろのものを忘れ（ピリピ三・一三）、そのようにしながら、わたしのために祈ってくれるとします。そうすれば、わたしはこのすべてについて、より多く、より神聖なことを、与えてくださる神から受け入れることができるでしょう。そして、それを受けてはじめて、同じことを、もう一度、より気高く、より高く、より明らかに論じることができるでしょう。ただ、今のところは、寛容な心で、これを読んでください。

祈りについて

2026年11月23日版

著者　オリゲネス

制作　藤遥

発行　christian-classics-jp

公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/origen-on-prayer/

原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/origen-on-prayer

全文を、ギリシア語原文（Περὶ εὐχῆς）からAIを使って翻訳しました。

訳文はCC BY-SA 4.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。